



埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第190集

上里町

中堀遺跡

御陣場川堤調節池関係
埋蔵文化財調査報告
〈第2分冊〉

1997

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目次

口 絵
序
例 言
目 次

(第1分冊)

I 調査の概要	1
1 調査に至る経過	1
2 発掘調査・報告書作成の経過	2
3 発掘調査・整理・報告書作成の組織	4
II 立地と環境	7
III 遺跡の概要	15
IV 遺構と遺物	21
1 縄文時代	21
2 古墳時代	33
(1) 竪穴式住居跡	33
(2) 溝跡	41
3 古代	43
(1) 竪穴式住居跡	44
(第140号住居跡まで)	326

(第2分冊)

(第141号住居跡から)

(2) 掘立柱建物跡	579
(3) 建物地業跡	707
(4) 区画溝・溝・集石列	749
(5) 柵列・道路跡・橋状遺構	807
(6) 土壌	821
(7) 井戸跡	927
(8) 竪穴状遺構	935
(9) 鍛冶炉跡	949
(10) 大甕埋設遺構	955
(11) 土器埋設遺構	967

(第3分冊)

(12) 馬骨・人骨	975
(13) 畝状遺構・風倒木痕	977
(14) 小穴	981
(15) 遺物包含層中の遺物	995
a 9世紀の遺物出土状況	995
b 10世紀の遺物出土状況	1001
c 灰釉陶器・緑釉陶器・白磁・ 黒色土器	1004
d 長頸壺	1017
e 大甕	1018
f 土錘	1023
g 平瓦・丸瓦	1031
h フイゴ羽口	1037
i 金属製品	1042
J 円板状土製品	1045
k 切石	1045
l 置きカマド	1045
m 砥石	1045
n 棹秤の権	1046
4 中世	1047
(1) 竪穴状遺構	1049
(2) 掘立柱建物跡	1055
(3) 溝	1055
(4) 集石	1056
(5) 火葬墓	1061
(6) 中世の遺物	1061

(第4分冊)

V 結語	1065
附編	1392

(第5分冊)

写真図版

第141号住居跡（第246図）

I-11グリッドで確認した。周辺は、住居・土壇・小穴などの遺構が密集し、確認に手間取った。

住居跡の大半は第142号住居跡が破壊したため、不明な点が多かった。

住居跡の形状は、長方形であった。残存した北壁の長さは2.90m・深さ0.45mであった。北西隅に幅0.3mの壁溝を検出した。

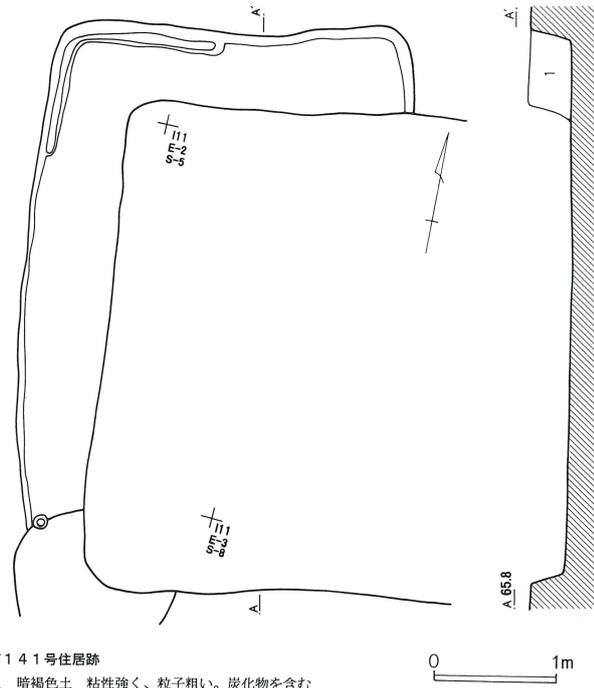
主軸方位は、N-168°-Eと推定した。

遺構の切り合い関係は、第142号住居跡、第320号土壇より古く、第330号土壇より新しかった。

1は、土師器の坏AⅣである。2は、土師器の皿である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第141号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第246図 第141号住居跡・出土遺物



第142号住居跡（第247図）

I-11グリッドで確認した。周辺は、住居・土壇・小穴などの遺構が密集し、確認に手間取った。

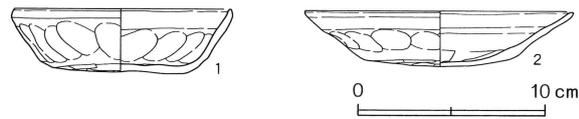
住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.82m・短辺3.30m・深さ0.32mであった。

主軸方位は、N-82°-Eであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。袖は、当初から造られなかったと判断した。焚き口部の両側には川原石が補強材として使用されていた。燃焼部の掘り込みはみられなかった。

貯蔵穴は、カマドの右側で検出した。形状は、楕円形であった。規模は、長径0.75m・短径0.48m・深さ0.33mであった。覆土中には、炭化物が多量に含まれていた。

遺構の切り合い関係は、第141号住居跡、第320号土壇より新しかった。



遺物は、カマド内から土師器の坏（3）・須恵器の皿（13）が、貯蔵穴内から土師器の坏（7・9）・台付甕（18）が出土し、住居跡の南西隅の壁際から土師器の坏（4）が出土した。

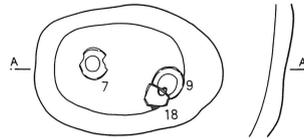
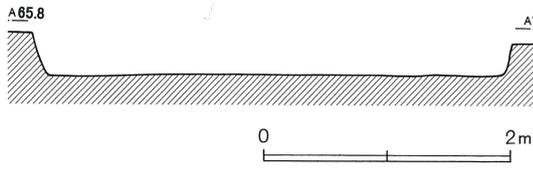
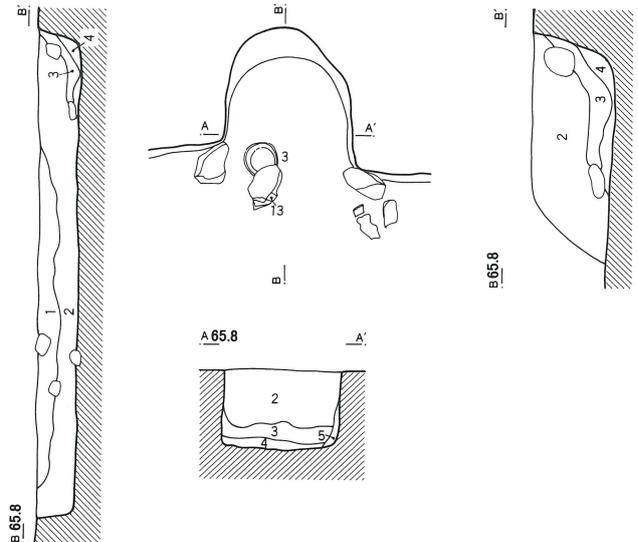
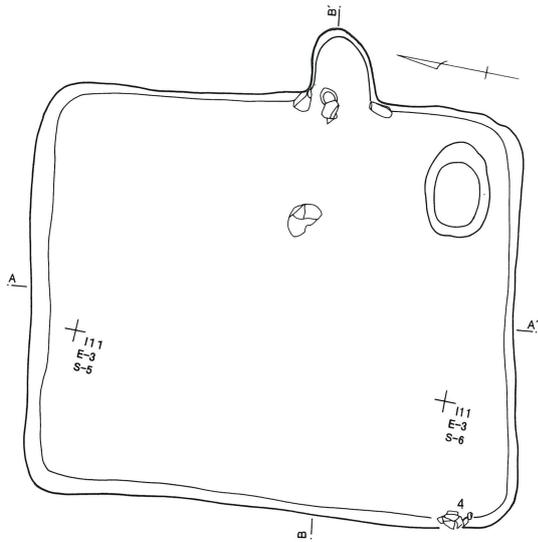
1から9は、土師器の坏である。8は、坏AⅣである。1・3・7は、坏AⅤである。ほかは、坏AⅥである。9は、小生途上で焼け歪み、変形している。1・6は、底部が欠損している。

10・11は、高台付碗である。10は須恵器（HS）、11は須恵器（NS）である。12・13は、皿である。12は、須恵器（NS）、13は須恵器（HS）である。10は、底部と高台が欠損している。

第206表 第141号住居跡出土遺物観察表

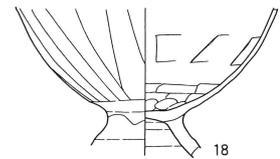
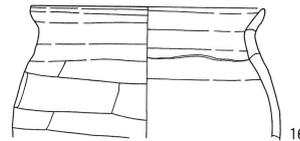
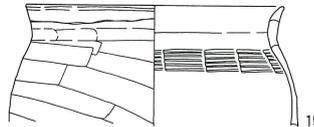
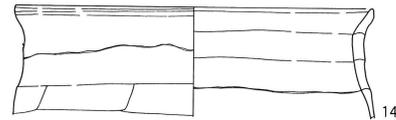
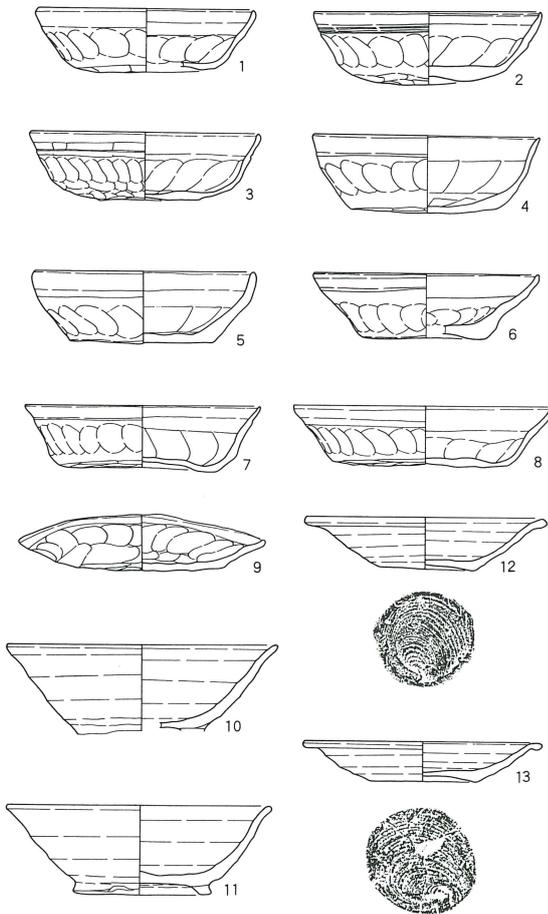
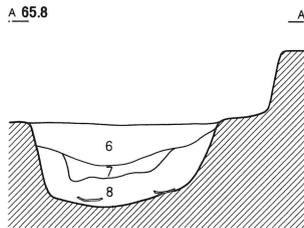
番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 AⅣ	H	11.4	3.5		7.0	B, D, E	普通		淡黄橙	80	
2	皿	H	14.0	3.0		8.0	B, C, E	普通		淡橙	50	

第247図 第142号住居跡・出土遺物



第142号住居跡

- 1 暗褐色土 焼土、炭化物、白色粒子を少量含む
- 2 黒褐色土 焼土、炭化粒子を微量含む 粘性あり
- 3 暗褐色土 焼土、炭化物を少量含む 粘性あり
- 4 暗褐色土 焼土、焼土ブロックを部分的に集中して含む 炭化物を少量含む、灰を多量に含む
- 5 暗褐色土 焼土、炭化物を微量含む
- 6 黒褐色土 焼土炭化物を微量含む
- 7 黒色土 焼土を微量含む 炭化物層
- 8 黒褐色土 焼土、炭化物を少量含む 土器片を多量含む



第207表 第142号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A V	H	11.2	3.4		7.3	B, C, E	不良		淡黄橙	50	
2	坏 A VI	H	11.8	3.9		8.0	B, E, H	普通		淡黄橙	70	カマド
3	坏 A V	H	11.9	3.6		5.3	B, E	良好		淡黄橙	100	カマド
4	坏 A IV	H	11.8	4.1		7.6	B, E	普通		淡黄橙	100	
5	坏 B	H	11.5	3.9		7.6	B, E	普通		淡黄橙	80	
6	坏 B	H	11.8	3.5		6.4	B, E, H	普通		淡黄橙	40	
7	坏 A V	H	12.3	3.5		7.7	B, D, E	普通		淡黄橙	90	貯蔵穴
8	坏 A IV	H	13.6	3.2		9.3	B, D, E	普通		淡黄橙	30	
9	坏 A VI	H	12.9	3.0		7.7	B	普通		赤褐	100	
10	高台付椀	HS	14.2				B, E	良好		にぶい黄橙	80	
11	高台付椀	NS	13.8	4.8		6.5	I	普通		黄灰	80	
12	須恵皿	NS	12.4	2.8		4.9	B	良好		灰黄	90	
13	須恵皿	HS	12.4	2.1		5.6	B, D	良好		にぶい橙	95	カマド
14	甕 B III a	H	18.7				B, C, H	良好		淡黄橙	30	
15	甕 A III c	H	13.3				B, E	良好		外-にぶい黄橙。内-浅黄橙	60	貯蔵穴
16	台付甕	H	12.0				B, H	良好		橙	40	カマド
17	甕底部	H				8.8	B, C, E	普通		淡黄褐	底部付近のみ	カマド 砂
18	台付甕	H					B, E, H	良好		橙	60	貯蔵穴

14から18は、土師器の甕である。14は胴部上位以下、15・16は胴部中位以下が欠損している。17は底部のみ、18は脚部のみである。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第142号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第143号住居跡（第248図）

H-11、I-11・12グリッドで確認した。周辺は、土壌・掘立柱建物跡・小穴などの遺構が密集していた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.30m・短辺2.63m・深さ0.22mであった。

主軸方位は、N-100°-Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。袖は、当初から造られなかったと判断した。焚き口部の右側は、

袖のように細長く地山が掘り残されていた。貯蔵穴との仕切りの施設であろうか。燃焼部は、整った楕円形であった。底面の掘り込みはみられなかった。燃焼部から煙道部には、緩い段をもって移行していた。

貯蔵穴は、カマドの右脇で検出した。形状は、円形であった。規模は、径0.47m・深さ0.15mであった。

遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、カマド内から須恵器の高台付椀（2）・羽釜（3）が出土した。

1・2は、須恵器（HS）の高台付椀である。2は、口縁部が欠損している。

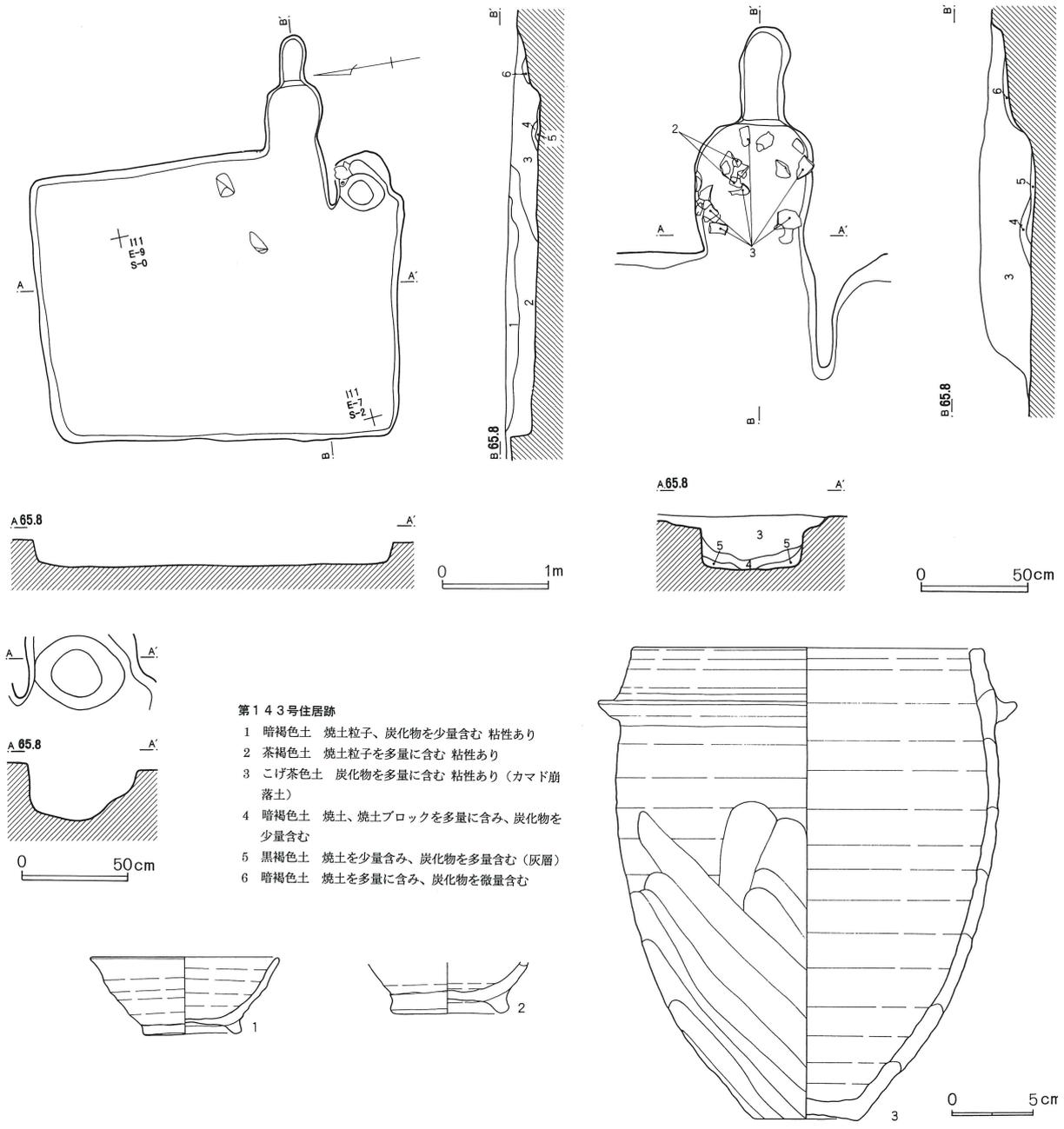
3は、須恵器（HS）の羽釜である。

以上、出土遺物から第143号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第208表 第143号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	HS	11.3	4.8		5.6	B, E, H	やや不良		浅黄橙	80	カマド
2	高台付椀	HS				6.4	B, E, H	良好		橙	100	カマド
3	羽A II a 口	HS	21.3		3.5		B, C, E	良好		浅黄橙	30	カマド

第248図 第143号住居跡・出土遺物



- 第143号住居跡
- 1 暗褐色土 焼土粒子、炭化物を少量含む 粘性あり
 - 2 茶褐色土 焼土粒子を多量に含む 粘性あり
 - 3 こげ茶色土 炭化物を多量に含む 粘性あり (カマド崩落土)
 - 4 暗褐色土 焼土、焼土ブロックを多量に含む、炭化物を少量含む
 - 5 黒褐色土 焼土を少量含む、炭化物を多量含む (灰層)
 - 6 暗褐色土 焼土を多量に含む、炭化物を微量含む

第144号住居跡 (第249図)

I・J-11グリッドで確認した。周辺は、住居・土壇・溝・掘立柱建物跡などの遺構が密集していた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.21m・短辺2.32m・深さ0.22mであった。

主軸方位は、N-3°-Eであった。

カマドは、検出されなかった。

遺構の切り合い関係は、第323・336号土壇より古く、

第327・328号土壇より新しかった。

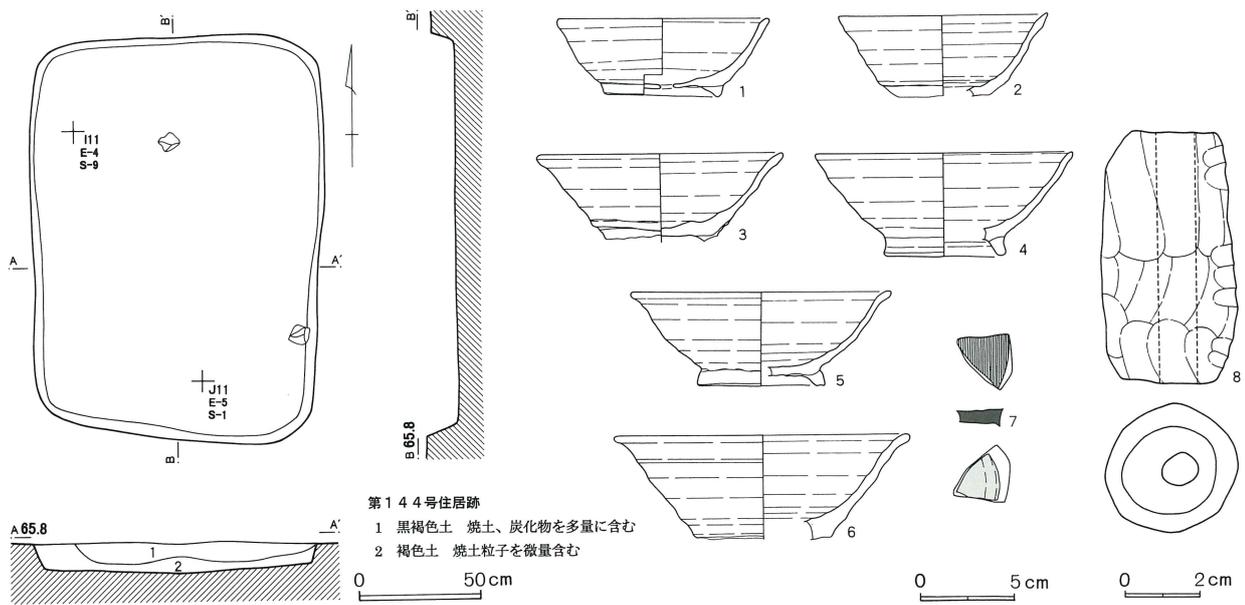
1から6は、高台付椀である。1・3・6は、須恵器 (NS) である。ほかは、須恵器 (HS) である。

1・4・5は底部、2・6は底部と高台、3は高台が欠損している。

7は、緑釉陶器の高台付椀である。7は、底部破片である。

8は、土錘である。

第249図 第144号住居跡・出土遺物



第209表 第144号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	罫	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付 椀	HS	10.9	4.2		6.1	B, E	良好		浅黄橙		底部-100。口縁-50
2	高台付 椀	NS	10.9				B, E	良好		灰白	25	
3	高台付 椀	HS	12.7				B, E	普通		浅黄	40	
4	高台付 椀	NS	13.5	5.5		6.0	B, C, E	普通		灰白	70	
5	高台付 椀	NS	13.5	5.0		6.6	B	良好		灰白	20	
6	高台付 椀	HS	15.0				A, B, E, H	良好		浅黄橙	15	
7	高台付 椀	M					B	普通		淡緑	5	

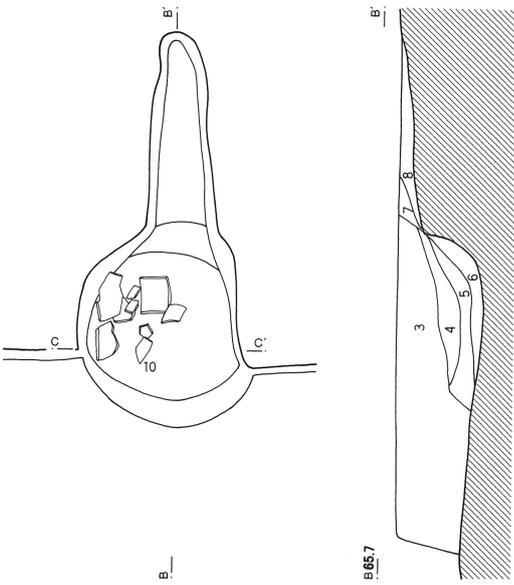
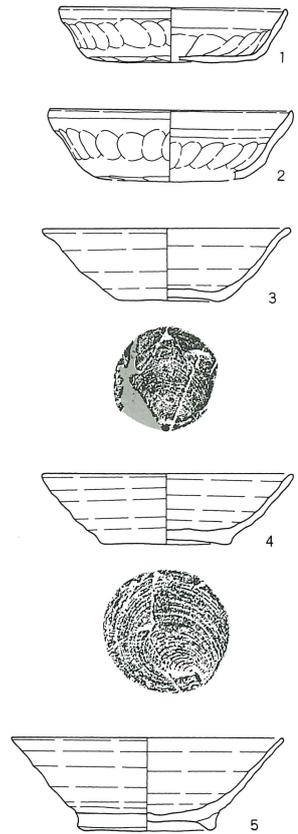
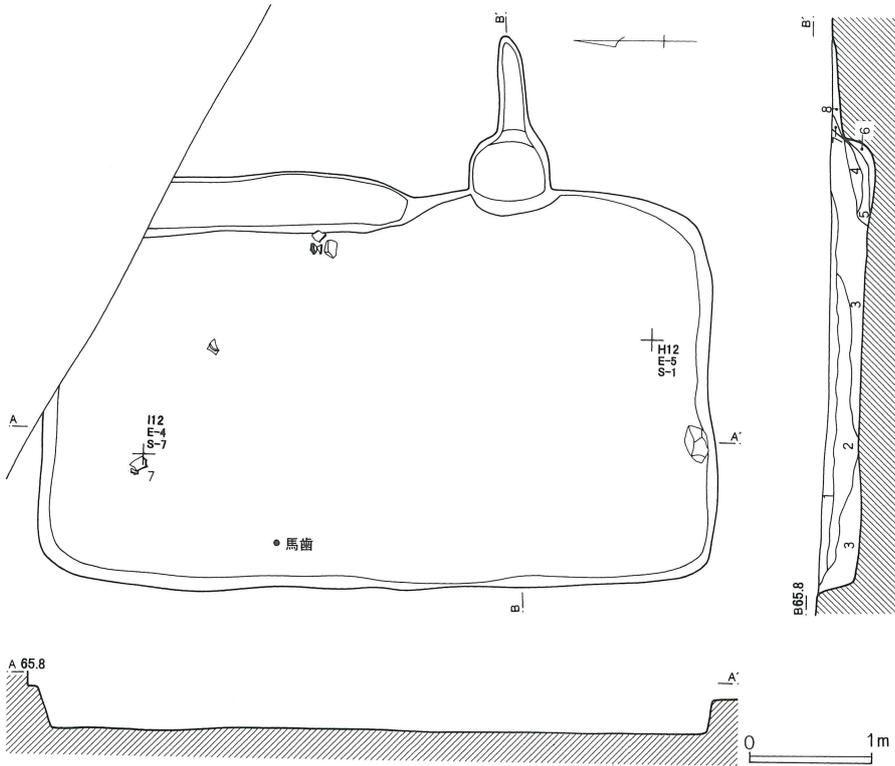
第210表 第144号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
8	にぶい 褐	100	6.7	3.5	0.9	103.5	A1	Ib	10	

第211表 第145号住居跡出土遺物観察表

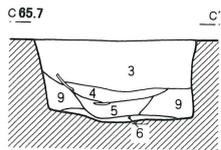
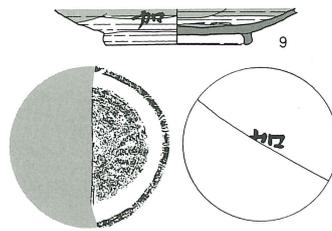
番号	器種	種別	口径	器高	罫	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A IV	H	11.8	2.9		8.8	B, D	普通		暗茶褐	30	
2	坏 A IV	H	12.6				B, D, E	普通		淡黄橙	30	
3	椀	NS	12.9	3.9		5.2	B, E, I	良好		灰黄	75	
4	椀	NS	13.2	3.7		6.8	B, I	普通		黄灰	50	
5	高台付 椀	NS	14.1	4.9		6.6	B	普通		黄灰	50	
6	高台付 椀	S	16.6	8.0		7.5	B, D	良好		灰	50	
7	高台付 椀	NS				8.0	B, E	普通		灰白	40	
8	高台付 皿	NS	13.6	3.1		6.8	B	普通		灰白	70	
9	高台付 皿	K				7.5	B, D	良好		淡灰	30	
10	甕 A II c	H	19.0				B, E	良好		橙	30	カマド

第250図 第145号住居跡・出土遺物

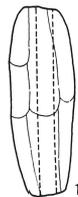


第145号住居跡

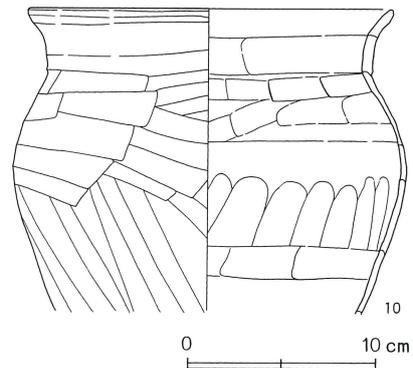
- 1 暗赤褐色土 焼土、小砂利を多量に含む 粘性あり
- 2 こげ茶色土 焼土を少量含む 粘性あり
- 3 暗褐色土 焼土、炭化物を多量に含む 粘性あり (遺物多量)
- 4 暗褐色土 焼土を多量に含む
- 5 黒褐色土 焼土、焼土ブロックを多量に含む、灰、炭化物を微量含む
- 6 黒褐色土 焼土を多量含む、炭化物を少量含む (灰層)
- 7 明赤褐色土 焼土を多量に含む
- 8 灰黄褐色土 焼土、焼土ブロックを少量含む、炭化物を微量含む
- 9 暗褐色土 焼土を微量含む



0 50 cm



0 2 cm



以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第144号竪穴式住居跡を中堀Ⅷ期に位置付けたい。

第145号住居跡（第250図）

G・H-12グリッドで確認した。周辺は、掘立柱建物跡・土壇・小穴などの遺構が密集していた。

住居跡の北東隅が調査区外であったが、ほぼ全容を知ることができた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺5.35m・短辺3.15m・深さ0.25mであった。カマド左側の東壁沿いには、長さ2.2m・幅0.43m・床面からの高さ0.11mの棚状の施設を検出した。

主軸方位は、N-87°-Eであった。

カマドは、東壁の南寄りに検出した。袖は、当初から造られなかったと判断した。燃焼部の底面は、円形に浅く掘り込まれていた。燃焼部から煙道部には、段をもって移行していた。

遺構の切り合い関係は、第357号土壇より新しかった。

遺物は、カマド内から土師器の甕（10）が出土した。

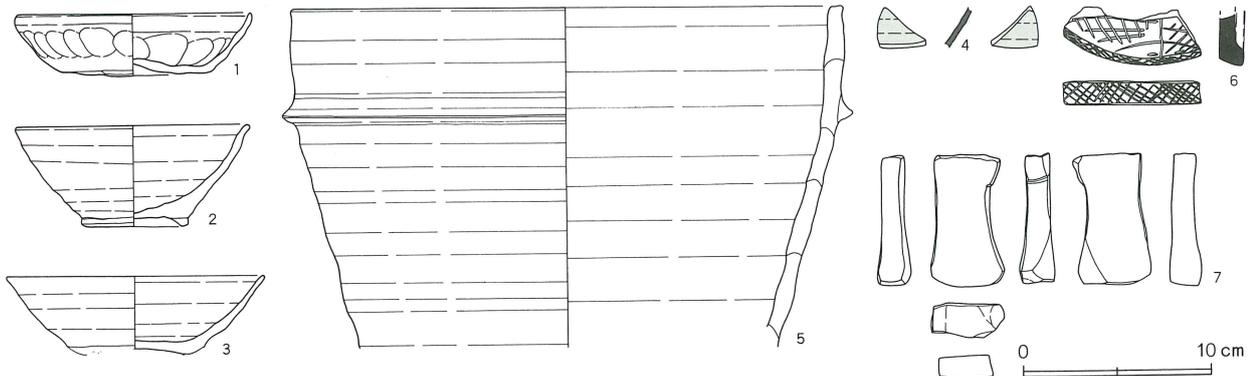
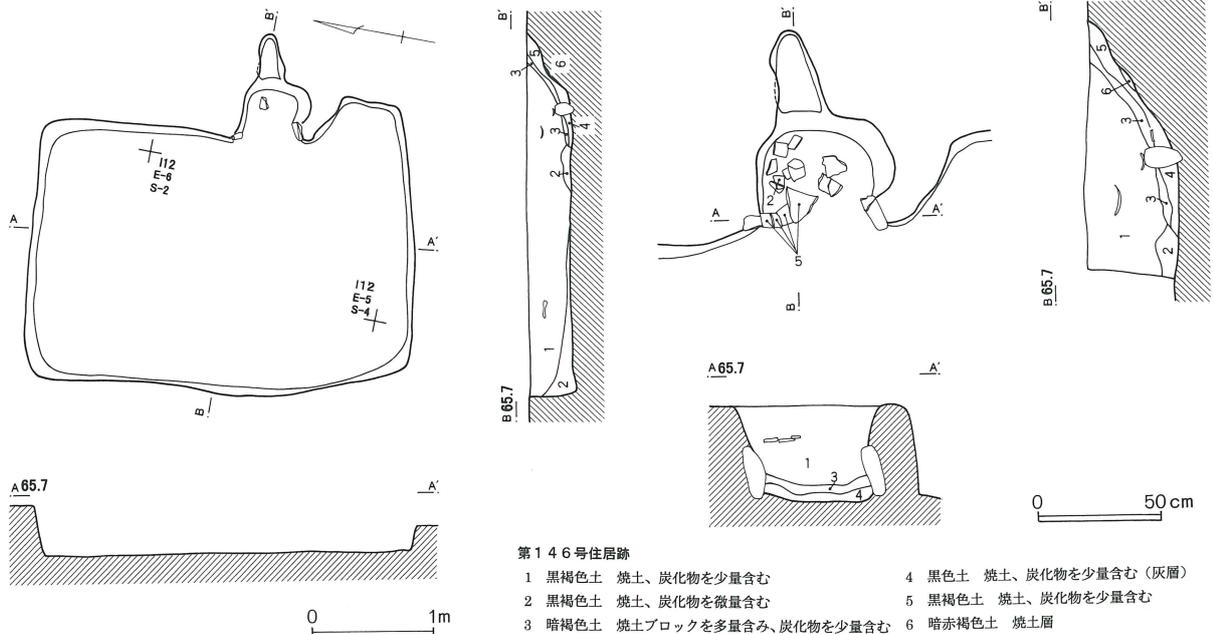
1・2は、土師器の坏AⅣである。1・2は、底部が欠損している。

3・4は、須恵器（NS）の椀である。

5から7は、高台付椀である。5・7は、須恵器（NS）、6は須恵器（HS）である。

8は、須恵器（NS）の高台付皿である。

第251図 第146号住居跡・出土遺物



9は、灰釉陶器の高台付皿であり、底部外面に墨書「加」がみられる。9は、口縁部が欠損している。

10は、土師器の甕である。10は、胴部下位以下が欠損している。

11は、土錘である。

12は、棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第145号竪穴式住居跡を中堀V期に位置付けたい。

第146号住居跡（第251図）

I-12グリッドで確認した。周辺は、掘立柱建物跡・土壇・小穴などの遺構が密集し、確認に手間取った。

住居跡の形状は、不整長方形であった。規模は、長辺3.03m・短辺2.30m・深さ0.35mであった。

主軸方位は、N-89°-Eであった。

カマドは、東壁の南寄りに検出した。右袖は、地山を掘り残して造られ、住居跡内に短く延びていた。左袖は、住居跡の壁をそのまま利用した「片袖型」カマドであった。右袖と焚き口部の左側には、川原石が補強材として使用されていた。燃焼部は、右側にやや張りをもっていた。燃焼部の中央左寄りには、川原石が支脚として使用されていたことから、二つ掛けカマドと推定した。燃焼部と煙道部の境には段がみられず、煙道部は緩やかに傾斜していた。

遺構の切り合い関係は、第147号住居跡より新しかった。

遺物は、カマド内から須恵器の高台付椀（2）・甌（5）が出土した。

1は、土師器の坏AVである。2・3は、高台付椀である。2は須恵器（NS）、3は須恵器（HS）である。3は、高台が欠損している。

4は、緑釉陶器の高台付椀である。4は、体部破片である。

5は、須恵器（NS）の甌である。5は、胴部中位以下が欠損している。

6は、硯の蓋と考えられる。

7は、砥石である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第146号竪穴式住居跡を中堀V期に位置付けたい。

第147号住居跡（第252図・第253図）

I-12グリッドで確認した。周辺は、掘立柱建物跡・土壇・小穴などの遺構が密集し、確認に手間取った。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺4.59m・短辺4.15m・深さ0.37mと比較的大形の住居跡であった。

主軸方位は、N-5°-Eであった。

カマドは、北壁の北東寄りに検出した。袖は造らず、焚き口部の右側に凝灰岩の切石が補強材として使用されていた。燃焼部の掘り込みはみられず、奥に向かって緩やかに傾斜していた。

貯蔵穴は、カマドの右側北西隅で検出した。形状は

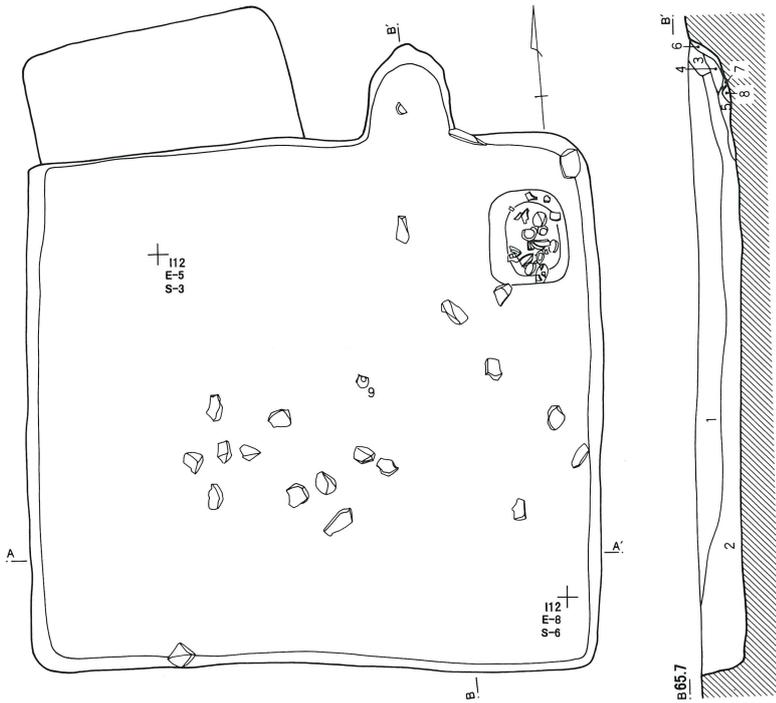
第212表 第145号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
11	にぶい赤褐	100	5.0	1.8	0.5	14.7	B1	Ib	56	

第213表 第146号住居跡出土遺物観察表

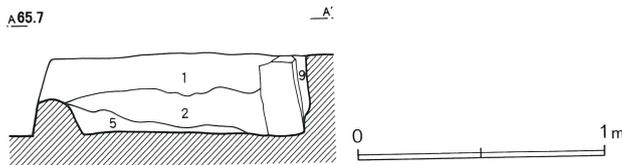
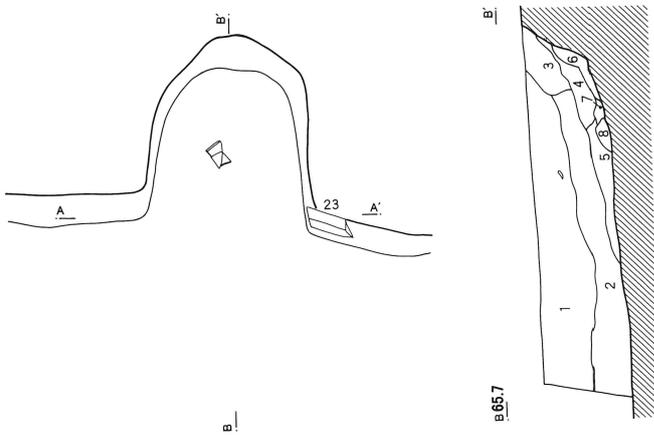
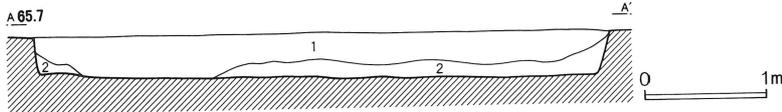
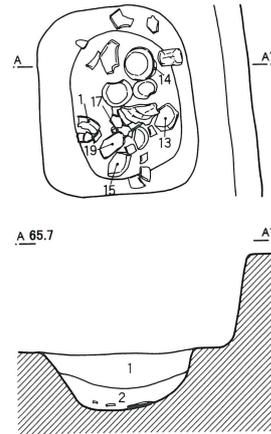
番号	器種	種別	口径	器高	罅	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏AV	H	12.3	3.3		7.6	B, D, E	普通		黄褐	70	
2	高台付椀	NS	12.1	5.4		5.0	B, C, E, I	普通		灰白	70	
3	高台付椀	HS	13.5				B, C, H	良好		橙	40	
4	高台付椀	M					B	普通		淡緑	5	
5	甌BI	NS	29.0		5.6		B, E, G, H	良好		灰白	15	カマド
6	硯の蓋	S					F	良好		黒褐	10	カマド

第252図 第147号住居跡



第147号住居跡

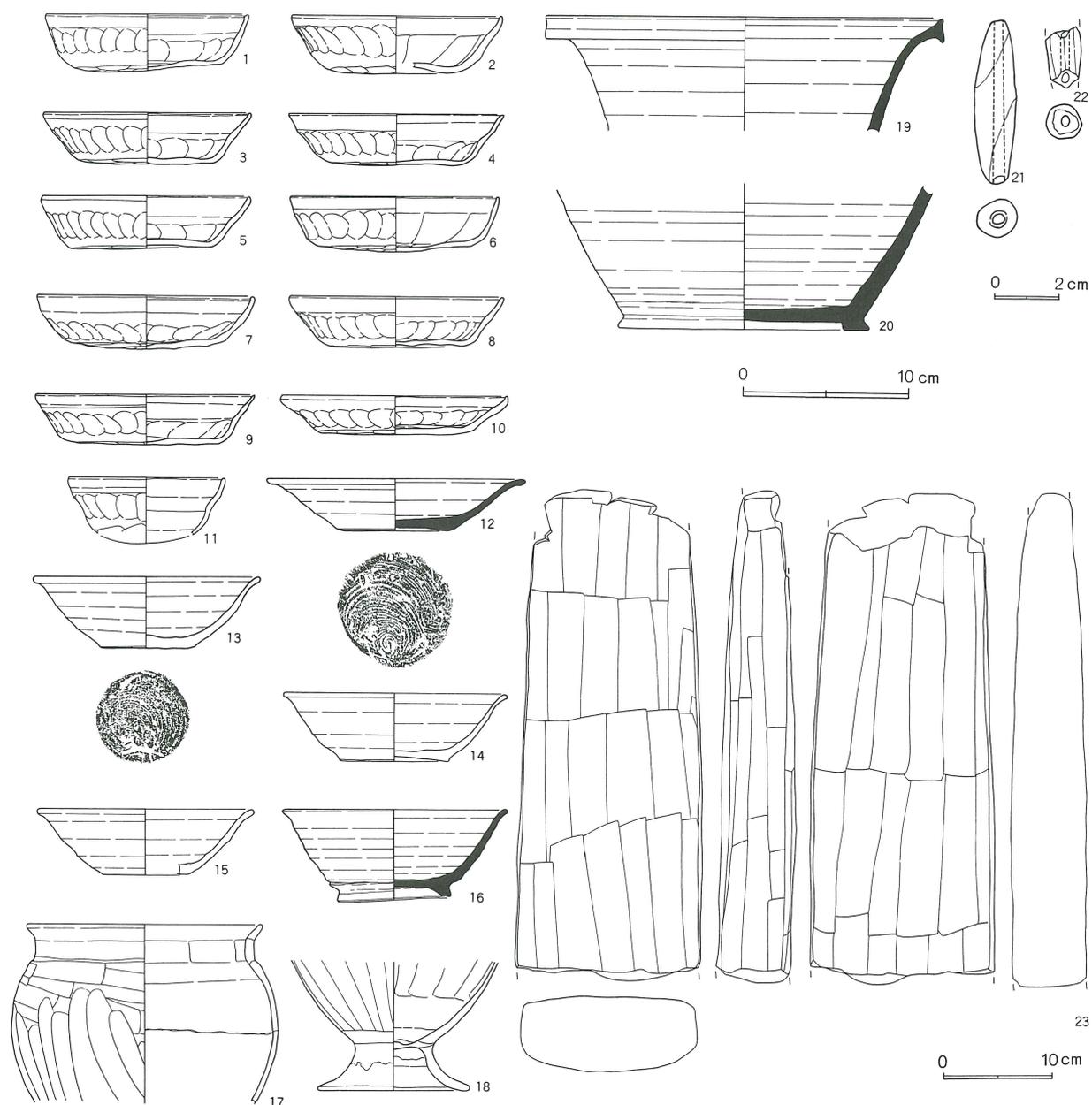
- 1 黄褐色土 白色粒子を均等に含む。焼土、炭化物、礫を少量含む、白色粒子を多量に含む
- 2 黒褐色土 焼土、炭化物、礫を少量含む 粘性あり
- 3 黒褐色土 焼土を多量に含む、炭化物を少量含む
- 4 黒褐色土 焼土を多量に含む、炭化物、灰を少量含む
- 5 暗褐色土 焼土、炭化物、灰を多量に含む 粘性あり
- 6 黒褐色土 焼土を少量含む、炭化物を微量含む
- 7 黒褐色土 5層中に炭化物、灰をより多く含む
- 8 黒褐色土 5層中に焼土ブロックを多く含む部分
- 9 暗褐色土 焼土粒子を微量含む
- 10 暗褐色土 炭化物を微量含む 粘性あり
- 11 黒褐色土 焼土、炭化物を少量含む 粘性あり



第214表 第147号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
21	にぶい橙	100	5.0	1.2	0.4	6.4	C 1	I a	159	
22	にぶい橙	20		1.1	0.4	1.7	C 2	IV a	405	

第253図 第147号住居跡出土遺物



長方形で規模は、長径0.75m・短径0.61m・深さ0.22mであった。

遺構の切り合い関係は、第146号住居跡より古かった。

遺物は、貯蔵穴内から土師器の坏（1）・須恵器の坏（13・14・15）・土師器の甕（17）が出土した。

1から9は、土師器の坏である。1・7・8は、坏AⅣ、2から5・9は、坏AⅤ、他は坏AⅥである。10は、土師器の皿である。11は、坏Aと考えられる。

2・11は、底部が欠損している。

12は、須恵器（S）の皿である。

13から15は、須恵器（NS）の碗である。15は、底部が欠損している。

16は、須恵器（S）の高台付碗である。

17・18は、土師器の甕である。17は、胴部下位以下が欠損している。18は、脚部のみである。

19・20は、須恵器（S）の甕である。19は口縁部のみ、20は底部のみである。

第215表 第147号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A	IV	H	11.9	3.5	8.7	B, D, E	普通		明 橙	90	貯穴
2	坏 A	V	H	12.4	3.5	7.8	B, D, E	良好		暗 黄 褐	30	
3	坏 A	V	H	12.2	3.1	7.9	B, D, E	普通		黄 褐	90	
4	坏 A	V	H	12.7	3.1	8.2	B, E	普通		淡 黄 褐	50	
5	坏 A	V	H	12.3	3.2	8.4	B, D, E	普通		明 橙	70	貯穴
6	坏 A	VI	H	12.3	3.3	9.1	B, D, E	良好		淡 橙	100	貯穴
7	坏 A	IV	H	12.7	3.2	7.0	B, E	良好		淡 黄 橙	40	貯穴
8	坏 A	IV	H	12.6	3.1	7.9	B, D, E	普通		淡 橙	70	
9	坏 A	V	H	13.0	3.0	8.3	B, D, E	普通		淡 黄 褐	60	貯穴
10	皿		H	13.4	2.3	8.7	B, D, E	良好		淡 黄 橙	80	貯穴
11	坏	A	H	9.3			B, E, G	良好		黄 褐	40	貯穴
12	皿		S	14.9	3.1	5.8	B	良好		灰	60	
13	椀		NS	13.1	4.3	5.5	B, E	普通		灰 黄 白	80	貯穴
14	椀		NS	13.1	4.1	6.4	B	普通		灰 白	40	貯穴
15	椀		NS	12.7	3.9	5.0	B, E, I	良好		黄 灰	30	貯穴
16	高台付椀		S	13.3	5.6	6.7	B	良好		灰	60	
17	台付甕		H	13.7			B, C, E, H	良好		橙	30	貯穴
18	台付甕		H			8.5	B, C, E, H	良好		橙	30	
19	広口甕		S	23.7			B	良好		青 灰	20	貯穴
20	広口甕		S			14.9	B	良好		青 灰	50	カマド

21・22は、土錘である。

23は、凝灰岩の切石である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第147号竪穴式住居跡を中堀Ⅳ期に位置付けたい。

第148号住居跡（第254図）

H-12グリッドで確認した。周辺は、掘立柱建物跡・土壇・小穴などの遺構が密集し、確認に手間取った。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺2.85m・短辺2.65m・深さ0.30mであった。南壁の西側には、幅0.26m・長さ1.26m・床面からの高さ0.12mの段を検出した。

主軸方位は、N-86°-Eであった。

カマドは、東壁の北寄りに検出した。住居跡の主軸に対し、カマドの軸は北側に振れていた。袖は、当初から造られなかったと判断した。燃焼部右側には、川原石が補強材として使用されていた。燃焼部は、整った方形であった。底面は、小さな凹凸があったが、掘り込みはみられなかった。燃焼部から煙道部へは、大きな段をもって移行していた。カマドの左前方に、川原石がまとまって出土した。カマドの構築材と推定し

た。

遺構の切り合い関係は、第347・355号土壇より新しかった。

遺物はカマド前面から須恵器の高台付椀（2）が出土した。

1から4は、高台付椀である。1・3は、須恵器（H S）である。2・4は、須恵器（NS）である。3・4は、口縁部が欠損している。

5は、灰釉陶器の高台付椀である。5は、口縁部と底部が欠損している。

6は、緑釉陶器の高台付椀である。6は、体部破片である。

7は、土師器の甕である。7は、胴部上位以下が欠損している。

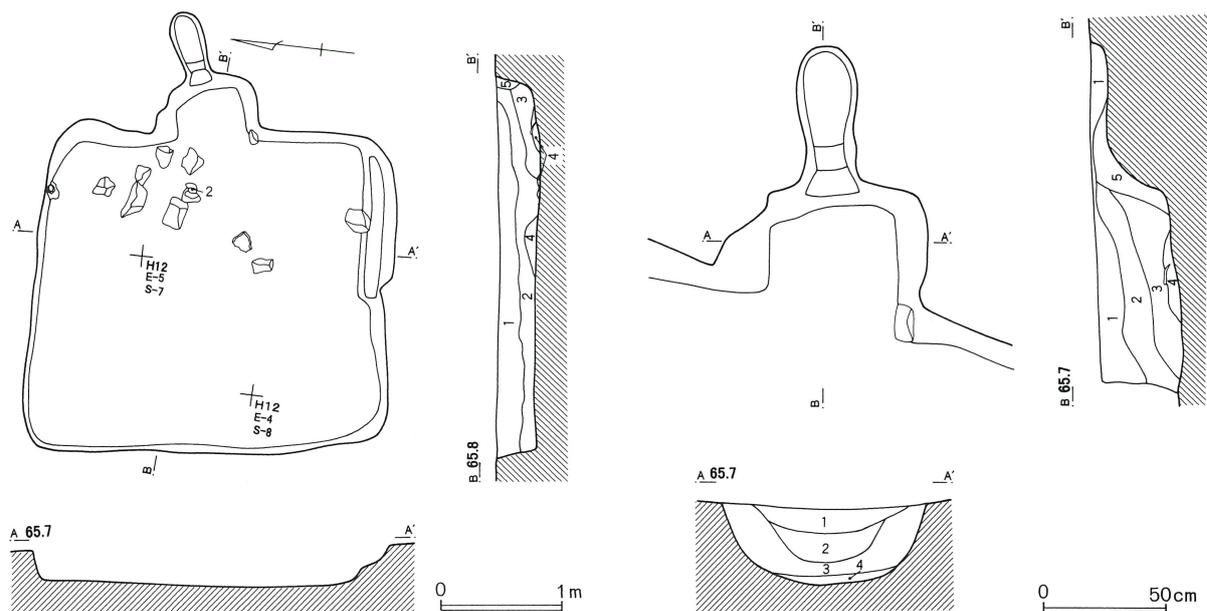
8は、灰釉陶器の長頸壺である。8は、肩部のみである。

9は、緑釉陶器の小瓶である。9は、口縁部破片である。

10は、須恵器（S）の大甕である。10は、口縁部破片である。

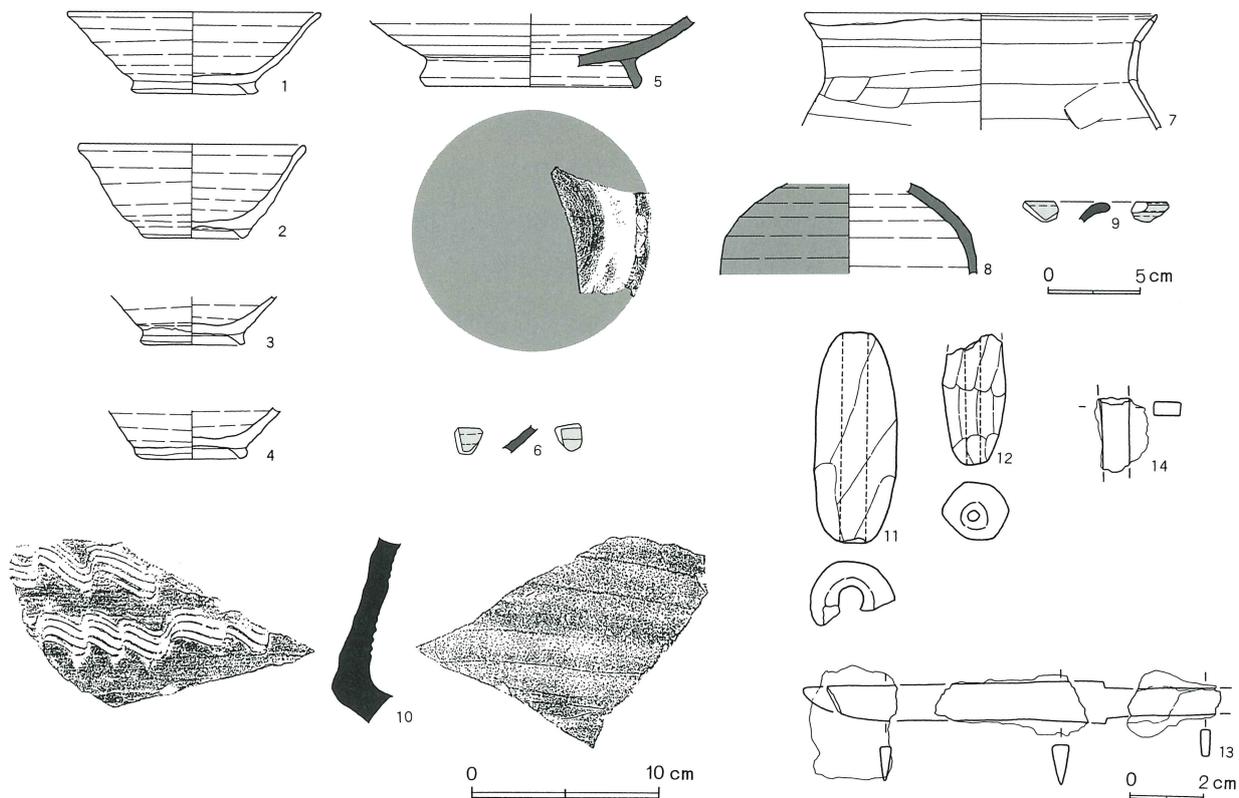
11・12は、土錘である。

第254図 第148号住居跡・出土遺物



第148号住居跡

- | | |
|--------------------------|-------------------------------------|
| 1 暗褐色土 焼土を少量含み、炭化物を微量含む | 4 黒色土 焼土、炭化物を少量含み、焼土ブロックを部分的に含む(灰層) |
| 2 暗褐色土 焼土を多量に含む | 5 赤褐色土 焼土を多量に含み、炭化物を少量含む |
| 3 黒褐色土 焼土を多量に含み、炭化物を少量含む | |



13・14は、鉄製品である。13は刀子、14は棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第148号竪穴式住居跡を中堀V期に位置付けた。

第 216 表 第 148 号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付 椀	HS	13.1	4.3		6.0	B, I	良好	好	橙	60	
2	高台付 椀	NS	11.9	5.0		5.1	B, I	普通	通	黄 灰	70	
3	高台付 椀	HS				5.1	B, I	普通	通	橙	30	
4	高台付 椀	NS				5.2	B, E, I	普通	通	灰 白	30	
5	高台付 椀	K				11.2		良好	好	淡 灰	10	
6	高台付 椀	M					B	普通	通	淡 緑	5	
7	甕 B III c	H	18.5				B, C, E	良好	好	橙	25	
8	長頸 壺	K					D	良好	好	淡 灰	10	
9	小瓶	M					D	普通	通	淡 緑	5	
10	大甕	S					B	良好	好	灰	5	

第 217 表 第 148 号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
11	浅黄 橙	50	5.5	2.2		16.1	B 1	VII	57	
12	浅黄	40		1.8	0.3	8.2	C 1	III b	160	

第149号住居跡 (第255図)

G・H-12・13グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壇・小穴などが比較的密集していた。

住居跡の大半は調査区外のため、不明な点が多かった。残存部の深さは0.26mであった。幅約0.18mの壁溝を検出した。住居跡の南西部に炭化材が出土した。

遺構の切り合いは、みられなかった。

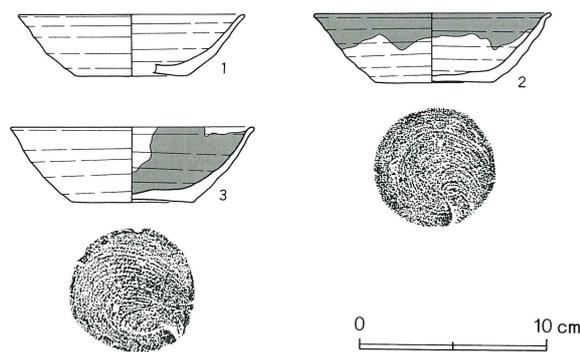
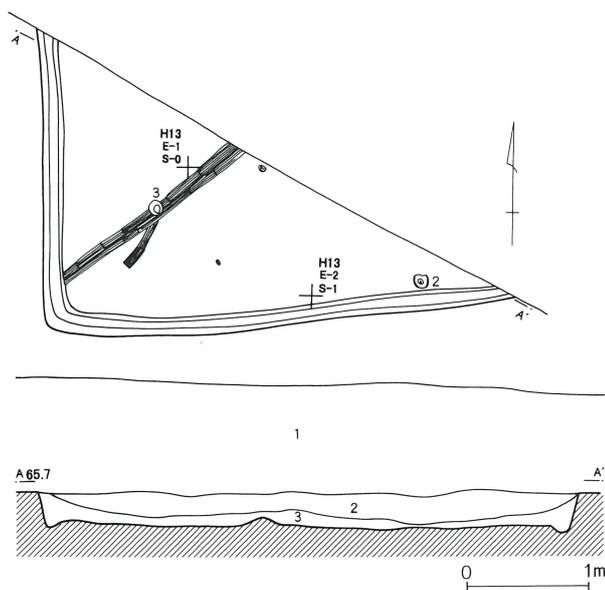
遺物は、炭化材の上から須恵器の坏(3)が出土した。

た。

1から3は、椀である。1・3は、須恵器(HS)である。2は、須恵器(NS)である。1は、底部が欠損している。2は口縁部、3は内面口縁部から底部にかけて黒色の付着物が確認できる。2は、油煙の痕跡と考えられる。

以上、出土遺物から第149号竪穴式住居跡を中堀Ⅳ期に位置付けたい。

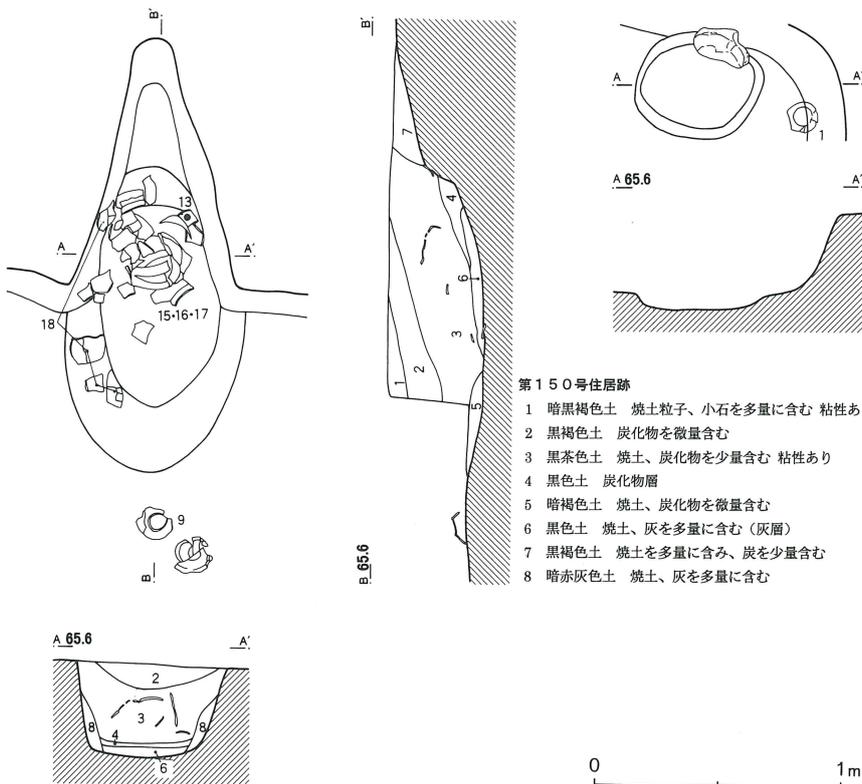
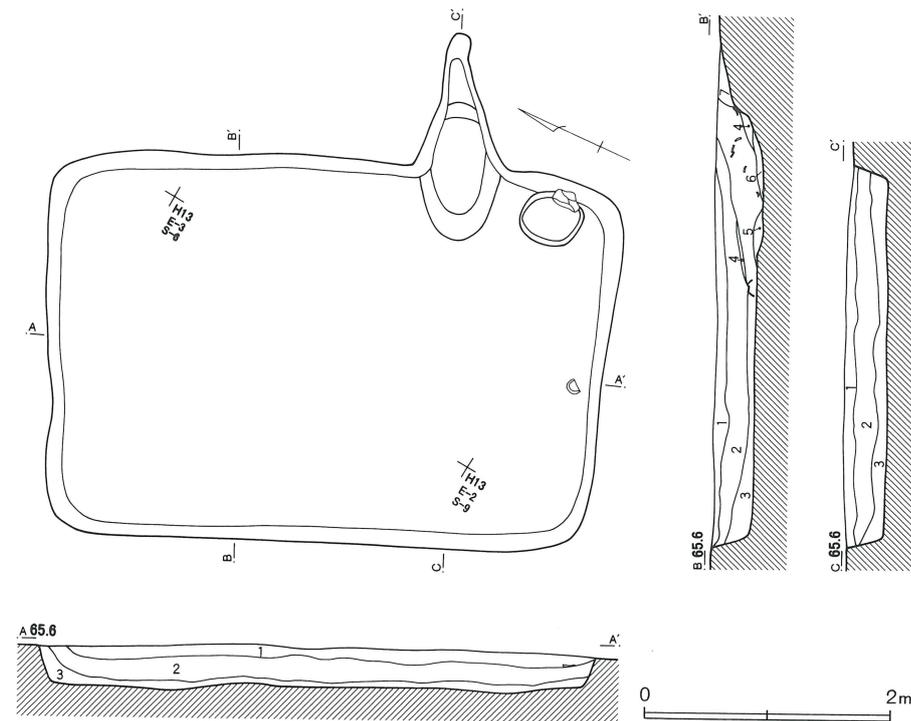
第255図 第149号住居跡・出土遺物



第149号住居跡

- 1 表土及び客土 焼土、炭、B軽石を少量含む 暗褐色土が推積している
- 2 暗茶褐色土 焼土、炭を微量含む、白色粒子を多量に含む 粘性あり
- 3 暗茶褐色土 焼土、炭、炭化物を部分的に多量に含む(炭は一部層状に推積) 粘性あり

第256図 第150号住居跡



第150号住居跡

- 1 暗黒褐色土 焼土粒子、小石を多量に含む 粘性あり
- 2 黒褐色土 炭化物を微量含む
- 3 黒茶色土 焼土、炭化物を少量含む 粘性あり
- 4 黒色土 炭化物層
- 5 暗褐色土 焼土、炭化物を微量含む
- 6 黒色土 焼土、灰を多量に含む(灰層)
- 7 黒褐色土 焼土を多量に含む、炭を少量含む
- 8 暗赤灰色土 焼土、灰を多量に含む

第150号住居跡 (第256図・第257図)

H-13グリッドで確認した。周辺は、住居・土壇・小穴などが比較的密集していた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.42m・短辺3.08m・深さ0.30mであった。

主軸方位は、N-67°-Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。袖は検出されず、当初から造られなかったと判断した。焚き口部の前面から燃焼部にかけては、楕円形の浅い掘り込みがあった。燃焼部から煙道部へは、小さな段をもって移行していた。

貯蔵穴は、カマドの右側南東隅で検出した。形状は楕円形で規模は、長径0.52m・短径0.44m・深さ0.06mであった。

遺構の切り合い関係は、第381号土壇より新しかった。

遺物は、カマド内から土師器の甕(15~18)が出土し、住居跡の南東隅から土師器の坏(1)が出土した。

1・2は、土師器の坏である。1から3は

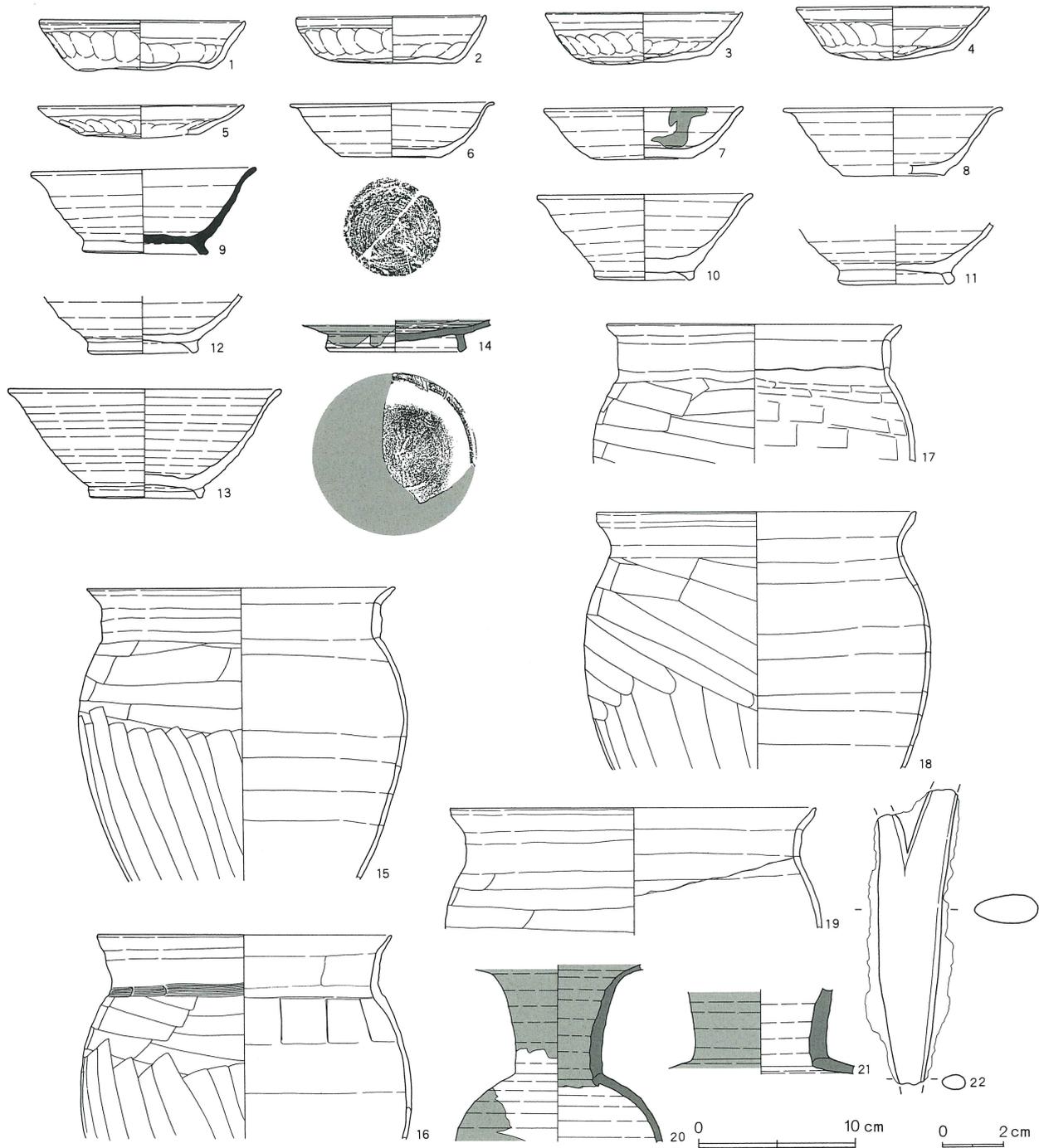
坏AIV、4は坏AVである。5は、皿である。5は、底部が欠損している。

6から8は、須恵器(HS)の椀である。8は、底

第 218 表 第 149 号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	椀	H S	11.9	3.3		5.9	B, E, G	普通	R	褐にぶい黄橙	20	
2	椀	N S	12.4	3.7		6.4	B, E, G, I	良好	R	灰黄	95	
3	椀	H S	12.3	4.0		6.5	B, E, I	良好	R	灰黄褐	70	

第 257 図 150 号住居跡出土遺物



第219表 第150号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A IV	H	13.0	3.2		8.2	B, C, E	普通		淡 橙	70	貯穴
2	坏 A IV	H	11.9	3.1		8.0	B, C, E	普通		淡 黄 褐	70	
3	坏 A IV	H	12.4	3.4		6.4	B, D, E	普通		淡 橙	70	
4	坏 A V	H	12.2	3.4		5.4	B, D, E	普通		淡 黄 橙	70	
5	皿		12.9	2.1		7.1	B, D, E, H	普通		淡 橙	10	
6	椀	HS	12.8	3.5		6.3	B, C	良好		黄 灰	90	
7	椀	HS	12.5	3.3		6.1	B, E, I	普通		にぶい黄橙	75	
8	椀	HS	13.8	4.4		6.5	B, C, I	良好		にぶい黄橙	60	
9	高台付椀	S	14.1	5.5		7.6	B	良好		灰	95	
10	高台付椀	NS	13.7	5.5		5.7	E, G, I	普通		灰 白	75	
11	高台付椀	HS				6.6	B, C, E	良好		灰。底部 - にぶい橙	40	
12	高台付椀	HS				6.5	E, I	普通		浅 黄 橙	40	
13	高台付椀	NS	17.4	7.0		6.8	B, E, I	普通		褐 灰	80	
14	高台付椀	K				8.4		良好		淡 灰 白	20	
15	甕 B II b	H	19.5				B, E, H	良好		橙	80	カマド
16	甕 B III c	H	18.7				B, E	良好		橙	100	カマド
17	甕 B III b	H	18.7				B, E	良好		橙	30	カマド
18	甕 A III b	H	20.2				B, E	良好		橙	60	カマド
19	甕 B II イ	H	23.2				B, E	良好		橙	50	
20	長頸壺	K					B, D	良好		淡 灰	30	
21	長頸壺	K					B, D	良好		暗 灰	10	

部が欠損している。7は、内面口縁部から体部にかけて黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

9から13は、高台付椀である。9は、須恵器(S)である。10・13は、須恵器(NS)である。11・12は、須恵器(HS)である。11・12は、口縁部が欠損している。

14は、灰釉陶器の高台付椀である。14は、口縁部が欠損している。

15から19は、土師器の甕である。15・18は胴部中位以下、16・17・19は胴部中位以下が欠損している。

20・21は、灰釉陶器の長頸壺である。20は、口縁部と胴部中位以下が欠損している。21は、頸部のみである。

22は、二股に分岐した棒状の鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第150号竪穴式住居跡を中堀V期に位置付けたい。

第151号住居跡(第258図・第259図)

H-13グリッドで確認した。周辺は、住居・土壇・

小穴などが比較的密集していた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.10m・短辺3.00m・深さ0.45mであった。

主軸方位は、N-77°-Eであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。袖は検出されず、当初から造られなかったと判断した。

燃焼部の掘り込みはみられなかった。燃焼部から煙道部には、小さな段をもって移行していた。煙道部は、細長く緩やかに傾斜していた。煙道部内から土師器の甕(11)が出土した。補強材と推定した。

貯蔵穴は、カマド右側の南東隅に検出した。径0.32m・深さ0.11mと小形であった。

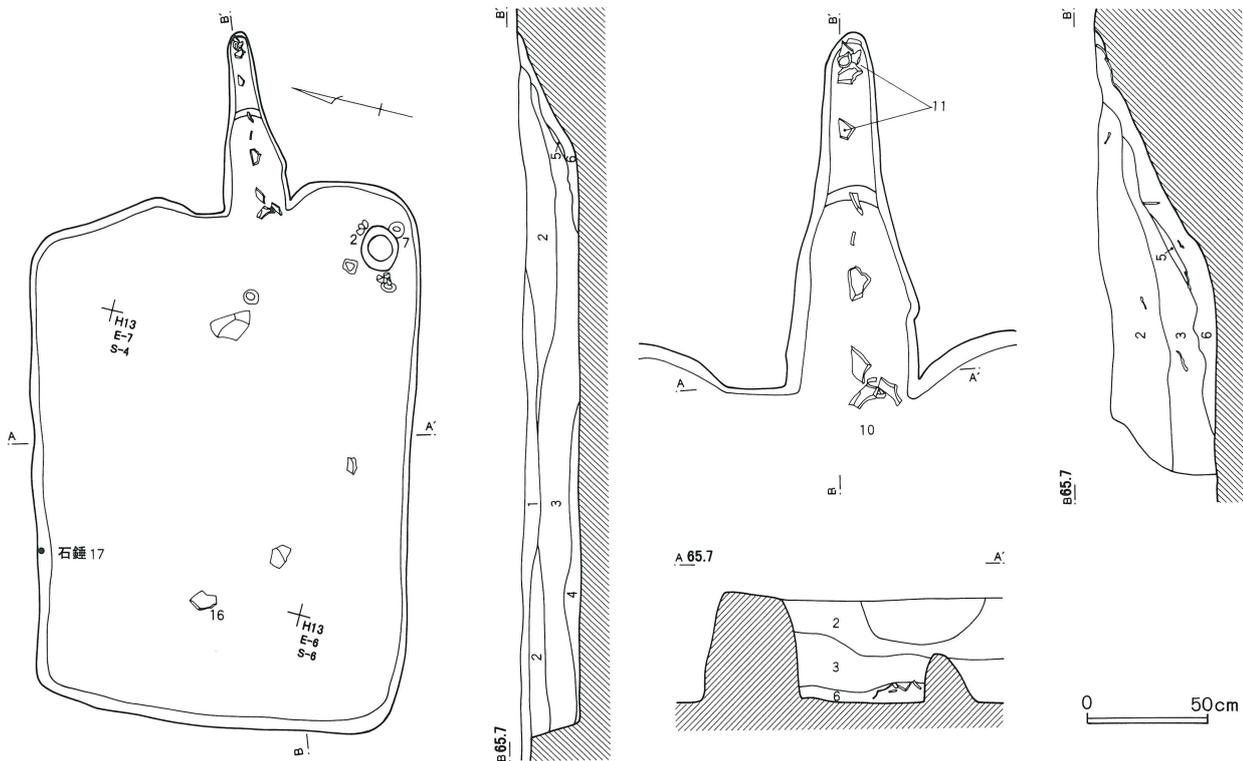
遺構の切り合い関係は、378号土壇より新しかった。

遺物は、カマドの燃焼部内から土師器の甕(10)が出土し、貯蔵穴の周辺から土師器の坏(2)・須恵器の坏(7)が出土した。また、北壁よりから石製の「権」(17)が出土した。

1から5は、土師器の坏AIVである。

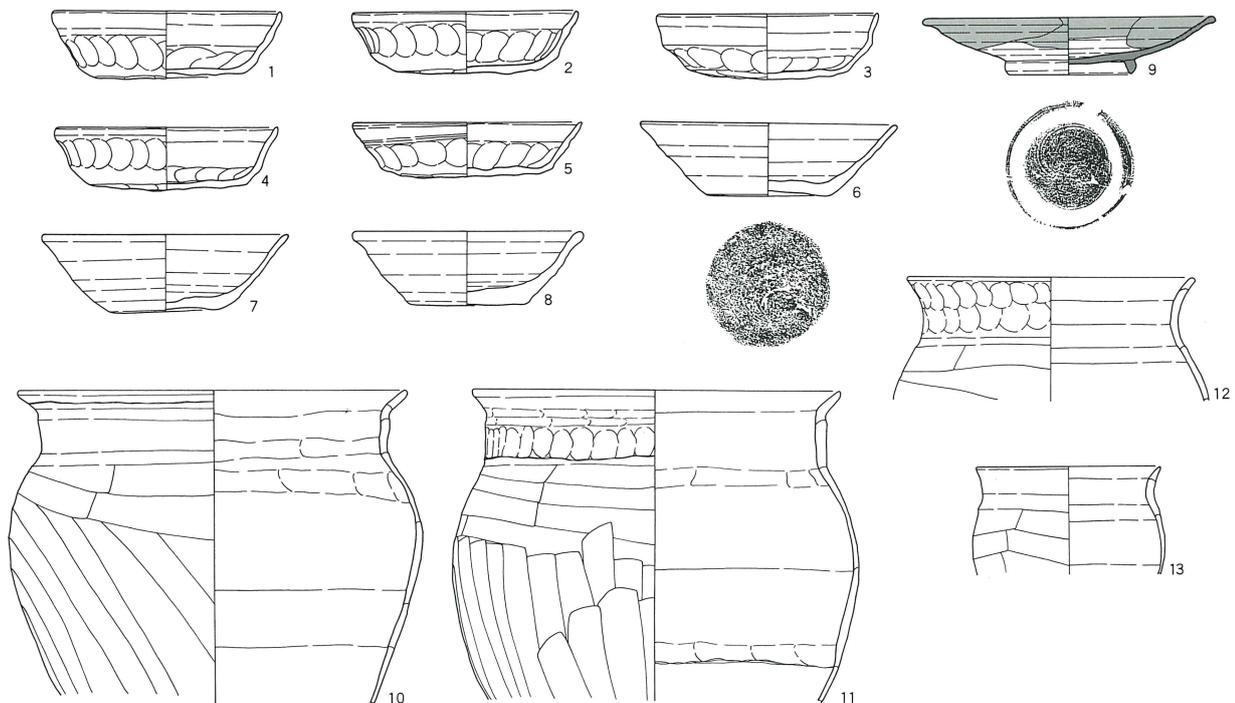
6から8は、椀である。6・7は須恵器(NS)、8は須恵器(HS)である。

第258図 第151号住居跡・出土遺物（1）



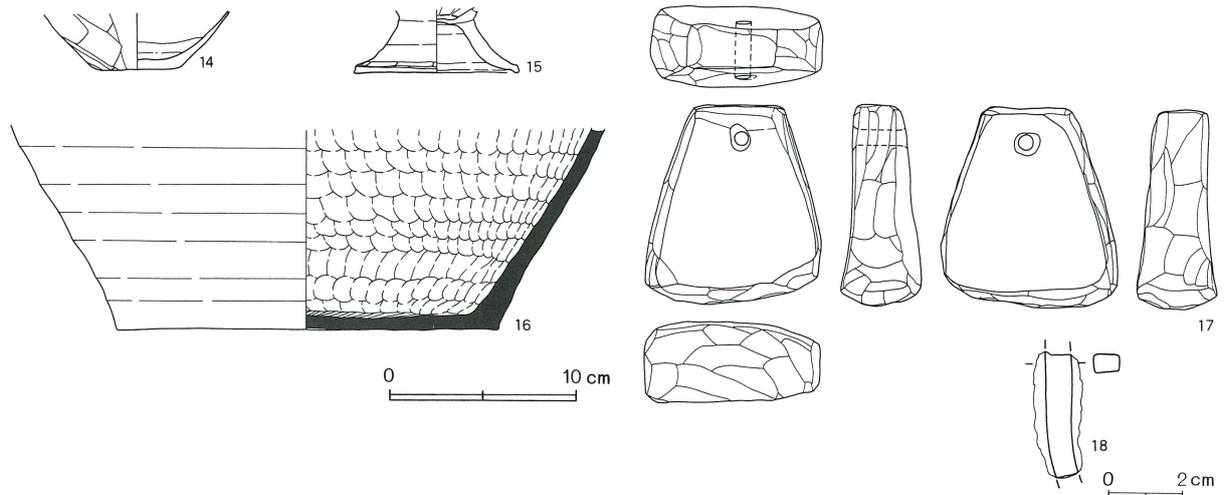
第151号住居跡

- 1 灰褐色土 焼土粒子、炭化粒子を少量含む
- 2 黄褐色土 焼土粒子、炭化粒子を少量含む、黄褐色土粒子をブロック状に含む
- 3 黄褐色土 焼土粒子、炭化粒子を少量含む 砂礫を微量含む 粘性あり
- 4 黄褐色土 焼土粒子、炭化粒子を微量含む 砂質
- 5 赤褐色土 焼土ブロック主体（天井部崩落土）
- 6 暗赤褐色土 焼土層



0 10 cm

第259図 第151号住居跡出土遺物（2）



9は、灰釉陶器の高台付皿である。

10から15は、土師器の甕である。10・11・13は胴部下位以下、12は胴部中位以下が欠損している。14は底部のみ、15は脚部のみである。

16は、須恵器（S）の大甕である。胴部中位以上が欠損している。

17は、石製の竿杵の「榿」である。

18は、棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第151号竪穴式住居跡を中堀Ⅳ期に位置付けたい。

第152号住居跡（第260図・第261図・第262図・第263図）

I-13・14グリッドで確認した。周辺は、溝・土壇・小穴などの遺構が比較的密集していた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺6.07m・短辺4.73m・深さ0.27であった。

主軸方位は、N-88°-Eであった。

カマドは、東壁の中央で検出した。袖は当初から造られなかったと判断した。焚き口部の右側には、袖のように地山を掘り残した部分が確認できた。貯蔵穴と

第220表 第151号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏	A IV	H	12.1	3.6	7.7	B, D, E, H	普通		淡黄橙	90	
2	坏	A IV	H	11.7	3.4	7.5	B, D, E	普通		淡黄褐	50	
3	坏	A IV	H	11.5	3.5	6.4	B, C, E, H	普通		淡黄	100	
4	坏	A IV	H	11.5	3.3	8.1		普通				
5	坏	A IV	H	11.9	2.9	7.5	B, D, E	普通		淡黄褐	60	
6		椀	NS	13.3	3.8	6.3	B, E, I	普通		灰白	60	
7		椀	NS	12.7	4.2	5.1	A, B, G, H	やや不良		灰白	100	
8		椀	HS	11.9	3.9	6.0	A, B, E, H	良好		外-浅黄。 内-黒		底部-100。他-25
9	高台付	皿	K	15.0	3.1	6.3	B, D	良好		淡灰白	70	カマド脇
10	甕	B II c	H	20.4			B, H	良好		橙	100	カマド
11	甕	B III b	H	19.3			B, C, E	良好		橙		口縁-100。カマド
12	甕	A III b	H	15.0			B, H	良好		橙	30	
13	台付	甕	H	9.6			B, H	良好		橙	80	カマド
14	甕	底部	H			3.8	B, E, H	良好		橙	100	
15	台付	甕	H			8.5	B, E	良好		橙	70	
16	大	甕	S			20.1	B	良好		青灰	50	

の仕切り施設と判断した。燃焼部の掘り込みはみられなかった。燃焼部から煙道部には段をもって移行していた。

貯蔵穴は、カマド右側南の東隅に検出した。形状は楕円形で規模は、長径1.51m・短径0.96m・深さ0.17mであった。

遺構の切り合い関係は、第18・19号区画溝より古かった。

遺物は、カマド内から土師器の甕(40)が、貯蔵穴内から土師器の坏(1・2・4・10・14・15・16)、須恵器の皿(22)がまとまって出土した。そのほか住居跡の中央から砥石(50)と凝灰岩の切石(52)が出土した。

1から16は、土師器の坏である。5・11・12・15・16は、坏A Vである。他は、坏A IVである。17は、土師器の皿である。1・3・7・13・15は底部を欠損している。

18・19は、土師器の皿である。

20から23は、皿である。20は底部を欠損している。

21から22は、須恵器(S)である。23は、須恵器(N S)の皿である。24から30は、須恵器(NS)の高台付椀である。30は底部が欠損している。

31から36は、灰釉陶器である。32・33は、高台付椀である。34は、段皿である。35・36は、高台付皿である。35は底部外面に墨書「床」、36は「南」がみられる。31・35・36は口縁部、32から34は底部が欠損している。

37は、緑釉陶器の高台付椀である。体部破片である。

38から44は、土師器の甕である。38・39・41・42は胴部中位以下、40は胴部下位以下が欠損している。43・44は底部のみである。

46は、須恵器(NS)の長頸壺である。45・47は、灰釉陶器の長頸壺である。45は口縁部のみ、46は頸部のみ、47は底部のみである。

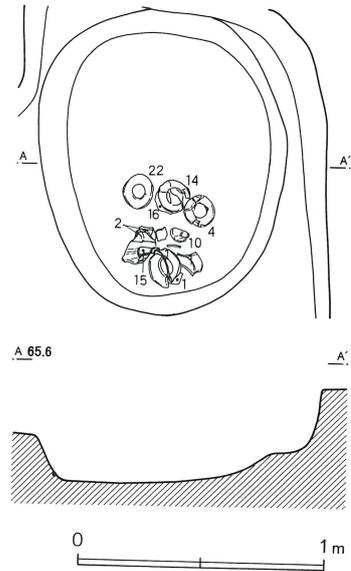
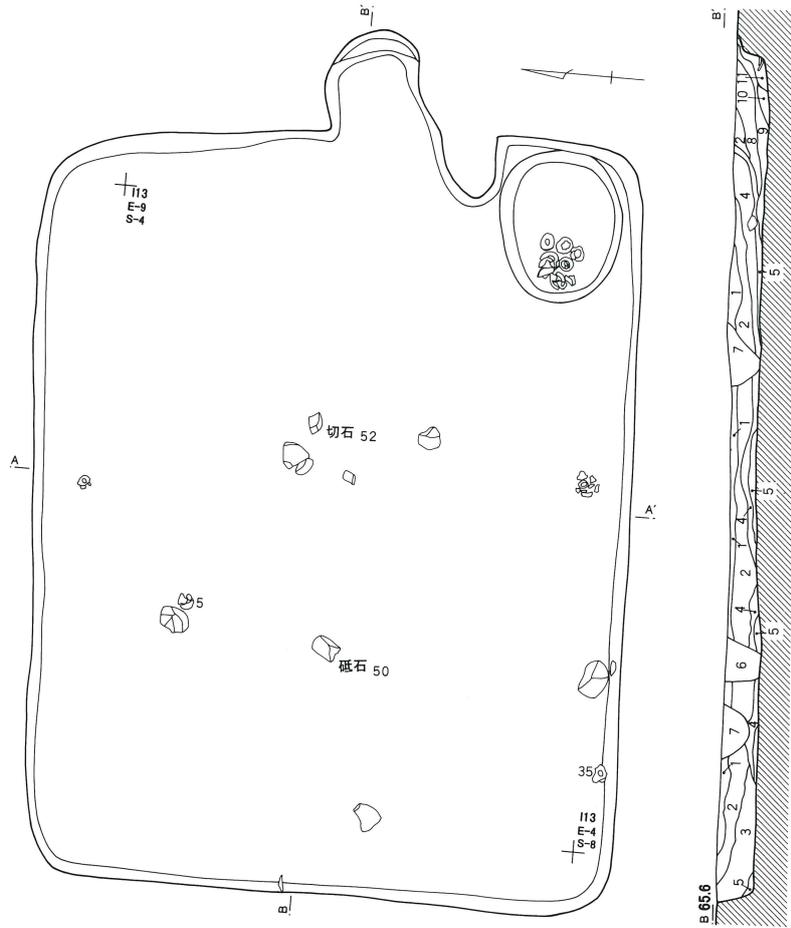
48・49は、土錘である。

50は、砥石である。51・52は、凝灰岩の切石である。

第221表 第152号住居跡出土遺物観察表(1)

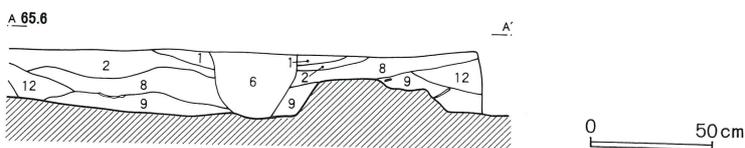
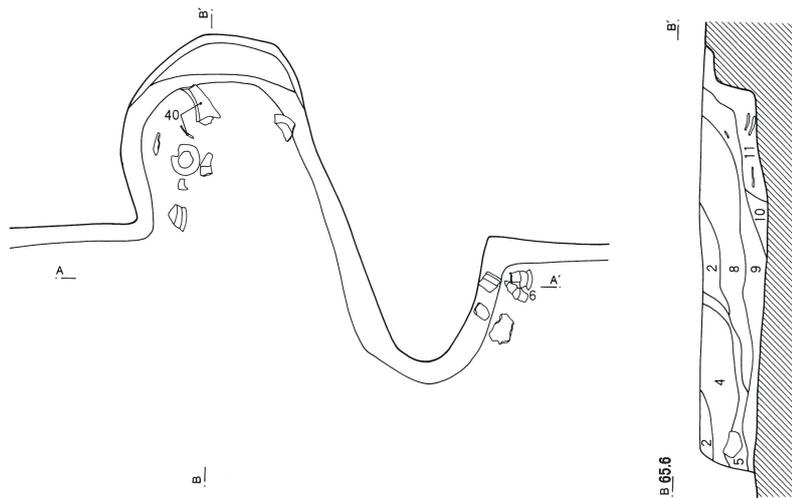
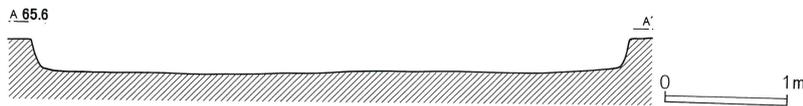
番号	器種	種別	口径	器高	鏑	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏	A	H	12.6			B, D, E	普通		淡 橙	70	貯穴
2	坏	A	IV	H	12.5	4.1	7.2	B, D, E	普通	淡 橙	80	貯穴
3	坏	A	IV	H	12.5		8.3	B, D, E	普通	暗 茶	80	
4	坏	A	IV	H	12.2	3.3	7.9	B, E, H	普通	黄 橙	90	
5	坏	A	V	H	12.2	3.5	8.4	B, D, E	普通	淡 橙	100	
6	坏	A	IV	H	11.9	3.5	7.2	B, D, E	普通	暗 橙	30	
7	坏	A	IV	H	11.6	3.5	7.7	B, D, E	普通	淡 黄 橙	30	
8	坏	A	IV	H	11.7	3.1	6.7	B, C, E	普通	淡 黄 褐	60	
9	坏	A	V	H	11.9	3.5	7.7	B, D, E, H	普通	淡 黄 橙	90	
10	坏	A	IV	H	11.8	3.3	6.8	B, C, D, E	普通	淡 黄 褐	100	
11	坏	A	V	H	12.0	3.5	7.1	B, D, E	普通	明 橙	90	カマド
12	坏	A	V	H	11.8	3.5	5.9	B, D, E	普通	淡 黄 橙	100	貯穴
13	坏	A	IV	H	12.7		8.0	B, D, E	普通	淡 黄 褐	40	
14	坏	A	IV	H	12.1	3.4	8.7	B, E, H	良好	淡 橙	100	貯穴
15	坏	A	V	H	12.3	3.2	7.0	B, D, E	普通	淡 黄 橙	90	貯穴
16	坏	A	V	H	14.8	3.2	7.6	B, D, E	普通	淡 橙	80	
17	皿		IV	H	12.8	2.7	8.4	B, D, E	普通	淡 黄 橙	90	
18	椀		NS	13.3	4.2		6.4	B, E	良好	灰 白	60	
19	椀		NS	13.2	3.6		6.1	B, E	良好	灰 白	30	注記なし
20	皿		S	14.2	2.5		6.2	B	良好	灰	40	
21	皿		S	14.4	2.4		6.5	B, H	良好	灰	20	底部-100
22	皿		S	13.2	2.7		6.3	B, D, G, K	良好	灰	100	貯穴
23	皿		NS	14.0	2.2		7.0	B, D	良好	灰 白	50	
24	高台付椀		NS	13.8	5.8		6.3	B, E	良好	灰 白	60	底部-100

第260図 第152号住居跡

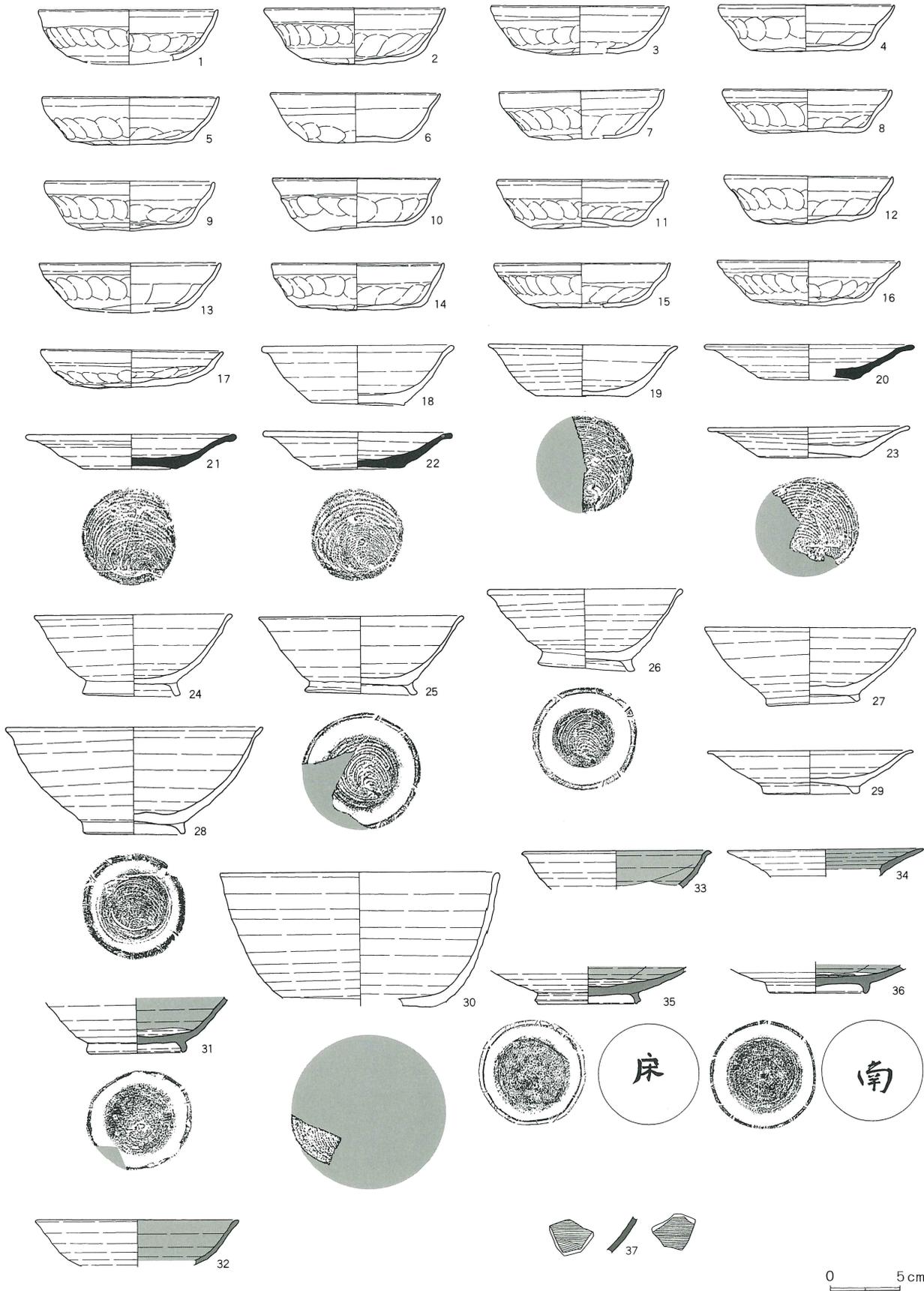


第152号住居跡

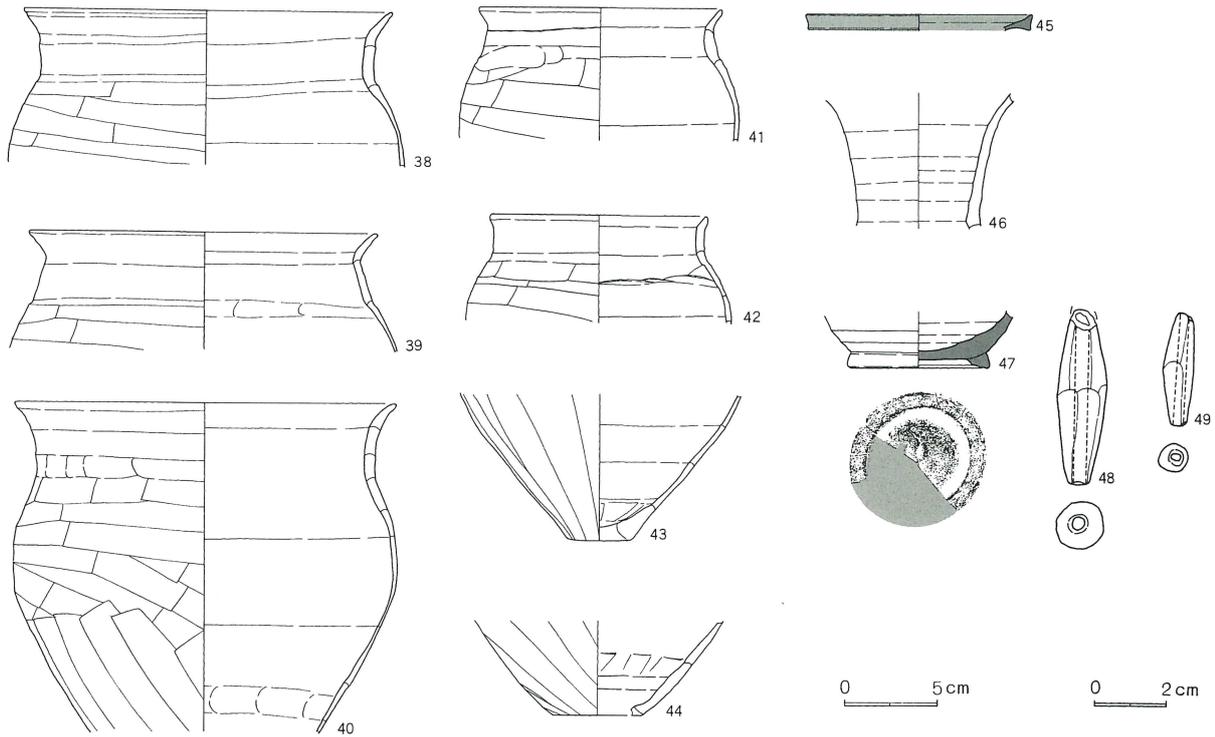
- 1 暗灰黄色土 炭化粒子を微量含む 粘性あり
- 2 黄褐色土 炭化粒子を微量含む、黄褐色粒子、砂礫を少量含む
- 3 灰黄褐色土 暗灰色粘土主体
- 4 褐色土 焼土を少量含む、灰を層状に多量に含む
- 5 黄褐色土 黄褐色粒子を少量含む 粘性あり
- 6 灰黄褐色土 焼土粒子、炭化粒子を多量に含む
- 7 黄褐色土 炭化粒子、白色粒子、砂礫を少量含む
- 8 黄褐色土 焼土粒子、炭化粒子を少量含む、白色粒子を微量含む 粘性あり
- 9 赤褐色土 焼土ブロックを多量に含む
- 10 黄褐色土 焼土粒子をブロック状に含む 粘性あり
- 11 赤褐色土 焼土ブロックを多量に含む
- 12 黄褐色土 焼土粒子、炭化粒子を少量含む 粘性あり



第261图 第152号住居跡出土遺物(1)



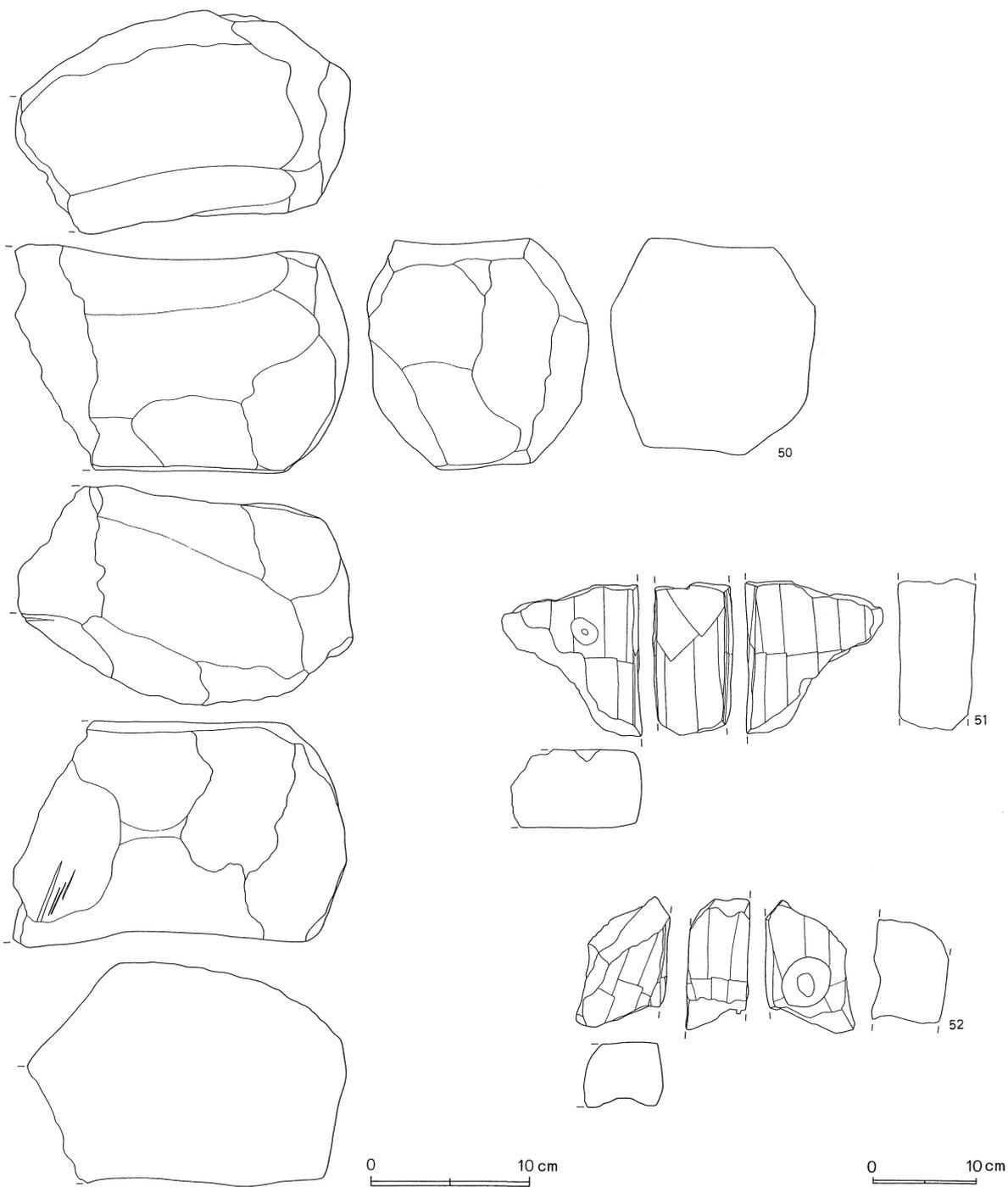
第262図 第152号住居跡出土遺物(2)



第222表 第152号住居跡出土遺物観察表(2)

番号	器種	種別	口径	器高	鋳	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
25	高台付椀	NS	14.3	5.6		7.3	B	良好		灰	70	
26	高台付椀	NS	13.6	6.0		6.2	B, H	良好		灰 白	60	底部-100
27	高台付椀	NS	14.8	5.6		6.3	B, C, E, H	良好		橙	60	底部-100
28	高台付椀	NS	18.0	7.6		6.7	B, E, G, H	良好		淡 黄	40	底部-100
29	高台付皿	NS	14.3	3.1		6.2	A, B, H	やや不良			20	底部-100
30	高台付椀	NS	19.4				B	不良		淡 灰 白	30	
31	高台付椀	K				6.6	B, D	良好		淡 灰	40	
32	高台付椀	K	19.0				D	良好		灰	20	
33	高台付椀	K	12.9				D	良好		暗 灰	10	
34	段皿	K	13.4				D	不良		暗 灰	10	
35	高台付皿	K				7.0	B, D	不良		灰	60	
36	高台付皿	K				7.2	B, D	普通		灰	20	
37	高台付椀	M					B	普通		淡 緑	5	
38	甕BⅢc	H	19.4				B, E	良好		浅 黄 橙	80	
39	甕BⅢa	H	18.1				B, E	良好		浅 黄 橙	40	
40	甕AⅡa	H	20.0				B, E, H	良好		橙	60	カマド
41	台付甕	H	12.7				B, I	良好		にぶい黄橙	60	
42	台付甕	H	11.3				B, E	良好		にぶい橙	25	
43	甕底部	H				3.2	B, E	良好		浅 黄 橙	60	カマド
44	甕底部	H				4.5	B, E	良好		灰 黄 褐	50	貯穴
45	長頸壺	K	11.9				D	良好		淡 緑 灰	10	
46	長頸壺	NS					B, H	良好		淡 黄	80	
47	長頸壺	K				7.2	B	良好		淡 灰	10	

第263図 第152号住居跡出土遺物(3)



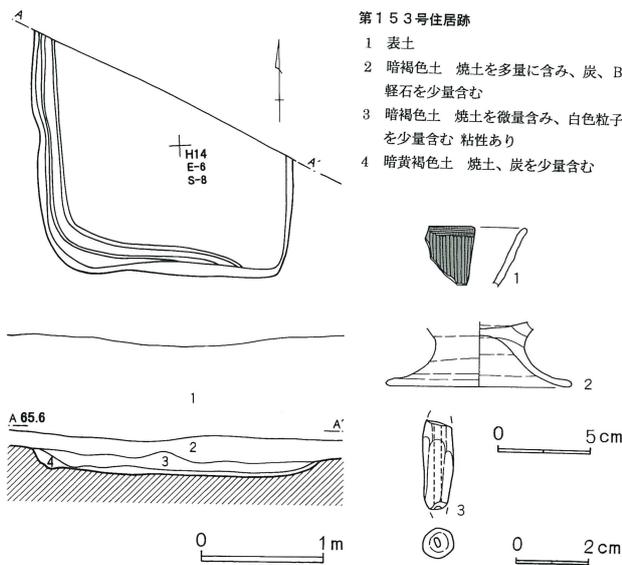
第223表 第152号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
48	浅黄橙	100	3.0	0.8	0.3	1.8	C 2	I a	406	
49	にぶい赤褐	95		1.2	0.3	6.1	C 2	I b	407	

第224表 第153号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
3	褐灰	30				1.3	C 3	VIII	640	

第264図 第153号住居跡・出土遺物



以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第152号竪穴式住居跡を中堀V期に位置付けたい。

第153号住居跡（第264図）

H-14グリッドで確認した。周辺は、溝・土壇・小穴などの遺構が比較的密集していた。

住居跡の北半分は調査区外のため、不明な点が多かった。残存する南壁の長さは2.04m・深さ0.19mであった。南壁から西壁にかけては、幅0.20mの壁溝を検出した。

カマドは、検出できなかった。

遺構の切り合いは、みられなかった。

1は、暗文土器の椀である。口縁部破片である。

2は、土師器の甕である。脚部のみである。

3は、土錘である。

以上、出土遺物から第153号竪穴式住居跡の時期を決定することは不可能であった。

第154号住居跡（第265図・第266図）

H・I-14グリッドで確認した。周辺は、溝・土壇・小穴などの遺構が比較的密集していた。カマドを二基確認し、二軒の重複と当初考えたが、土層断面の観察から一軒と判断した。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺5.14m・短辺3.53m・深さ0.24mであった。北壁・西壁・南壁の一部に幅0.2mの壁溝を検出した。また北壁中央から径0.75m・深さ0.15mの円形の土壇を検出した。さらに、住居跡の中央東寄りに七基の小穴を検出した。いずれも径0.15m・深さ0.1m前後であった。

主軸方位は、N-83°-Eであった。

カマドは、北壁の北東隅と東壁の中央の二基を検出した。覆土の状況から二基とも住居跡の埋没まで共用していたと推定した。

1号カマドの袖は、造られなかったと判断した。燃焼部の掘り込みはみられなかった。燃焼部は、奥に向かって緩やかに傾斜していた。焚き口部の前面には、径0.37m・深さ0.1mの円形の掘り込みを検出した。

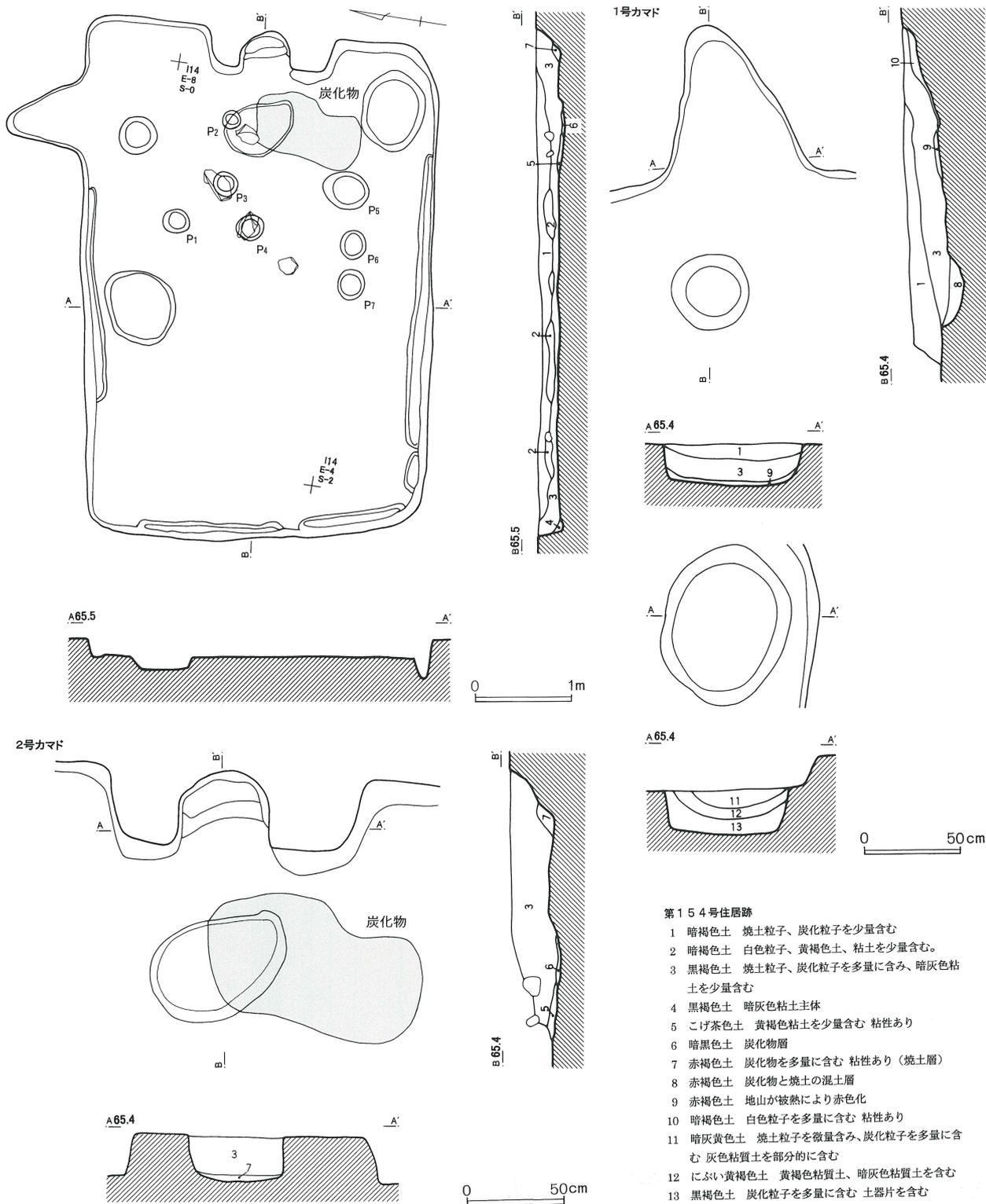
第225表 第153号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付 椀	黒色					B, G	良好		浅黄橙	5	
2	甕	H				9.4	B, E	普通		橙	100	

第226表 第154号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付 椀	HS				5.5	B, I	普通		灰黄	20	カマド
2	高台付 皿	K				6.0	B	良好		灰白	10	
3	高台付 椀	M				5.2	B	普通		淡緑	10	
4	高台付 椀	M					B	普通		淡緑	5	
5	甕 B II	NS	30.6		6.0		B, E, H	良好		灰白	5	

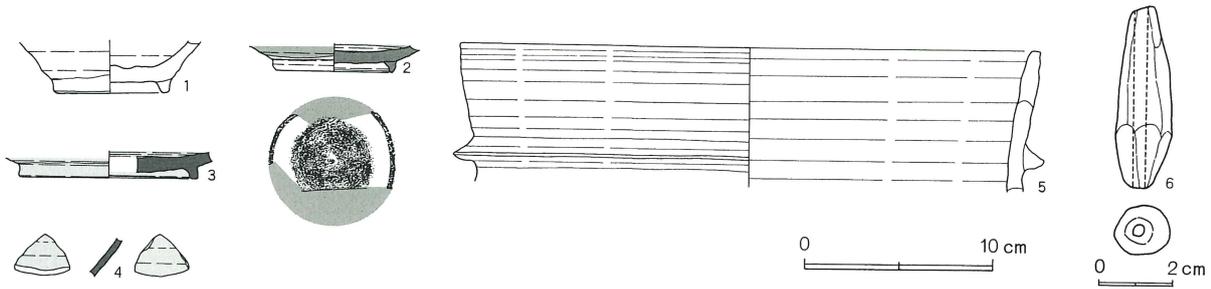
第265図 第154号住居跡



第227表 第154号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
6	浅黄橙	100	4.9	1.5	0.3	8.8	C 1	I a	161	

第266図 第154号住居跡出土遺物



炭化物と焼土が多量に出土した。

2号カマドの袖は、地山を掘り残して造られ、住居跡内に長く延びていた。燃焼部は、住居内に全体を造っていた。燃焼部にあたる部分は、浅く窪み焼土が堆積していた。燃焼部から煙道部へは、緩い段をもって移行していた。

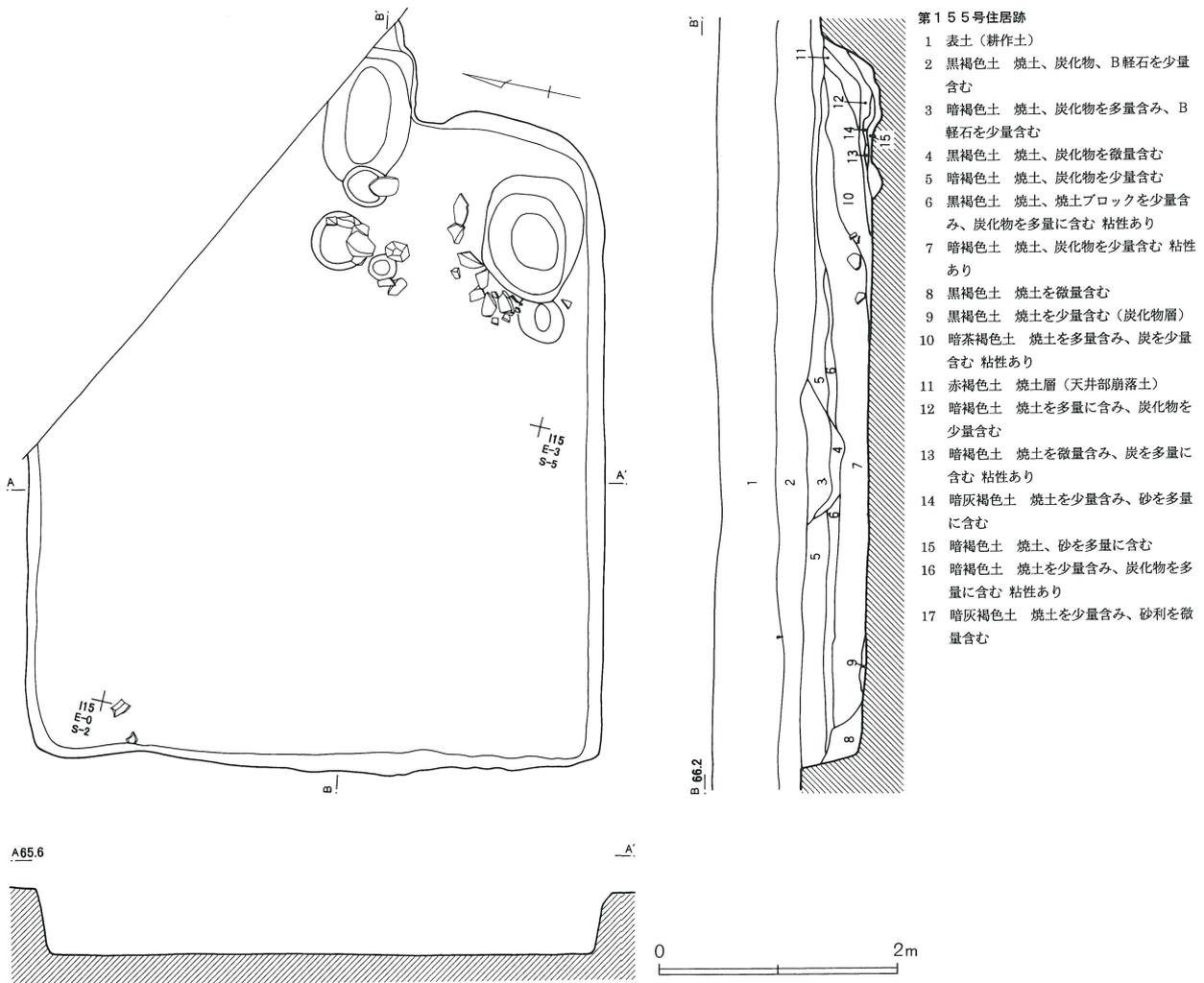
遺構の切り合い関係は、第418号土壌より古かった。

1は、須恵器（HS）の高台付碗である。底部のみである。

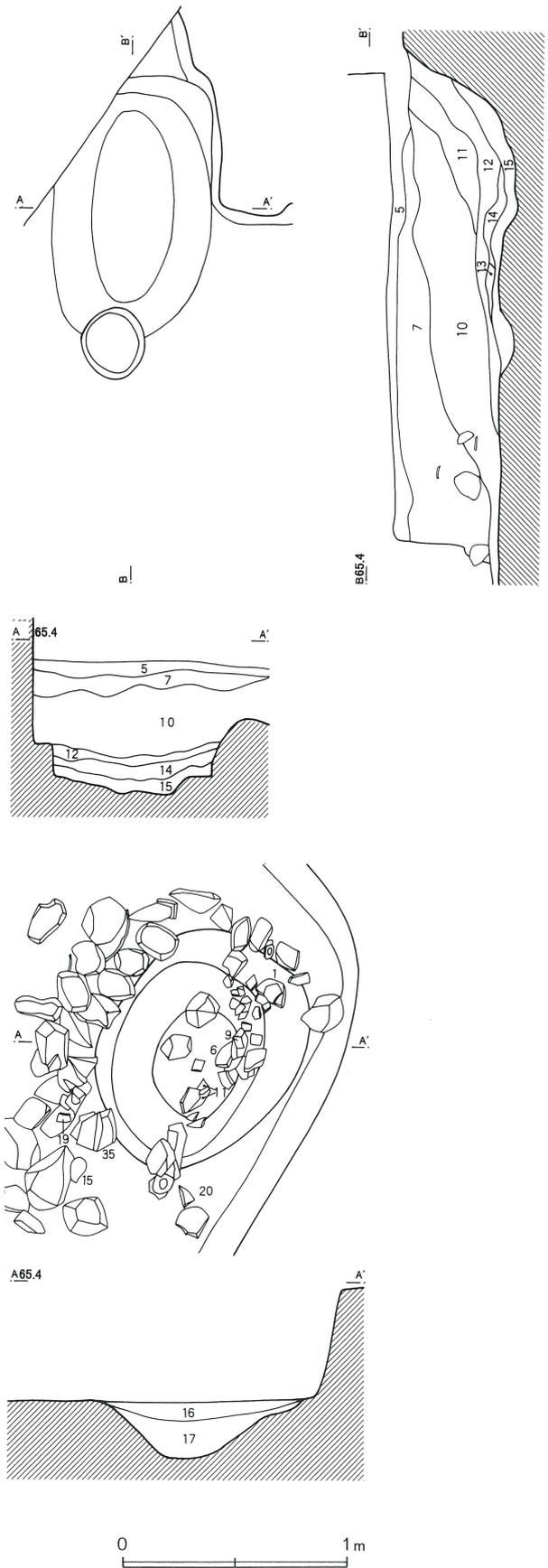
2は、灰釉陶器の高台付皿である。底部のみである。

3・4は、緑釉陶器の高台付碗である。3は底部のみである。4は体部破片である。

第267図 第155号住居跡



第268図 第155号住居跡カマド・貯蔵穴



5は、須恵器（NS）の甑である。胴部上位以下が欠損している。

6は、土錘である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第154号竪穴式住居跡を中堀VI期に位置付けたい。

第155号住居跡（第267図・第268図・第269図）

I-14・15グリッドで確認した。周辺は、掘立柱建物跡・小穴などの遺構が比較的密集していた。

住居跡の北東隅は調査区外となり全容は不明であった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺5.43m・短辺4.89m・深さ0.53mであった。

主軸方位は、N-82°-Eであった。

カマドは、東壁中央で検出した。袖は検出されず、当初から造られなかったと判断した。焚き口部から燃焼部にかけては、楕円形に浅く掘り込まれていた。焚き口部の前面には、径0.31mと径0.53mの小穴二基を検出した。燃焼部から煙道部には、大きく段をもって移行していた。

貯蔵穴は、カマド右側の南東隅に検出した。形状は、長方形で規模は、長径1.04m・短径0.81m・深さ0.25mであった。貯蔵穴を囲むように大形の川原石が並んで出土した。

遺構の切り合いは、みられなかった。

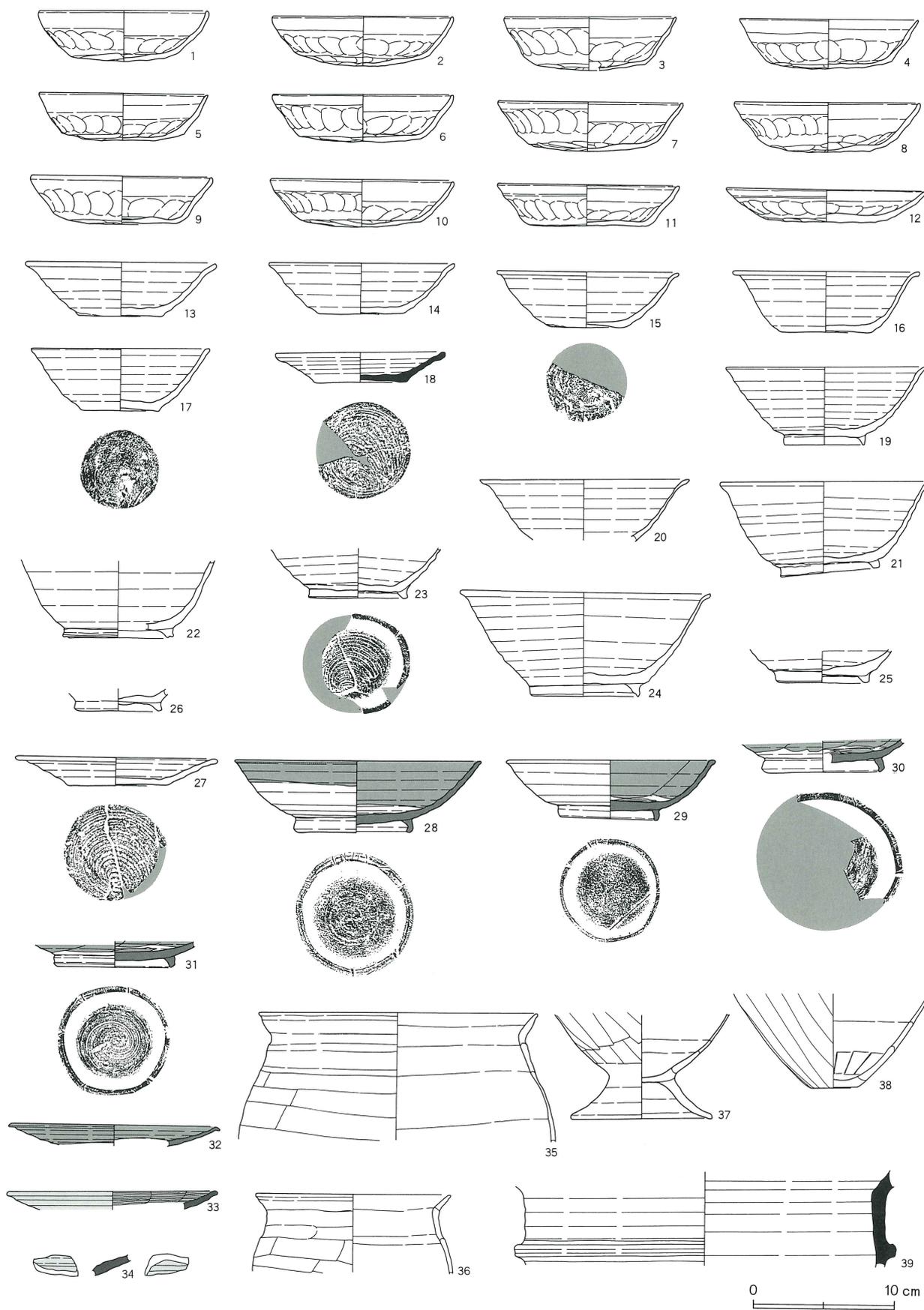
遺物は、貯蔵穴内から土師器の坏（1・6・9・11）、須恵器の坏（15）・高台付碗（19・20）、土師器の甕（35）が出土した。

1から11は、土師器の坏AIVである。12は、土師器の皿である。

13から17は、須恵器（NS）の碗である。18は、須恵器（S）の皿である。19から26は、須恵器（NS）の高台付碗である。27は、須恵器（NS）の皿である。20は底部、22・23・25は口縁部が欠損している。26は底部のみである。

28から31は、灰釉陶器の高台付碗である。32は、灰釉陶器の高台付皿である。33は、緑釉陶器の高台付皿

第269图 第155号住居跡出土遺物



である。34は、緑釉陶器の段皿である。30・31は底部のみである。32・33は底部が欠損している。34は胴部破片である。

35から38は、土師器の甕である。39は、須恵器（S）の甕である。35・36は胴部中位以下が欠損している。37は脚部のみ、38は底部のみである。39は胴部上位以下が欠損している。

以上、出土遺物から第155号竪穴式住居跡を中堀V期に位置付けたい。

第156号住居跡（第270図）

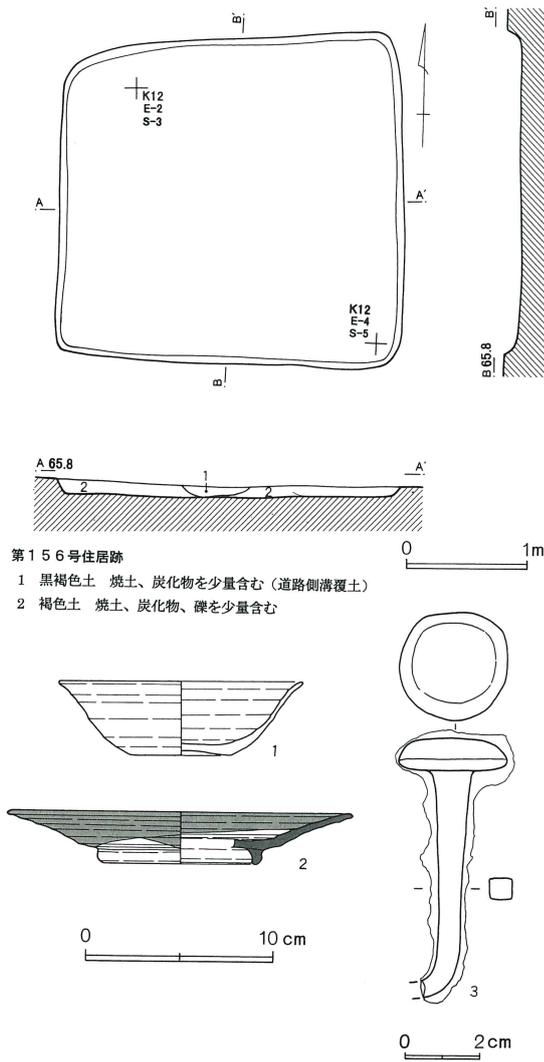
K-12グリッドで確認した。周辺は、土壇・溝・小穴などの遺構が密集していた。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺2.75、

第228表 第155号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A IV	H	11.9	3.6		7.5	B, D, E	普通		淡黄橙	60	
2	坏 A IV	H	12.6	3.5		5.9	B, D, E	良好		淡橙	60	フク土
3	坏 A IV	H	12.1	3.8		7.6	B, D, E	普通		淡橙	40	
4	坏 A IV	H	12.5	3.5		7.1	B, D, E	普通		淡橙	30	
5	坏 A IV	H	11.9	3.4		7.7	B, D, E	良好		淡橙	50	
6	坏 A IV	H	12.7	3.1		8.4	B, C, E	普通		淡橙	30	貯蔵穴
7	坏 A IV	H	13.0	3.5		8.3	B, D, E	普通		淡黄橙	30	貯蔵穴。フク土
8	坏 A IV	H	12.9	3.6		5.9	B, C, E	不良		黄褐	70	
9	坏 A IV	H	12.6	3.4		7.8	B, E	普通		淡黄橙	60	貯蔵穴
10	坏 A IV	H	12.8	3.3		8.3	B, D, E	普通		淡黄橙	40	
11	坏 A IV	H	12.7	3.0		8.0	B, D, E	普通		淡橙	40	貯蔵穴
12	皿	H	14.0	2.3		8.3	B, C, E	普通		暗赤褐	40	
13	椀	NS	13.3	3.8		6.0	B, D	良好		灰	40	
14	椀	NS	12.9	3.6		6.0	B, E	普通		灰・灰白	30	
15	椀	NS	12.6	3.9		4.8	B, D	普通		黄灰	40	
16	椀	NS	12.9	4.3		6.3	B, D, I	普通		灰白	40	貯穴。フク土
17	椀	NS	12.4	4.4		5.4	B, E	普通		灰	50	
18	皿	S	11.8	2.1		6.4	B, D	良好		灰	50	カマド
19	高台付椀	NS	14.0	5.5		5.5	B, E, I	普通		灰白	50	貯穴
20	高台付椀	NS	14.6				B, I	普通		灰白	30	貯穴。カマド
21	高台付椀	NS	14.1	6.8		6.9	B, C, E, I	普通		灰白	60	
22	高台付椀	NS				7.0	B, C, D	良好		灰白	25	
23	高台付椀	NS				6.4	B	普通		褐灰	40	カマド。貯穴。フク土
24	高台付椀	NS	17.4	7.5		7.5	B, C	良好		灰白	40	
25	高台付椀	HS				6.0	B, E, I	良好		灰黄	30	
26	高台付椀	HS				5.6	B, H	良好		浅黄橙	25	
27	皿	NS	13.9	2.1		7.0	B, C, D	普通		灰白	80	カマド。貯穴。フク土
28	高台付椀	K	17.1	5.1		7.8	B, D	良好		灰白	80	カマド
29	高台付椀	K	13.6				D	良好		外-橙。内-灰褐	30	カマド
30	高台付椀	K				7.9	B	普通		暗灰	10	
31	高台付椀	K				7.9	D	良好		淡灰白	20	カマド
32	高台付皿	K	14.4				D	良好		淡灰白	10	カマド
33	高台付皿	M	14.4				B	普通		灰白	10	
34	段皿	M					B	普通		灰白	5	
35	甕 B III a	H					B, E	良好		橙	70	貯蔵穴
36	台付甕	H				5.9	B, E, H	良好		淡灰	30	
37	台付甕	H				9.8	B, E, H	良好		外-橙。内-浅黄橙	50	カマド
38	甕底部	H				3.0	B, C, E	良好		浅黄橙	90	
39	甕	A S					B	良好		青灰	5	

第270図 第156号住居跡・出土遺物



第156号住居跡

- 1 黒褐色土 焼土、炭化物を少量含む(道路側溝覆土)
2 褐色土 焼土、炭化物、礫を少量含む

短辺2.58、深さ0.11であった。

主軸方位は、 $N-1^{\circ}-E$ であった。

カマドが検出できなかった。当初から造られていなかったと判断した。

遺構の切り合い関係は、第18号区画溝より古かった。

1は、須恵器(NS)の椀である。

2は、灰釉陶器の段皿である。底部が欠損している。

3は、鉄製の釘である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第156号竪穴式住居跡を中堀V期に位置付けたい。

第157号住居跡(第271図・第272図)

L-12・13グリッドで確認した。周辺は、掘立柱建物跡・小穴などの遺構が比較的密集していた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.55、短辺3.57、深さ0.30mであった。住居跡の北西隅に、径0.45m・深さ0.06mと径0.53m・深さ0.23mと径0.32m・深さ0.11mの小穴三基を検出した。

主軸方位は、 $N-79^{\circ}-E$ であった。

カマドは、東壁の南東隅に検出した。袖は、地山を掘り残して造り、住居跡内に延びていた。燃焼部は全体が住居跡内に造られていた。底面は、小さな凹凸がみられたが、掘り込みはみられなかった。燃焼部の中央やや左寄りから、川原石の支脚が出土したことから、二つ掛けカマドと推定した。燃焼部から煙道部へは段をもたず、緩やかに傾斜して移行していた。煙道部は、地山を掘り抜いて造られ、煙り出し部との境に小さな段をもっていた。

遺構の切り合い関係は、第36・37号掘立柱建物跡より古かった。

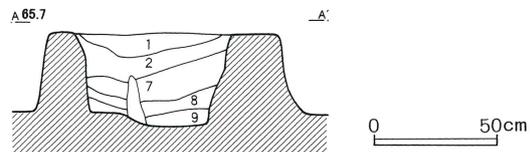
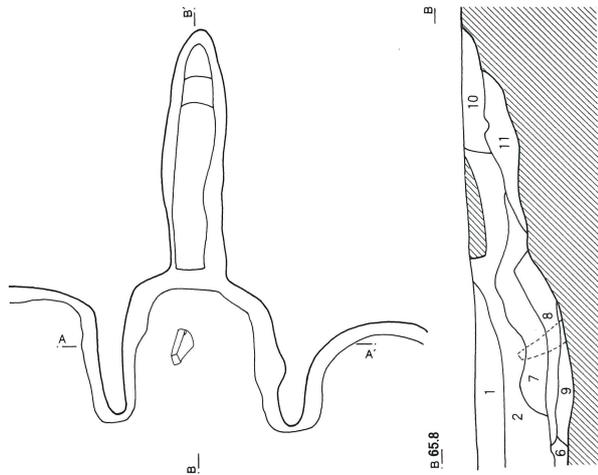
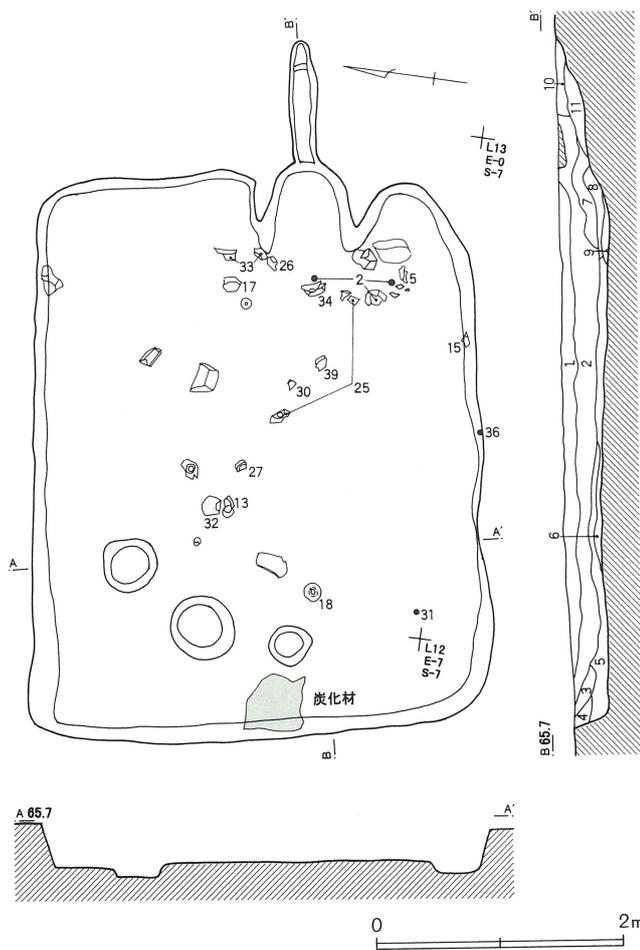
遺物は、カマド前面から土師器の坏(2・5・15)・皿(17)、須恵器の高台付椀(25・26)、土師器の甕(33・34・35)、須恵器の長頸壺(39)が出土し、住居跡の中央やや西寄りから土師器の坏(13)、須恵器の椀(18)・高台付椀(27)、土師器の鉢(36)が出土した。また、西壁の中央から炭化材が出土した。

1から18は、土師器である。1・4・7は、坏A Iである。2・3・5は、坏A IVである。9は、坏A Vである。ほかは、坏Aである。11から17は、土師器の皿である。18は、土師器の椀である。6・8・10・12・

第229表 第156号住居跡出土遺物観察表

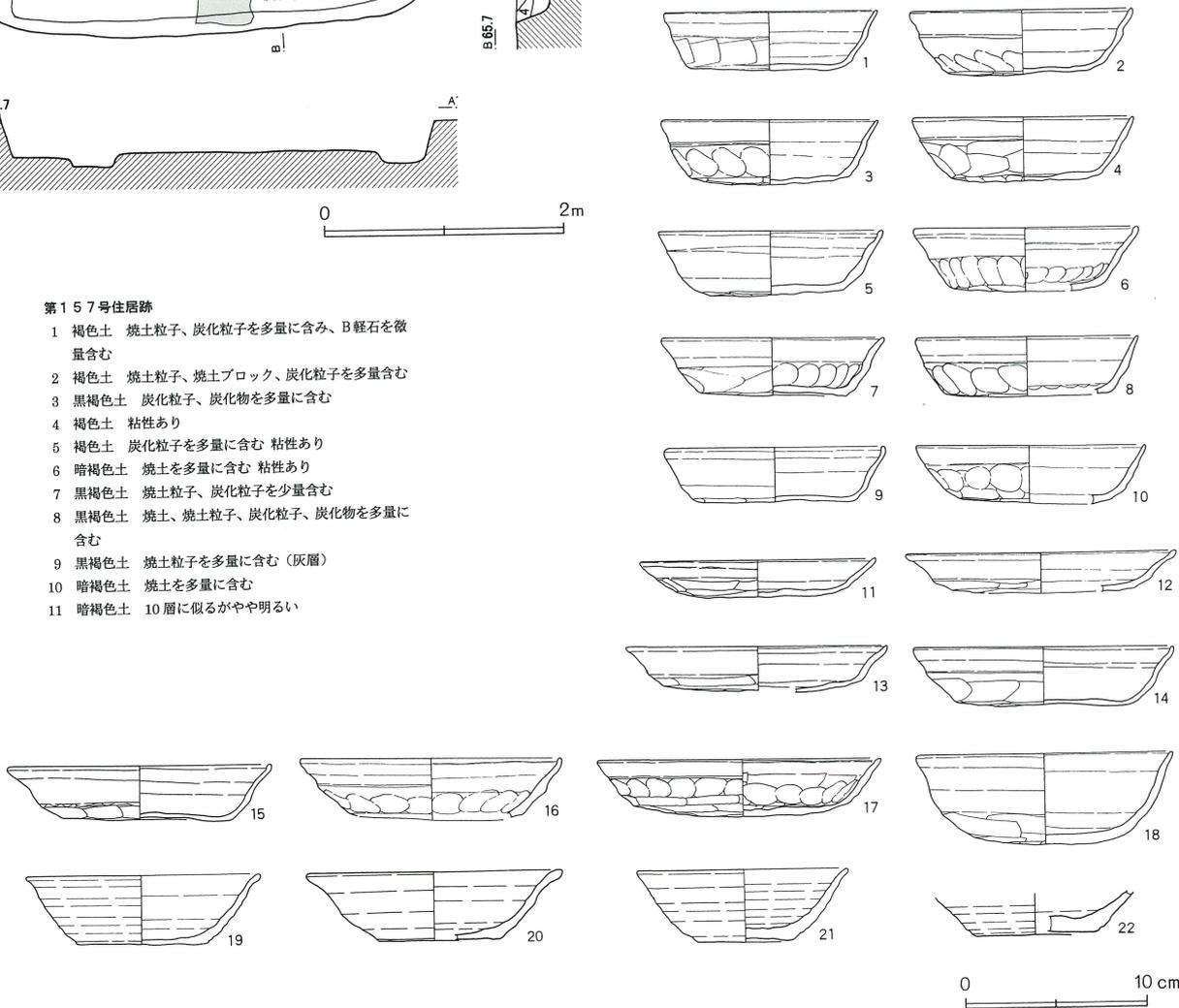
番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	椀	NS	12.7	3.9		5.2	B, E	普通		灰白	50	
2	段皿	K	17.9	2.8		8.0	B	不良		暗灰	20	

第271図 第157号住居跡・出土遺物（1）

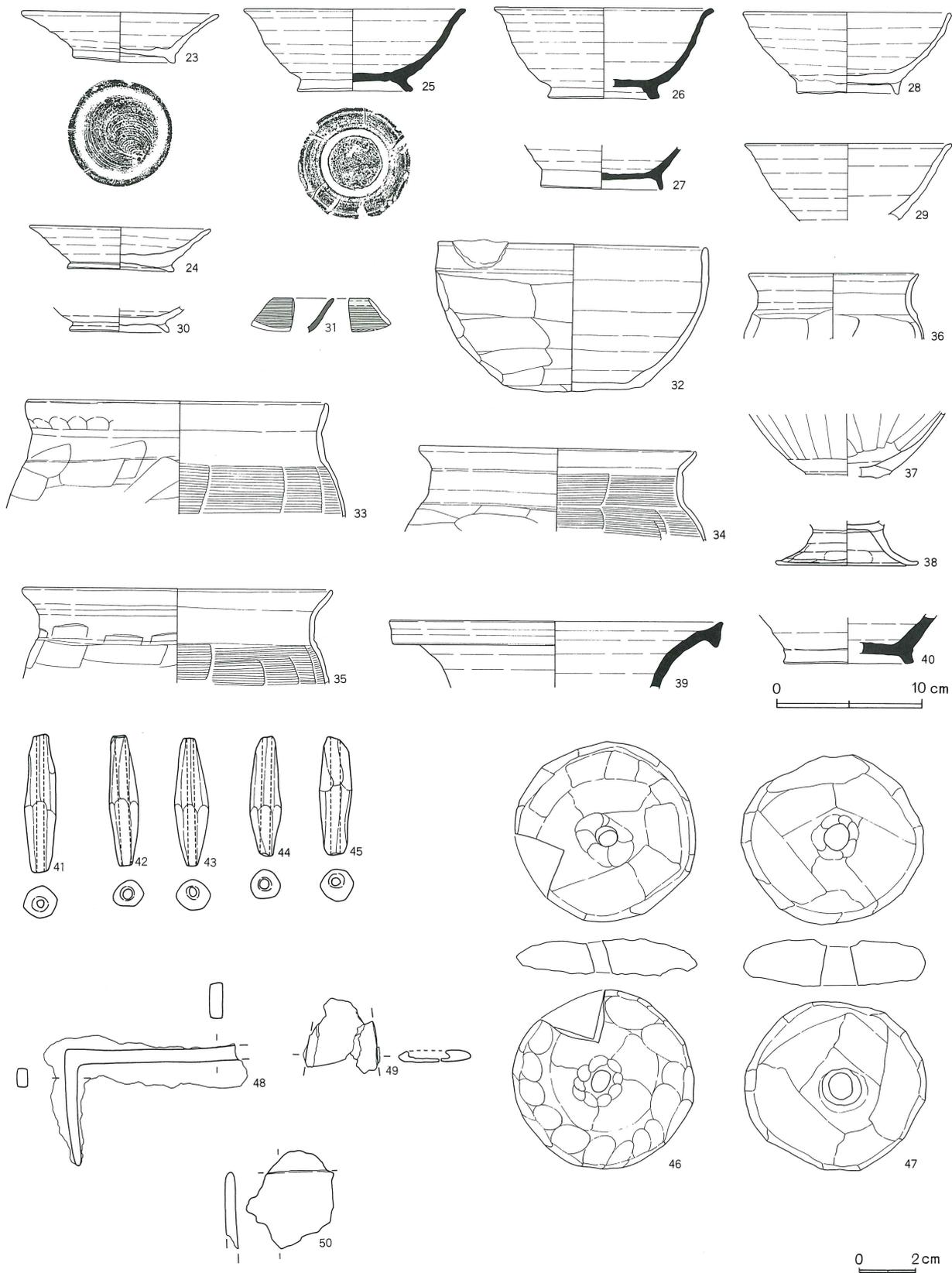


第157号住居跡

- 1 褐色土 焼土粒子、炭化粒子を多量に含み、B軽石を微量含む
- 2 褐色土 焼土粒子、焼土ブロック、炭化粒子を多量含む
- 3 黒褐色土 炭化粒子、炭化物を多量に含む
- 4 褐色土 粘性あり
- 5 褐色土 炭化粒子を多量に含む 粘性あり
- 6 暗褐色土 焼土を多量に含む 粘性あり
- 7 黒褐色土 焼土粒子、炭化粒子を少量含む
- 8 黒褐色土 焼土、焼土粒子、炭化粒子、炭化物を多量に含む
- 9 黒褐色土 焼土粒子を多量に含む（灰層）
- 10 暗褐色土 焼土を多量に含む
- 11 暗褐色土 10層に似るがやや明るい



第272図 第157号住居跡出土遺物(2)



13・16は底部が欠損している。

19から22は、須恵器（NS）の椀である。23・24は、高台付皿である。25から30は、高台付椀である。25から27は、須恵器（S）である。他は、須恵器（NS）である。20・26・29は底部、22・27は口縁部が欠損している。30は底部のみである。

31は、緑釉陶器の高台付椀である。口縁部破片であ

る。

32は、土師器の鉢である。

33から38は、土師器の甕である。39は、須恵器（S）の甕である。40は、須恵器（S）の長頸壺である。33から36・39は口縁部のみ、38は脚部のみ、40は底部のみである。37は胴部中位以上と高台が欠損している。

41から45は、土錘である。

第 230 表 第 157 号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鋳	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏	A I	H	11.6	3.2		8.4	B, E, G	不良	明 橙	60	
2	坏	A IV	H	11.9	3.6		7.4	B, E, F	普通	淡 橙	100	
3	坏	A IV	H	11.6	3.6		7.1	B, E	普通	淡 橙	80	
4	坏	A I	H	12.0	3.5		7.3	E	良好	R 白っぽい橙	30	
5	坏	A IV	H	12.2	3.5		8.0	B, E, F	普通	暗茶 褐	60	
6	坏	A	H	12.1	3.5		8.3	B, E, G	普通	明 橙	30	
7	坏	A I	H	12.0	3.2		8.0	B, E, G	普通	明 橙	40	
8	坏	A	H	12.0	3.2		9.0	B, E, G	不良	暗 灰 褐	30	
9	坏	A V	H	11.8	3.0		8.4	B, E	普通	やや暗い橙	50	
10	坏	A	H	12.5	3.2		8.5	E, G	不良	淡 橙	20	
11	皿	C I	H	12.7	2.0		7.6	B, E, G	良好	暗 橙	30	
12	皿	B II	H	14.6	2.2		10.0	B, E, G	やや不良	暗 橙	20	
13	皿	B I	H	14.1	2.5		10.0	B, E, H	良好	淡 橙	30	
14	皿	B I	H	14.1	3.2		9.8	B, E	不良	淡 橙	70	
15	皿	B II	H	14.2	3.1		9.2	B, E	良好	暗 橙	30	
16	皿	B	H	14.2				B, E	普通	くすんだ橙	20	
17	皿	C I	H	15.3	3.1		5.7	B, E	普通	くすんだ橙	70	
18	椀	NS		13.9	5.0		8.0	B, E, G	普通	橙	100	
19	椀	NS		12.8	3.8		7.0	B, E	良好	L 灰	25	
20	椀	NS		13.7	3.8		6.5	B, E, H	良好	R 淡 橙	80	
21	椀	NS		11.4	3.9		5.0	B, D, E	良好	L 灰	40	
22	椀	NS					6.3	B, D, E	良好	R 灰	25	
23	高台付皿	NS		13.4	3.4		6.9	B, E, I	普通	L 灰 黄	80	
24	高台付皿	NS		11.9	2.9		7.1	B, D, E, I	良好	R 灰	100	
25	高台付椀	S		15.0	5.7		7.5	B, C, G	良好	L 灰	100	底部-100。体部-20
26	高台付椀	S		14.8	6.2		7.2	B, G	良好	R 灰 褐	40	
27	高台付椀	S					8.2	B	良好	R 外-灰。内-灰褐	50	
28	高台付椀	NS		14.1	5.6		6.7	B, E, I	普通	L 灰 黄	75	
29	高台付椀	NS		14.0				B, D	良好	R 灰 白	40	
30	高台付椀	NS					6.5	B, E, I	普通	L 灰 白	10	
31	高台付椀	M						B	普通	淡 緑	5	
32	鉢	H		18.3	10.1		9.6	B, E	普通	橙	50	
33	甕	B III a	H	20.3				B, E	不良	赤 橙	20	口縁部のみ
34	甕	B III b	H	18.9				E, G	良好	暗 橙	20	口縁部のみ。カマド
35	甕	B III c	H	21.0				B, E	普通	橙	20	口縁部のみ。カマド
36	台付甕	H		11.5				B, E	普通	内-こげ茶	10	口縁部のみ
37	台付甕	H						C, E, I	良好	暗 赤 褐	40	
38	台付甕	H					9.3	D, E	良好	淡 橙	40	
39	広口壺	S		22.6				B, G, K	良好	灰 褐	20	
40	長頸壺	S					8.2	B, E	良好	暗 灰 褐	40	

第 231 表 第 157 号住居跡出土土錘観察表

番号	色 調	残存率	長 さ	径	穴 径	重さ(g)	型 式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
41	橙	100	4.8	1.2	0.2	4.8	C 2	I b	408	
42	にぶい橙	100	4.5	1.0	0.4	4.2	C 2	I a	409	
43	にぶい橙	100	4.2	1.2	0.3	5.0	C 2	I a	410	
44	橙	100	0.1	1.0	0.3	4.1	C 2	I a	411	
45	にぶい橙	100	4.1	1.2	0.3	4.1	C 2	I b	412	

46・47は、土製の紡錘車である。

48から50は、鉄製品である。48は鏝、49は延板状鉄製品、50は板状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第157号堅穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第158号住居跡（第273図）

K-12・13グリッドで確認した。周辺は、掘立柱建物跡・小穴などの遺構が密集していた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.25m・短辺3.64m・深さ0.40mであった。幅0.23mの壁溝を、カマド部分を除いて検出した。また南壁中央の壁際に、径0.42m・深さ0.08mの小穴を検出した。

入り口施設であらう。

主軸方位は、N-89°-Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。煙道部は、第37号掘立柱建物跡が破壊していた。袖は検出できなかったことから当初から造られなかったと判断した。燃焼部の中央左寄りに支脚の抜取り痕跡である円形の窪みがみられた。燃焼部から煙道部へは急な傾斜で移行していた。

貯蔵穴は、カマド右脇の南東隅に検出した。形状は楕円形で規模は、長径1.48m・短径0.63m・深さ0.12mであった。

遺構の切り合い関係は、第37号掘立柱建物跡より古く、第397・398号土壇より新しかった。

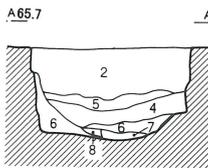
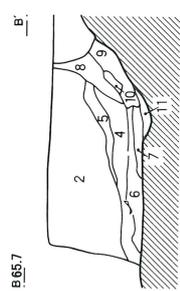
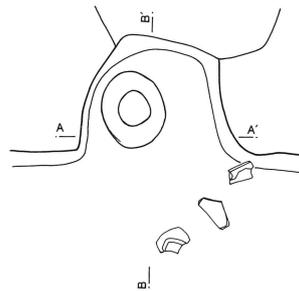
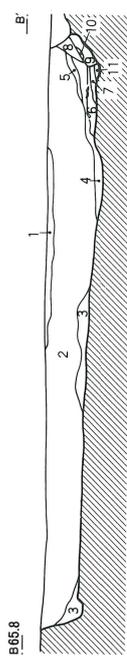
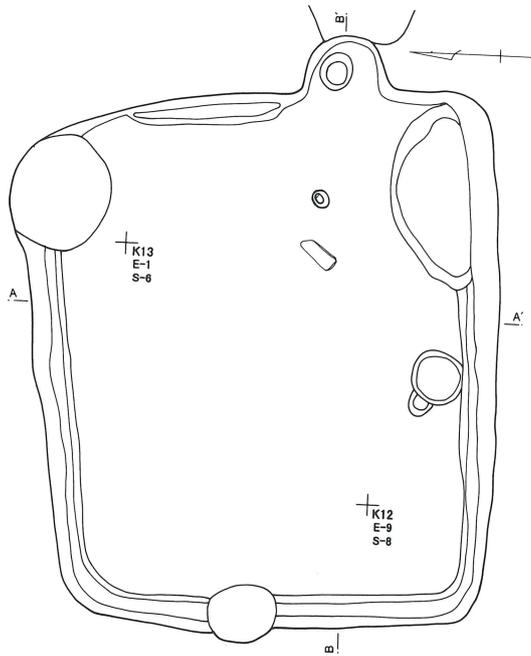
第 232 表 第 158 号住居跡出土遺物観察表

番号	器 種	種別	口径	器高	鏜	底径	胎 土	焼 成	轆轤	色 調	残存	出土位置その他
1	坏 A	IV	H	11.7	3.4	7.3	B, C, D, E	普 通		暗 黄 褐	30	
2	坏	A	H	11.7		7.2	B, C, E	不 良		黄 褐	30	
3	坏 A	IV	H	11.8	3.5	6.8	B, C, E	普 通		淡 黄 褐	40	
4	坏 A	IV	H	14.6	3.4	9.9	B, D, E	不 良		淡 黄 褐	60	カマド
5	坏	A	H	12.2		8.5	B, D, E	不 良		暗 黄 褐	30	
6	高台付	椀	S			6.1	B	良 好		灰 白	40	貯穴
7	高台付	椀	S			6.6	B, C	良 好		黄 灰	30	
8	高台付	椀	K			5.6	B	良 好		灰 白	20	
9	段	皿	M				B	普 通		淡 緑	5	
10	甕 B	Ⅲ a	H	20.5			A, B, E	良 好		橙	25	
11	台 付	甕	H	12.8			B, E	良 好		浅 黄 橙	20	
12	台 付	甕	H	12.4	17.3	8.7	B, C, H	良 好		橙	60	
13	大	甕	S				B, G, H	普 通		灰 白	10	
14	大	甕	S				B	良 好		灰	5	

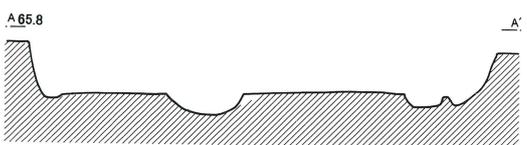
第 233 表 第 158 号住居跡出土土錘観察表

番号	色 調	残存率	長 さ	径	穴 径	重さ(g)	型 式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
15	橙	100	5.3	1.8	0.4	15.0	B 1	I a	58	
16	浅黄橙	100	4.0	1.8	0.4	11.4	B 1	I b	59	

第273図 第158号住居跡・出土遺物



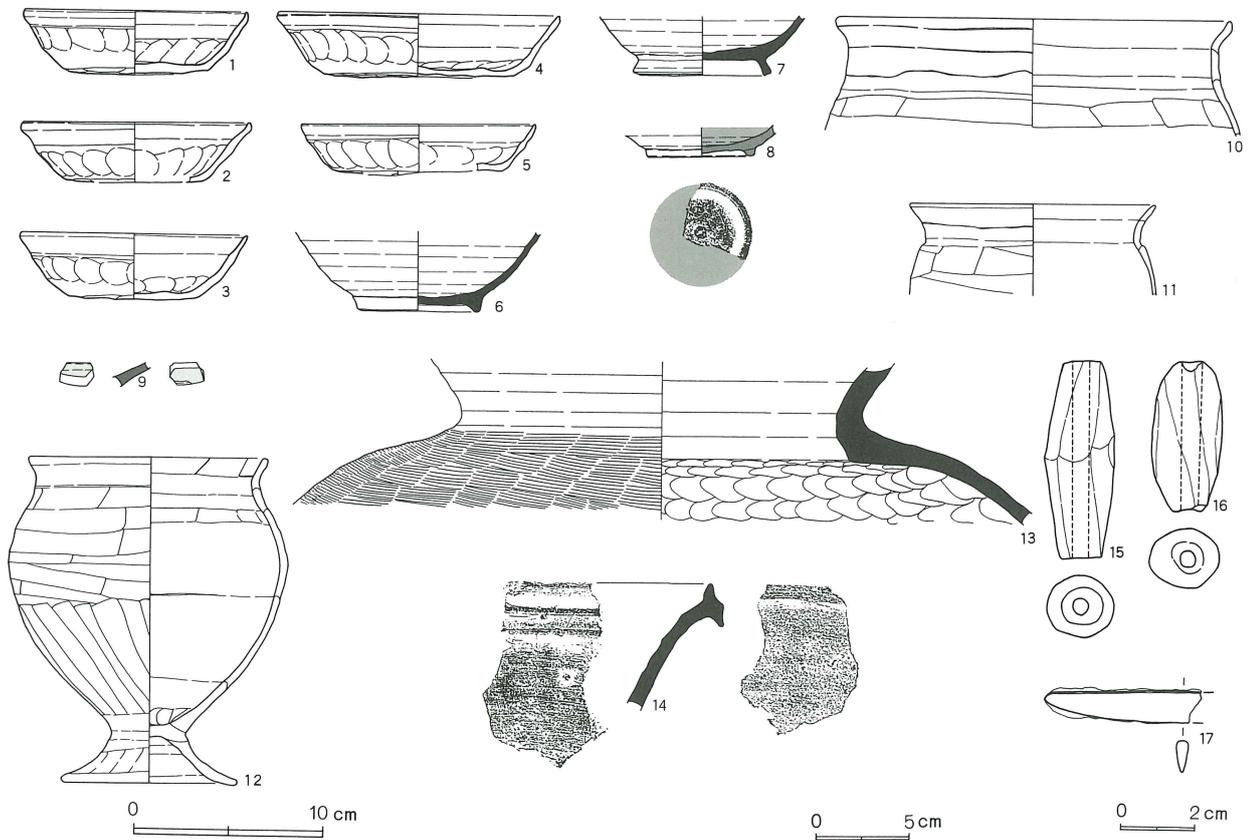
0 50cm



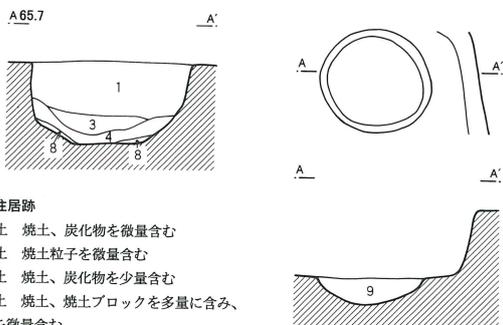
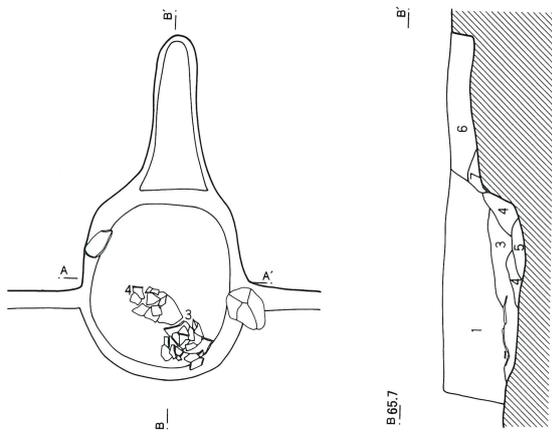
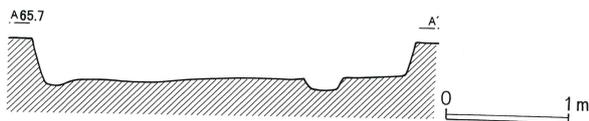
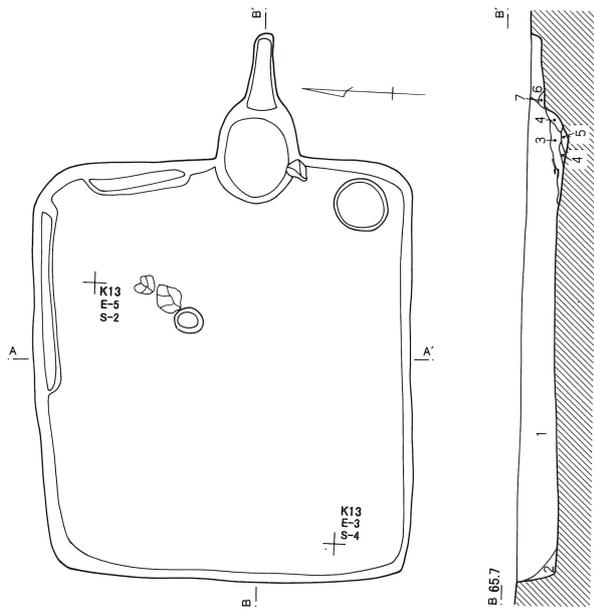
0 1m

第158号住居跡

- 1 暗褐色土 焼土を多量に含み、炭化物を少量含む
- 2 黒褐色土 焼土を少量含み、炭化物を微量含む 粘性あり
- 3 黄褐色土 焼土、炭化物を多量に含む
- 4 暗褐色土 焼土、炭化物を微量含む
- 5 褐色土 焼土、炭化物を微量含む
- 6 暗褐色土 焼土、焼土ブロックを多量に含み、灰、炭化物を微量含む
- 7 黒褐色土 焼土、炭化物を少量含む (灰層)
- 8 黄褐色土 焼土を多量に含み、炭化物を微量含む
- 9 暗褐色土 焼土を少量含み、炭化物を微量含む、灰を多量に含む
- 10 暗褐色土 焼土ブロックを多量にふくむ
- 11 黒褐色土 焼土、炭化物を少量含む、灰を多量に含む

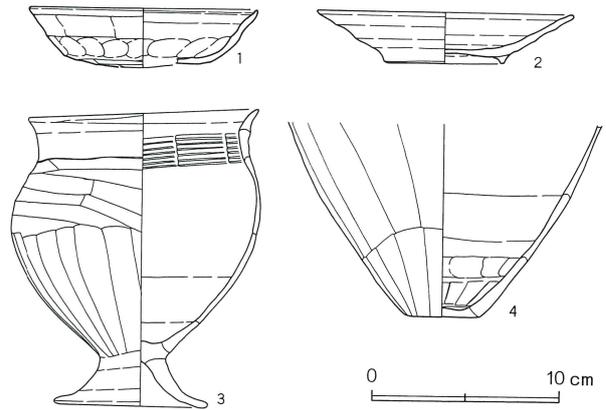
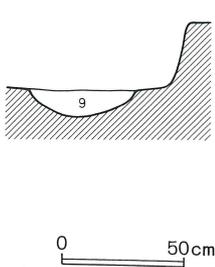


第274図 第159号住居跡・出土遺物



第159号住居跡

- 1 暗褐色土 焼土、炭化物を微量含む
- 2 黒褐色土 焼土粒子を微量含む
- 3 黒褐色土 焼土、炭化物を少量含む
- 4 黒褐色土 焼土、焼土ブロックを多量に含む、炭化物を微量含む
- 5 黒褐色土 焼土、炭化物を少量含む、灰を多量に含む
- 6 灰黄褐色土 焼土を少量含む、炭化物を微量含む
- 7 黒褐色土 焼土を多量に含む
- 8 黒褐色土 焼土を少量含む、炭化物、灰を多量に含む
- 9 黒褐色土 焼土、炭化物を少量含む 粘性あり



1から5は、土師器の坏である。1・3・4は、坏AVである。ほかは、坏Aである。2・5は底部が欠損している。

6・7は、須恵器(S)の高台付椀である。口縁部が欠損している。

8は、灰釉陶器の高台付椀である。底部のみである。

9は、緑釉陶器の段皿である。体部破片である。

10から12は、土師器の甕である。10・11は口縁部のみである。

13・14は、須恵器(S)の大甕である。13は口縁部と胴部中位以下が欠損している。14は口縁部破片である。

15・16は、土錘である。

17は、鉄製品の刀子の切先である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第158号竪穴式住居跡を中堀V期に位置付けたい。

第159号住居跡 (第274図)

K-13グリッドで確認した。周辺は、掘立柱建物跡・溝・小穴などの遺構が密集していた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.31m・短辺3.00m・深さ0.33mであった。東壁および北壁の一部から、幅0.2mの壁溝を検出した。また住居跡の中央やや北寄りから、径0.18m・深さ0.1mの小穴一基を検出した。

主軸方位は、N-88°-Eであった。

カマドは、東壁やや南寄りに検出した。袖は検出できなかったことから当初から造られなかったと判断した。焚き口部の右側には、川原石が補強材として使用されていた。燃焼部は、整った隅丸長方形であった。焚き口部前面から燃焼部にかけては、浅く掘り込まれていた。燃焼部から煙道部へは段をもって移行していた。

貯蔵穴は、カマド右側の南東隅で検出した。形状は円形で、径0.44m・深さ0.11mであった。

遺構の切り合い関係は、第38号掘立柱建物跡より古かった。

遺物は、カマド内から土師器の台付甕(3)・甕(4)が出土した。

1は、土師器の坏AⅣである。

2は、須恵器(NS)の高台付皿である。

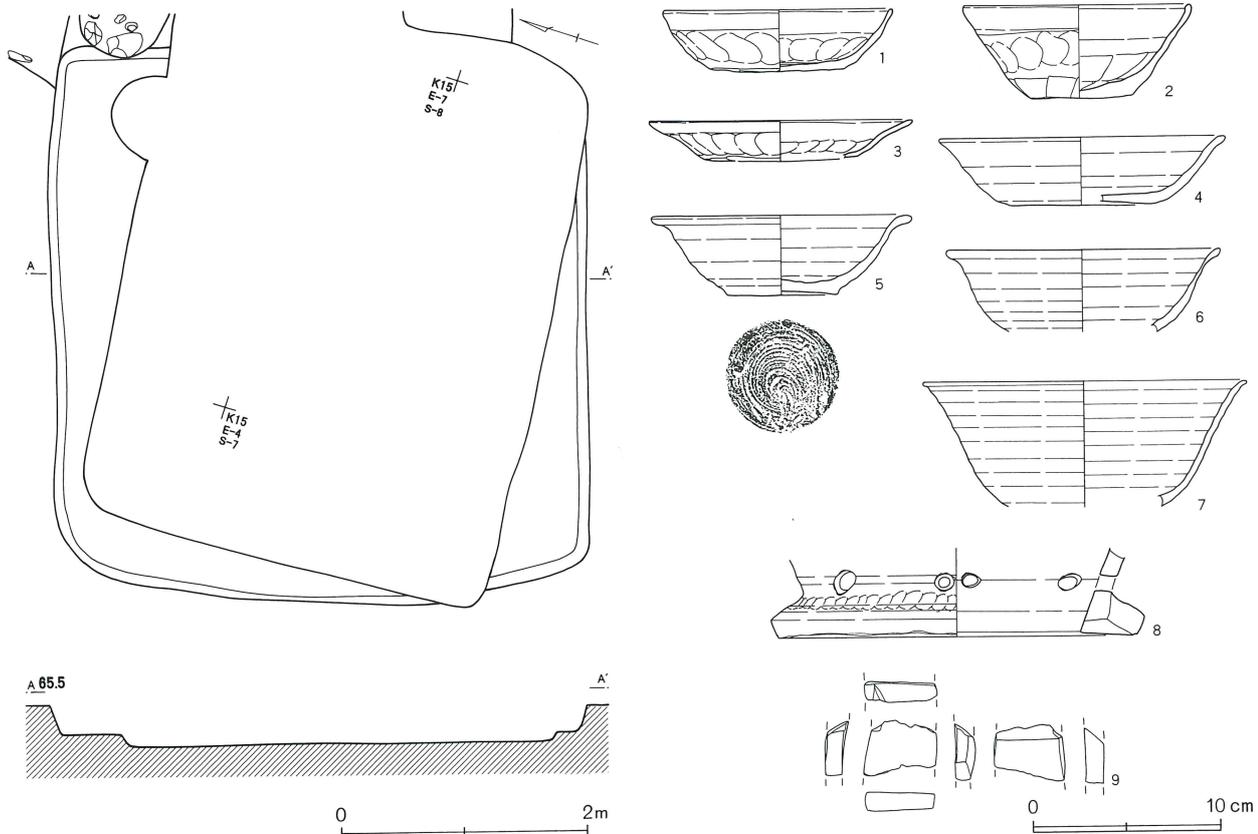
3・4は、土師器の甕である。4は底部のみである。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第159号竪穴式住居跡を中堀Ⅳ期に位置付けたい。

第234表 第159号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 AⅣ	H	12.0	3.2		7.1	B, E	良好		橙	70	
2	高台付皿	NS	13.4	2.7		6.0	B, D	良好		黄 灰	80	カマド
3	台付甕	H	11.9	15.8		7.7	B, E	良好		橙	80	
4	甕底部	H				3.3	B, E, H	良好		橙	80	カマド

第275図 第160号住居跡・出土遺物



第160号住居跡（第275図）

J-15グリッドで確認した。周辺は、土壌・掘立柱建物跡・小穴などの遺構が密集し、さらに第161号住居跡と重複していたことから、確認に手間取った。

住居跡の大半は、第161号住居跡が破壊したため、不明な点が多い。

住居跡の形状は長方形であった。規模は、長辺5.65m・短辺4.25m・深さ0.45mであった。

主軸方位は、N-78°-Eと推定した。

カマドは、東壁に造られていたと推定できるが、破壊されていたことから明らかにできなかった。

遺構の切り合い関係は、第161号住居跡より古く、第1土壌群C・F土壌より新しかった。

1は、土師器の坏AⅣである。2は、土師器の坏Bである。3は、土師器の皿である。3は底部が欠損している。

4・5は、須恵器（HS）の椀である。4は底部が欠損している。

6・7は、須恵器（NS）の高台付椀である。底部が欠損している。

8は、須恵器（NS）の甌である。底部のみである。

9は、砥石である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第160号竪穴式住居跡を中堀Ⅳ期に位置付けたい。

第161号住居跡（第276図・第277図）

J-15グリッドで確認した。周辺は、土壌・掘立柱建物跡・小穴などの遺構が密集し、しかも第160号住

居跡と重複していたため、確認に手間取った。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.39m・短辺3.36m・深さ0.26mであった。

主軸方位は、N-85°-Eであった。

カマドは、東壁やや北寄りに検出した。袖は検出できなかったが、煙道部の位置から、造り付けられていたと判断した。燃焼部の掘り込みはみられなかった。

貯蔵穴は、カマド右側の南東隅に検出した。形状は円形で、径0.53m・深さ0.18mであった。

遺構の切り合い関係は、第160号住居跡、第1土壌群C・F土壌より新しかった。

遺物は、貯蔵穴内から土師器の坏（2・7・14）、須恵器の皿（31）がまとまって出土した。

1から14は、土師器の坏である。10は、坏AⅡである。1・4・8は、坏AⅣである。2・5・6は、坏AⅤである。3・7・9・11・12は、坏AⅥである。13・14は、坏Bである。6・10・12・14は底部が欠損している。

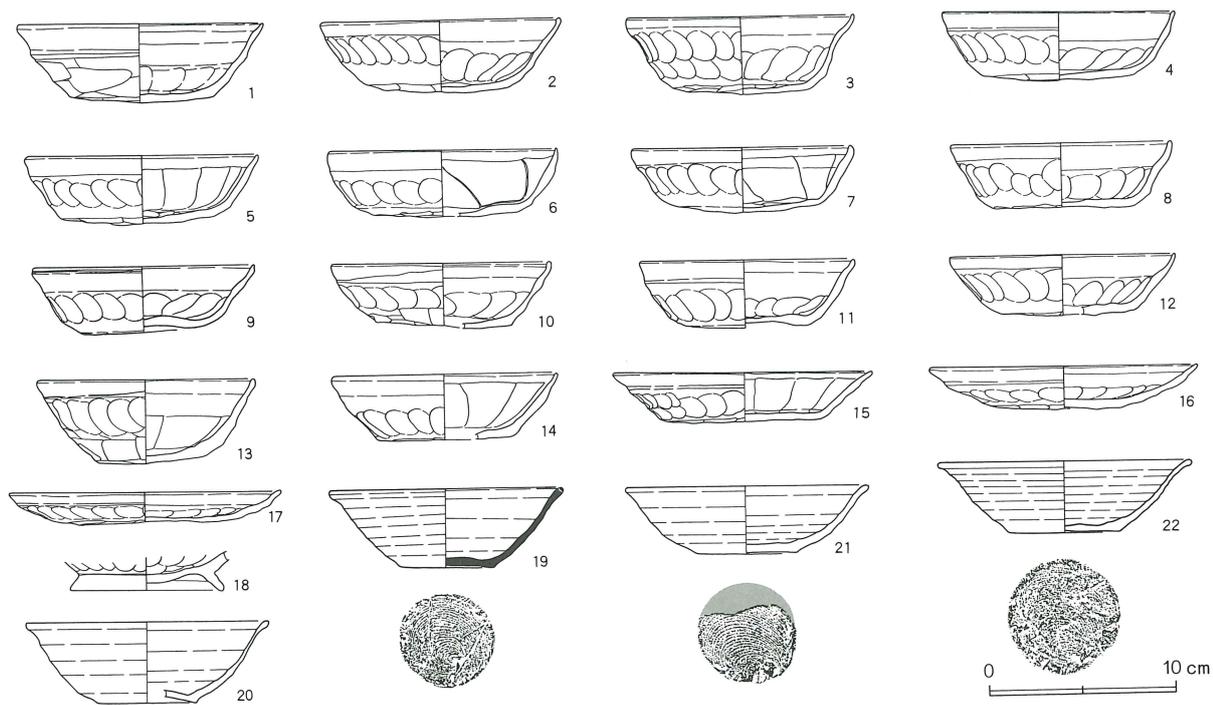
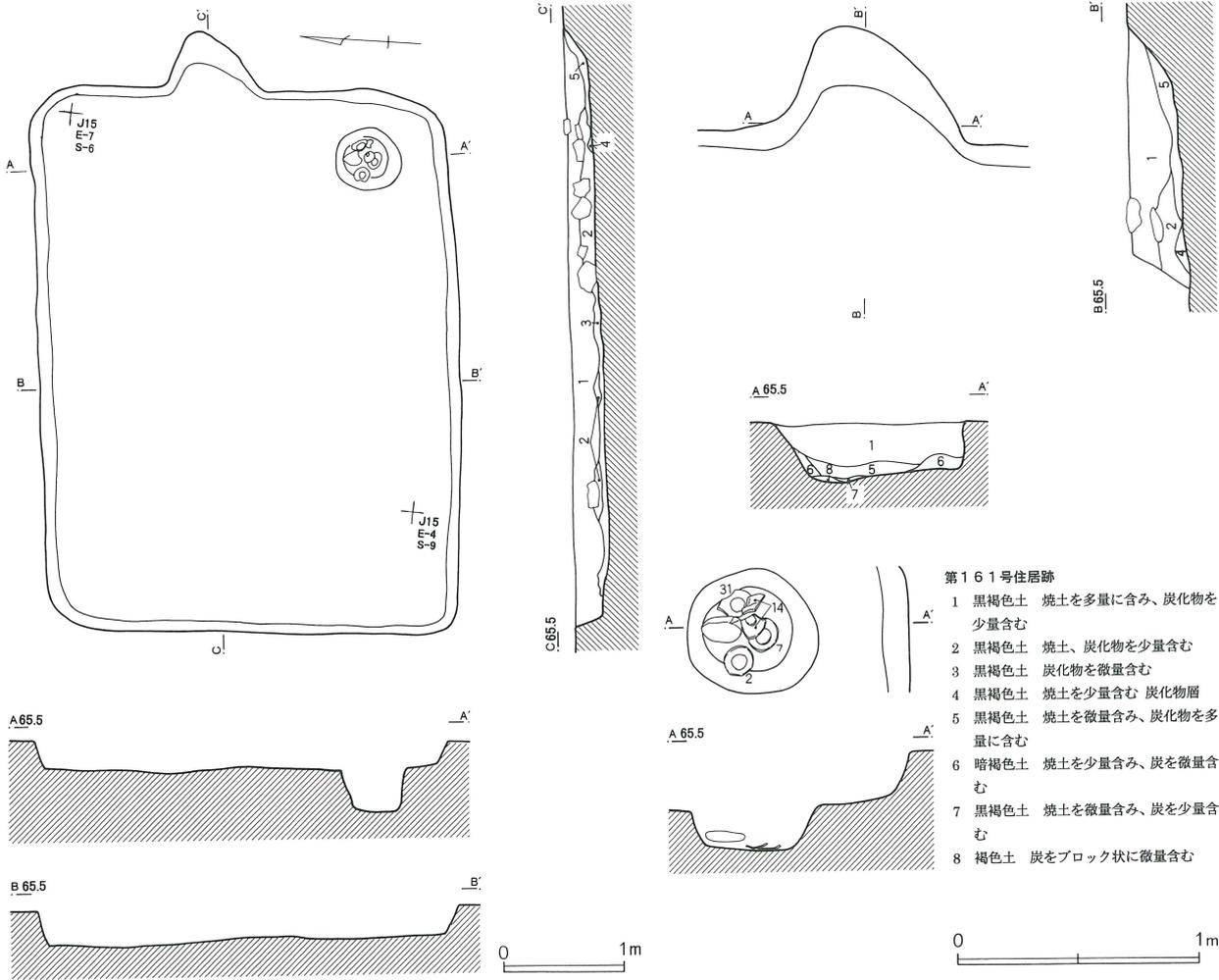
15から17は、土師器の皿である。18は、土師器の高台付坏Bである。18は底部のみである。

19から23は、椀である。19は、須恵器（S）である。23は、須恵器（NS）である。他は、須恵器（HS）である。24から27は、高台付椀である。24・27は、須恵器（NS）である。25・26は、須恵器（HS）である。28から31は、皿である。28・29は、須恵器（S）である。30・31は、須恵器（NS）である。32・33は、須恵器（HS）の高台付皿である。20は底部、24・33は高台が欠損している。26は底部のみである。

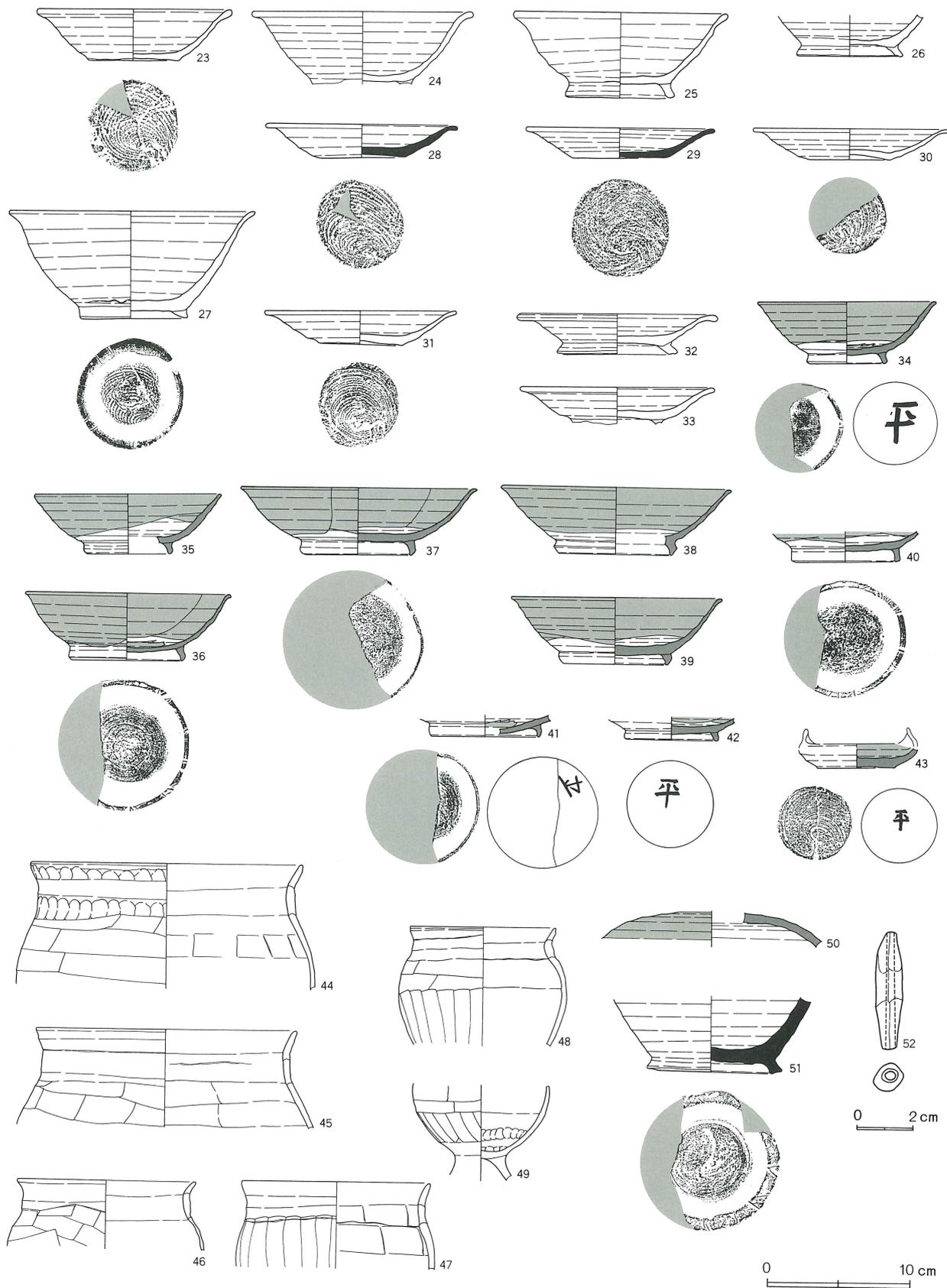
第235表 第160号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A	IV	H	12.0	3.3	7.1	B, C, D	普通		黄 橙	60	
2	坏	B	H	11.8	5.0	5.3	B, C, E, H	普通		暗 赤 橙	50	
3	皿		H	13.8		8.0	B, D, E	普通		明 橙	20	
4	椀		HS	14.9	3.6	7.4	B, C, I	普通		に ぶ い 橙	25	
5	椀		HS	13.3	4.3	5.7	B, C, E, I	良好		に ぶ い 橙	70	
6	高台付椀		NS	14.2			B, I	良好		褐 灰	15	
7	高台付椀		NS	16.9			B, E, I	良好		灰 白	30	
8	甌		NS			18.6	B, C, E, G	良好		黒	30	

第276図 第161号住居跡・出土遺物（1）



第277图 第161号住居跡出土遺物(2)



第236表 第161号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A	IV	H	12.9	4.2		7.5	B, C, D, E	普通	淡 橙	60	砂
2	坏 A	V	H	12.5	3.9		6.5	A, B, D, E	良好	淡 橙	90	貯蔵穴 砂
3	坏 A	VI	H	11.9	4.2		7.1	B, C, D, E	普通	淡 橙	70	
4	坏 A	IV	H	12.2	3.7		7.9	B, D, E	良好	淡 黄 褐	50	
5	坏 A	V	H	12.2	3.6		8.0	B, D, E	普通	暗 茶	40	
6	坏 A	V	H	12.0	3.6		7.6	B, D, E	普通	淡 橙	30	
7	坏 A	VI	H	11.6	3.5		7.7	B, E	普通	暗 茶	90	貯蔵穴
8	坏 A	IV	H	11.6	3.5		7.4	B, D, E	普通	淡 橙	30	
9	坏 A	VI	H	11.8	3.6		6.5	B, C, D, E	普通	淡 黄 褐	50	
10	坏 A	II	H	11.5	3.5		7.1	B, D, E	普通	黄 褐	100	
11	坏 A	VI	H	11.4	3.6		6.5	B, C, E	普通	淡 黄 橙	90	
12	坏 A	VI	H	11.8	3.2		6.4	B, D, E	普通	淡 黄 橙	30	
13	坏	B	H	11.4	4.5		5.6	B, C, D, E	良好	暗 橙	90	カマド
14	坏	B	H	11.8	3.5		6.9	B, D, E	普通	淡 茶	30	
15	皿		H	13.6	2.7		8.0	B, C, D, E	普通	白 橙	20	
16	皿		H	14.0	2.3		5.9	B, D, E	普通	淡 黄 橙	40	
17	皿		H	14.4	1.7		7.4	B, C, D, E	普通	淡 明 橙	40	
18	高台付坏	B	H				8.0	B, D, E	普通	明 橙		底部のみ-20
19	椀		S	12.2	4.2		5.1	B, D	良好	灰	95	貯蔵穴
20	椀		HS	12.9	4.3		5.2	B, D	良好	灰	40	貯蔵穴
21	椀		HS	12.9	3.6		5.4	B, E	普通	灰 白 黄	50	
22	椀		HS	13.2	3.8		5.9	B, C, I	普通	灰	50	
23	椀		NS	13.3	3.6		6.3	B, E, I	普通	灰	50	
24	高台付椀		NS	15.3				B, C, I	良好	灰 白 橙	70	
25	高台付椀		HS	14.6	6.0		7.4	B, I	良好	に ぶ い 橙	70	
26	高台付椀		HS				7.2	B, E	良好	灰	30	
27	高台付椀		NS	16.8	7.6		7.3	B, E	良好	灰 白	80	
28	皿		S	13.2	2.4		6.0	B	良好	灰	80	
29	皿		S	12.9	2.1		6.5	B	良好	灰	90	
30	皿		NS	13.4	2.2		5.5	B, C	良好	灰 黄	40	
31	皿		NS	13.2	2.4		5.7	B, C	良好	灰 黄 黄	95	貯蔵穴
32	高台付皿		HS	13.5	2.8		8.0	B, C, E, I	良好	に ぶ い 橙	60	
33	高台付皿		HS	13.2				B, C, I	良好	灰 黄 白	40	
34	高台付椀		K	12.2	4.3		5.2	D	良好	灰 淡 灰 白	30	
35	高台付椀		K	12.8	4.2		5.8	B	良好	淡 灰 白	20	
36	高台付椀		K	14.1	4.7		7.7	D	良好	淡 灰 白	50	
37	高台付椀		K	16.1	4.7		7.5	D	不良	暗 灰 白	50	
38	高台付椀		K	15.0	4.7		7.8	B	良好	灰	20	
39	高台付椀		K	14.5	4.6		7.3	D	良好	灰 白 白	30	
40	高台付椀		K				7.3	D	良好	灰 淡 灰	20	
41	高台付椀		K				7.4	B	良好	淡 灰 白	10	
42	高台付椀		K				6.3	D	良好	灰 白	20	
43	耳		K				5.3	D	良好	淡 灰 白	70	
44	甕 B	III a	H	18.8				B, C, H	良好	橙 黄 橙	60	
45	甕 B	III a	H	18.0				B, E	良好	浅 黄 橙	20	
46	台付甕		H	12.2				B, E, I	良好	浅 黄 橙	50	
47	甕 C		H	13.0				B, E, H	良好	黄 橙	25	
48	台付甕		H	10.0				B, H	良好	橙	70	貯蔵穴
49	台付甕		H					B, E	良好	羽 褐	80	
50	長頸壺		K					D	良好	暗 灰	10	貯蔵穴
51	長頸壺		S				9.0	D	良好	暗 灰	10	

第 237 表 第 161 号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
52	浅黄	100	4.1	1.1	0.4	3.4	C 2	I b	413	

34から42は、灰釉陶器の高台付椀である。34・41・42の外底部には、墨書「平」がみられる。35・38は底部が欠損している。40から42は底部のみである。

43は、灰釉陶器の耳皿である。底部外面に墨書「平」がみられる。耳が欠損している。

44から49は、土師器の甕である。44から47は胴部中位以下、48は胴部下位以下、49は胴部上位以上と高台が欠損している。

50は、灰釉陶器の長頸壺である。51は、須恵器(S)の長頸壺である。50は胴部上位のみ、51は底部のみである。

52は、土錘である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第161号竈穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第162号住居跡（第278図・第279図・第280図）

K-15グリッドで確認した。周辺は、住居・溝などの遺構が比較的密集していた。

住居跡の形状は、不整形であった。規模は、長辺4.75m・短辺4.31m・深さ0.35mであった。住居中央から円形の土壌を検出した。規模は、径0.77m・深さ0.31mであった。この土壌に接して、径0.31m・深さ0.13mの小穴と、住居跡の中央やや西寄りに、径0.55m・深さ0.12mの小穴を検出した。

炭化材が、床面から多量に出土したことから、いわゆる焼失住居跡と判断した。

主軸方位は、N-81°-Eであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。袖は検出されず、当初から造られていなかったと判断した。燃焼部の掘り込みはみられなかった。燃焼部中央には、楕円形の支脚の抜き取り痕跡を検出した。

遺構の切り合い関係は、第23号区画溝より新しかった。

遺物は、住居跡の北東部から、土師器の坏(1~4)、須恵器の坏(11)・高台付椀(14)が出土した。また住居跡内から大形の川原石が多数出土した。

1から7は、土師器の坏である。1・5は、坏AⅤである。ほかは、坏AⅥである。7は底部が欠損している。2は黒色の付着物が底部内面に確認できる。漆の痕跡と考えられる。

8は、土師器の皿である。

9から13は、椀である。9は、須恵器(S)である。ほかは、須恵器(NS)である。14から24は、高台付椀である。18は須恵器(S)、16・19・20・23は須恵器(NS)、他は須恵器(HS)である。20は底部外面に墨書「床」がみられる。13・18は口縁部が欠損している。19から23は底部のみである。20は内面のみ黒色処理が施されている。

25は、須恵器(HS)の高台付皿である。33は、須恵器(NS)の高台付大椀である。33は底部が欠損している。

26から32は、灰釉陶器である。26は、段皿である。27から31は、高台付椀である。32は、耳皿である。30は底部外面に墨書「平」がみられる。26・27は底部が欠損している。28から31は底部のみである。

34は、須恵器(NS)の甕である。35は、須恵器(S)の甕である。36は、須恵器(NS)の甕である。34は胴部下位以下が欠損している。35・36は底部のみである。

37から39は、灰釉陶器の長頸壺である。37は口縁部のみ、38は頸部のみ、39は胴部のみである。

40から42は、羽口である。

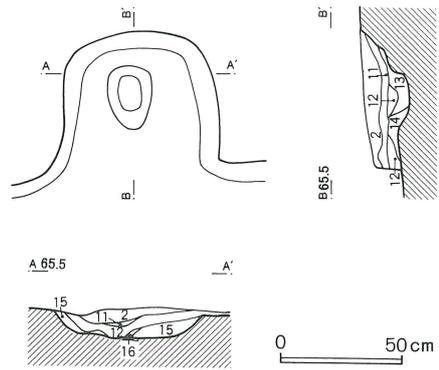
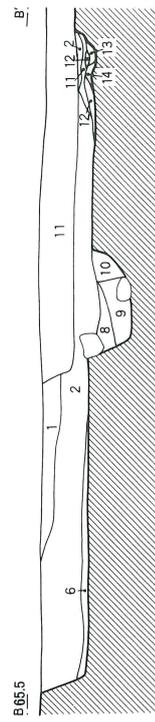
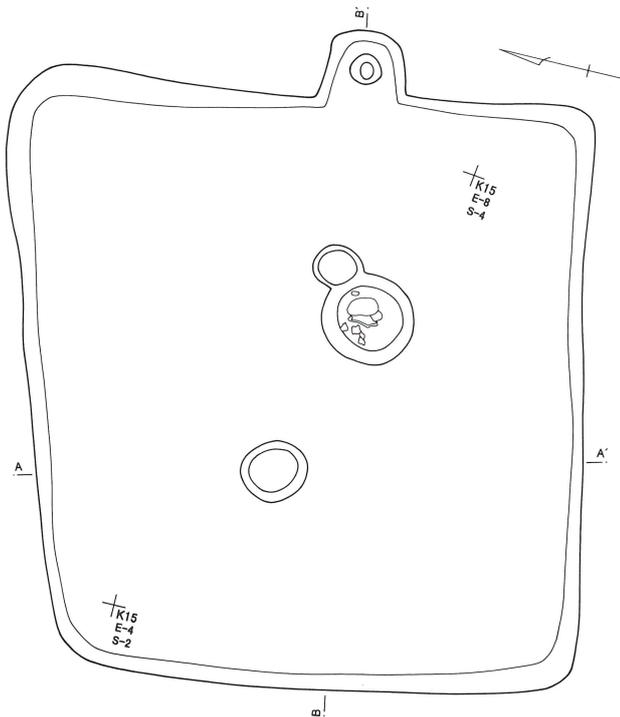
43・44は、土錘である。

45は、砥石である。

46は、凝灰岩の切石である。

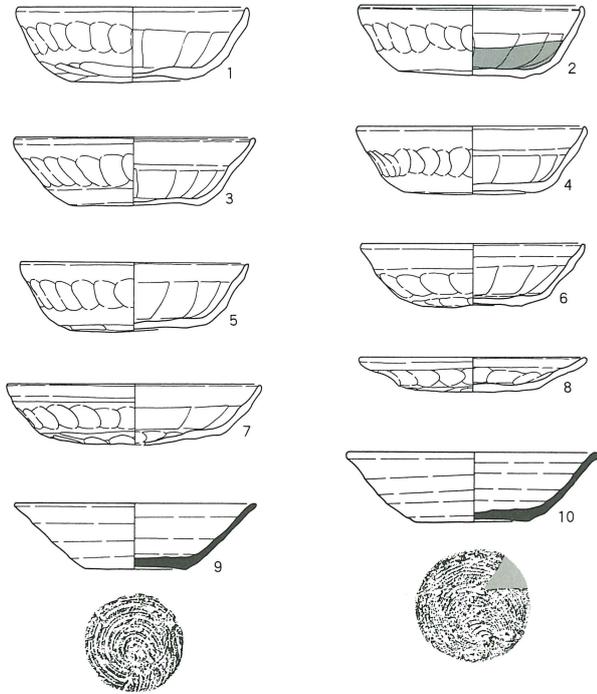
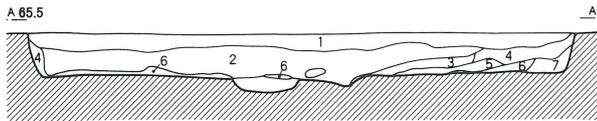
47から49は、鉄製品である。47は釘、48は鉄塊、49

第278図 第162号住居跡・出土遺物（1）

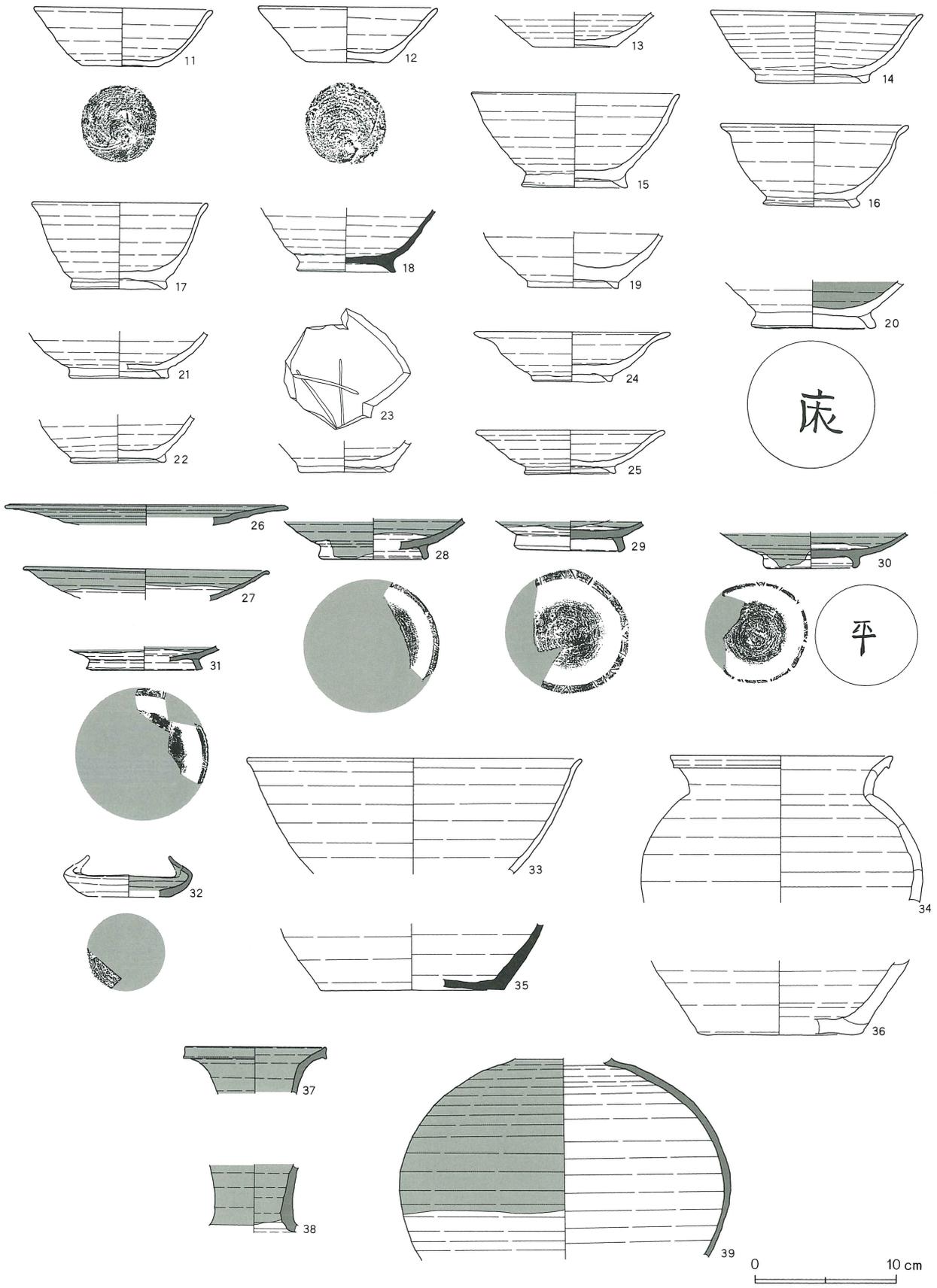


第162号住居跡

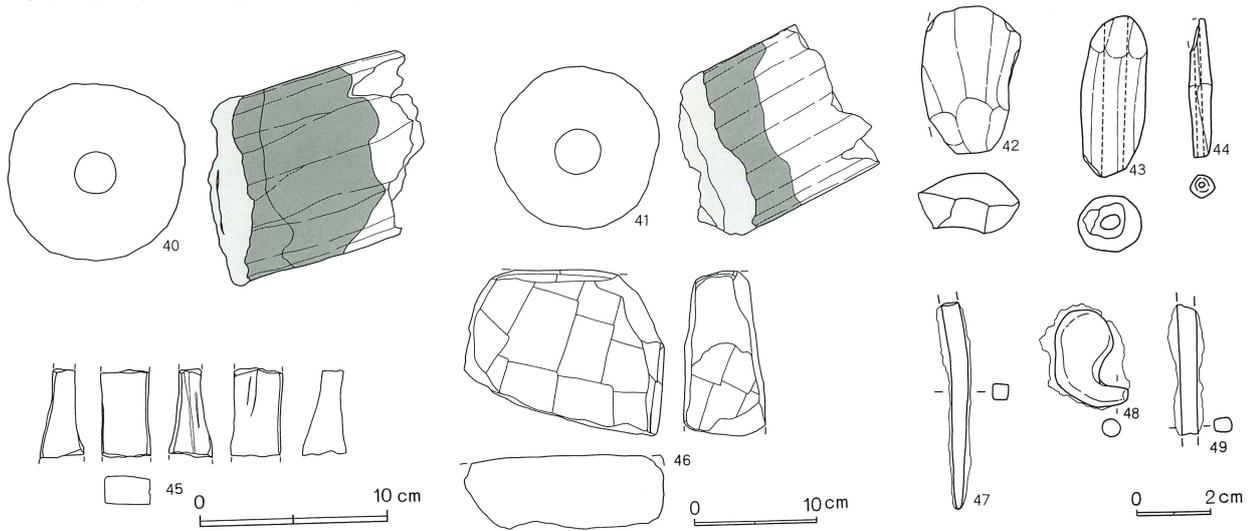
- 1 黒褐色土 焼土、炭化物を多量に含む
- 2 暗褐色土 焼土、炭化物を少量含む 3層との境に炭化物のうすい層あり
- 3 黄褐色土 焼土、炭化物を少量含む
- 4 暗褐色土 焼土、炭化物を多量に含む
- 5 黒褐色土 焼土、炭化物を多量に含む
- 6 暗褐色土 焼土を多量に含み、炭化物を少量含む 床面直上に炭化物のうすい層がみられる
- 7 黒褐色土 炭化物層
- 8 暗褐色土 焼土を多量に含み、炭化物、小礫を少量含む
- 9 暗褐色土 焼土、小礫を多量に含む
- 10 暗褐色土 礫層中に暗褐色土が充填する層 暗褐色土中には 焼土、炭化物を少量含む
- 11 黒褐色土 焼土、炭化物、砂利を多量に含む
- 12 暗褐色土 焼土を多量に含み、炭化物を層状に含む
- 13 暗赤褐色土 焼土、焼土ブロックを多量に含み、炭化物、灰を少量含む
- 14 褐色土 焼土、炭化物、灰を多量に含む
- 15 暗褐色土 焼土を多量に含み、炭化物を少量含む
- 16 赤褐色土 焼土ブロック主体



第279図 第162号住居跡出土遺物（2）



第280図 第162号住居跡出土遺物(3)



第238表 第162号住居跡出土遺物観察表(1)

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏	A V	H	12.1	4.1		7.0	B, E	普通	淡 橙	100	
2	坏	A VI	H	11.7	3.9		7.5	B, D, E	普通	淡 黄 灰	100	
3	坏	A VI	H	12.6	3.7		6.8	B, D, E	良好	明 橙	90	
4	坏	A VI	H	11.7	3.6		6.9	B, D, E	良好	淡 橙	80	
5	坏	A V	H	11.9	3.7		7.2	B, E	普通	淡 橙	70	
6	坏	A VI	H	11.6	3.4		5.3	B, D, E	良好	明 橙	80	
7	坏	A VI	H	13.3	3.2		9.0	B, D, E	普通	明 橙	40	
8	皿		H	11.8	1.9		7.0	B, C, H	不良	暗 茶 褐	60	
9	碗		S	12.6	3.5		5.3	B	良好	灰	40	
10	碗		S	13.1	3.7		6.1	B	良好	灰	80	
11	碗		NS	12.2	4.1		5.3	B	良好	灰	100	
12	碗		NS	12.5	3.9		5.6	B, I	普通	灰 白	60	
13	碗		NS				5.9	B, C, I	良好	にぶい黄橙	20	
14	高台付	碗	HS	14.8	5.1		7.3	B, E	良好	灰 黄	95	
15	高台付	碗	HS	14.5	6.7		7.1	B, C, I	良好	にぶい黄橙	50	
16	高台付	碗	NS	13.0	5.8		5.9	B, C, D	良好	灰 白	100	
17	高台付	碗	HS	12.4	6.1		6.4	B, E, I	良好	橙	20	
18	高台付	碗	S				6.6	B, D	良好	灰	50	
19	高台付	碗	NS				6.1	B, I	普通	灰 黄	30	
20	高台付	碗	NS				7.9	B, C, H	良好	橙	100	
21	高台付	碗	HS				6.7	B, C, G	良好	にぶい黄橙	20	
22	高台付	碗	HS				6.2	B, E, I	普通	にぶい黄橙	30	
23	高台付	碗	NS				6.2	B, E	良好	灰 白	100	
24	高台付	碗	HS	13.4	3.5		5.1	B, E, I	普通	にぶい黄橙	40	
25	高台付	皿	HS	13.0	3.1		6.2	B, E, I	良好	橙	40	
26	段	皿	K	19.2				B, D	良好	淡 灰	10	
27	高台付	皿	K	16.8				B	良好	淡 灰 白	10	
28	高台付	碗	K				7.1	B	良好	淡 灰 白	20	
29	高台付	碗	K				7.1	D	良好	暗 灰	30	

第 239 表 第 162 号住居跡出土遺物観察表 (2)

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
30	高台付碗	K				6.1		良好		淡灰白	50	口縁-70。胴-10
31	高台付碗	K				7.3	D	良好		淡灰	10	
32	耳皿	K	14.2	4.4		6.7	D	良好		灰白	60	
33	高台付碗	NS	23.5				B, E, G	普通		灰白	10	
34	ロクロ甕	NS	15.4				B, F, G, H, K	良好		灰白		
35	甕底部	S				12.8	B, E	良好		青灰	60	
36	甕底部	NS				10.3	B, E, G	良好		灰白	40	
37	長頸壺	K	9.7				D	良好		淡灰	10	
38	長頸壺	K					D	良好		淡灰白	10	
39	長頸壺	K					D	良好		灰白	20	

第 240 表 第 162 号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
42	橙	20	3.9			16.1	A 1	Ⅶ	11	
43	にぶい橙	95	4.3	1.7	0.5	10.9	B 1	I c	60	
44	橙	90	3.7	0.7	0.2	1.1	C 3	I b	641	

は棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第162号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第163号住居跡 (第281図)

J-16グリッドで確認した。周辺は、土壌・小穴などの遺構が密集し、さらに第2号井戸跡と重複していたため、確認に手間取った。

住居跡の南東部は、第2号井戸の破壊のため、全容は不明であった。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺4.10m・短辺3.83m・深さ0.45mであった。

主軸方位は、N-78°-Eであった。

カマドは、東壁の中央に、燃焼部と煙道部の一部を検出しただけで、不明な点が多かった。燃焼部から煙道部へは段をもって移行していた。

貯蔵穴は、カマド右側の南東隅に検出した。深さは0.15mであった。

遺構の切り合い関係は、第2号井戸跡より古かった。

1から3は、灰釉陶器である。1は耳皿、2は高台付皿、3は高台付碗である。1は耳、2は底部が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第163号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第164号住居跡 (第282図)

M-14グリッドで確認した。周辺は、区画溝・土壌・小穴が激しく重複し、覆土も類似していたため確認に手間取った。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺3.39m・短辺3.10m・深さ0.45mであった。

主軸方位は、N-39°-Eであった。

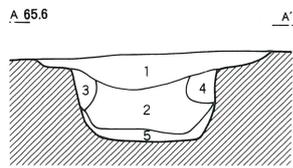
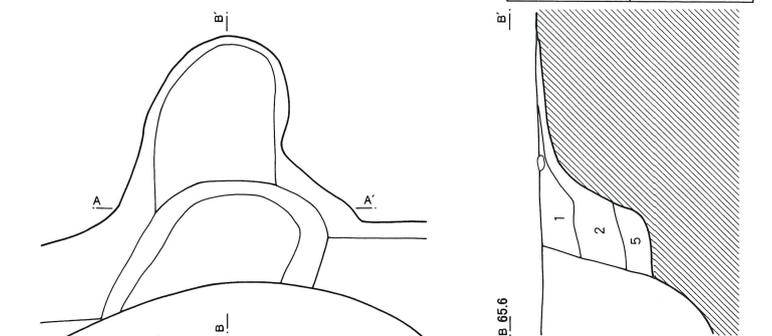
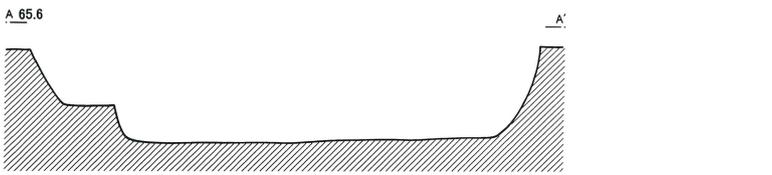
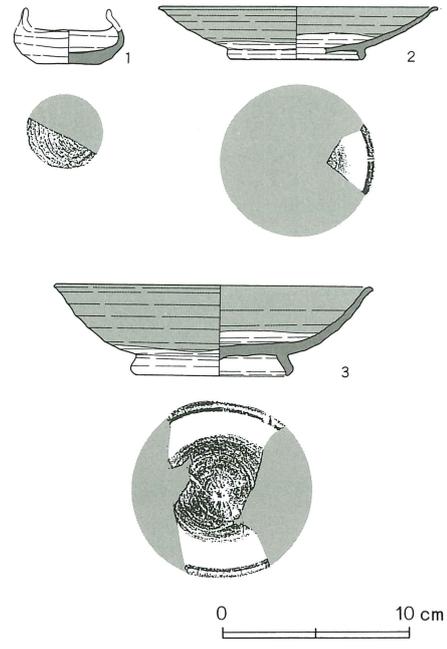
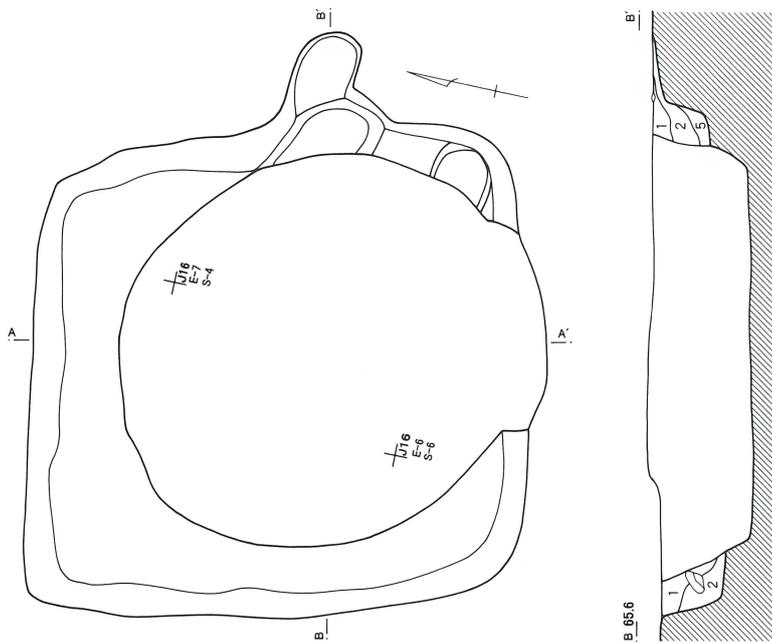
カマドは、東壁中央に造られていた。しかし大半が、第165号住居跡のカマドに破壊されていたため詳細は不明であった。

重複した第165号住居跡との切り合い関係は、断面

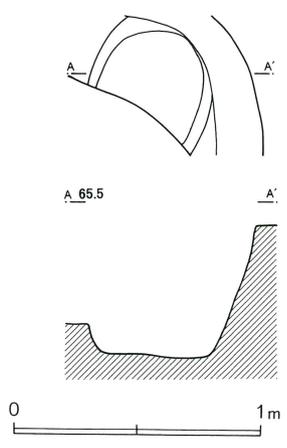
第 241 表 第 163 号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	耳皿	K				3.2	D	良好		灰白	40	
2	高台付皿	K	14.5	2.8		6.9	D	良好		灰	30	
3	高台付碗	K	16.5	4.8		8.0	D	良好		灰色	40	

第281図 第163号住居跡・出土遺物



- 第163号住居跡
- 1 暗黄褐色土 焼土を少量含み、砂利を多量に含む 粘性あり
 - 2 暗黄褐色土 焼土、砂利を少量含み、炭を微量含む 粘性あり
 - 3 暗黄褐色土 小石、砂利を多量に含む 粘性あり (袖部構築土)
 - 4 暗黄褐色土 焼土を少量含み、砂利を多量に含む 粘性あり (袖部構築土)
 - 5 暗褐色土 焼土、炭を多量に含み、焼土ブロックを少量含む 粘性あり



観察では確認できなかった。しかし、カマドの軸方向から、第164号住居跡が古いと判断した。また、第20区画溝より新しかった。

3から5は、土師器の坏である。3は坏C、4は坏A V、5は坏A VIである。4・5は底部が欠損している。

6は、灰釉陶器の高台付碗である。底部のみである。

7は、土師器の甕である。胴部上位以上が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第164号竪穴式住居跡を中堀VII期に位置付けたい。

第165号住居跡（第282図）

M-14・15グリッドで確認した。周辺は、区画溝・土壇・小穴が激しく重複していた。第164号住居跡の床面を精査中に検出した。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺2.55m・短辺2.16m・深さ0.45mであった。

主軸方位は、N-25°-Eであった。

カマドは、北壁の北東隅寄りに検出した。袖は検出できなかったが、造り付けの可能性もあった。焚き口部から燃焼部にかけては、楕円形に浅く掘り込まれて

いた。底面には小さな凹凸がみられた。燃焼部から煙道部には、段をもって移行していた。

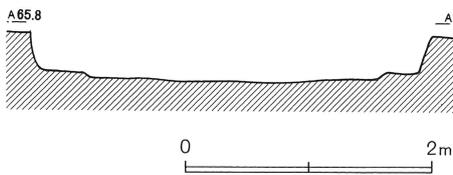
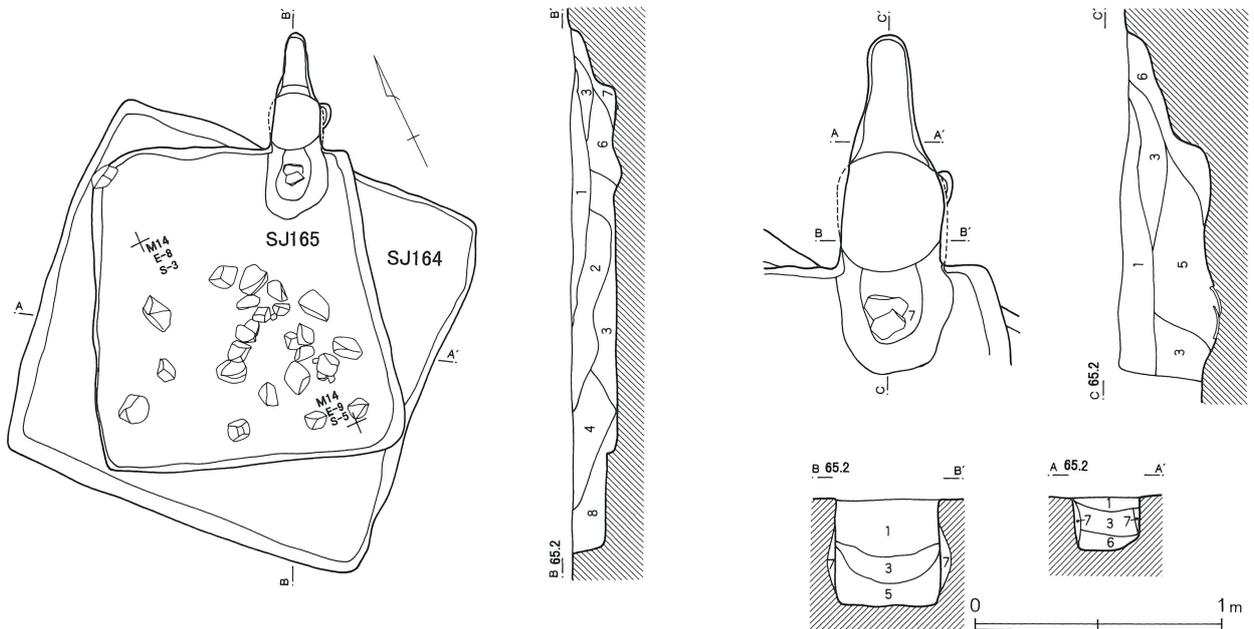
住居跡の中央から、大形の川原石が多量に出土したが、本住居跡に伴うかは明らかにできなかった。

遺構の切り合い関係は、第164号住居跡・第20号区画溝より新しかった。

1は、須恵器（HS）の高台付椀である。2は、須恵器（HS）の高脚高台付鉢である。1は底部が欠損している。2は脚部のみである。

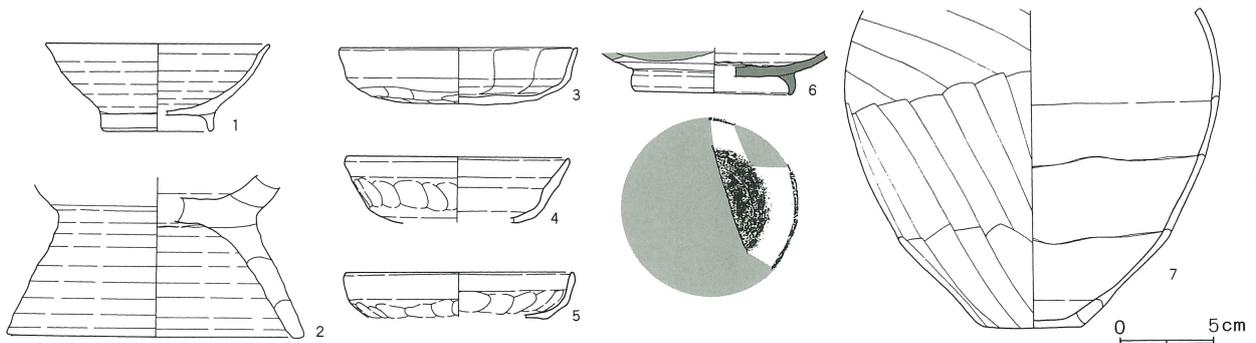
以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第165号壑

第282図 第164・165号住居跡・出土遺物



第164・165号住居跡

- | | |
|------------------------------------|-------------------------------|
| 1 暗褐色土 炭化物を微量含む | (1・2・4層は 焼土推積層でSJ165 埋土とは異なる) |
| 2 暗黒色土 焼土、炭化物を多量に含む 粒子が粗く、遺物を多量に含む | 5 暗黒褐色土 粘性あり(炭化物層) |
| 3 こげ茶色土 焼土、炭化物を微量含む | 6 赤褐色土 焼土、炭化物を多量に含む(天井部崩落土) |
| 4 暗黒色土 焼土、炭化物を多量に含む 粘性あり | 7 赤褐色土 地山が被熱により赤色化(煙道部) |
| | 8 暗黒色土 炭化物を多量に含む(SJ164 覆土) |



穴式住居跡を中堀Ⅶ期に位置付けたい。

第166号住居跡（第283図）

M-15グリッドで確認した。第20号区画溝内に検出した。区画溝の覆土と類似した覆土で、確認に手間取った。

住居跡の形状は、不整長方形であった。規模は、長辺3.74m・短辺2.58m・深さ0.33mであった。

主軸方位は、N-74°-Eであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。袖は検出できず、当初から造られなかったと判断した。燃焼部の掘り込みはみられなかった。

遺構の切り合い関係は、第20号区画溝・第481号土壇より新しかった。

1は、灰釉陶器の高台付皿である。底部のみである。

2は、須恵器（S）の大甕である。口縁部破片である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第166号堅穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第167号住居跡（第284図）

N-14グリッドで確認した。第21号区画溝内に検出した。区画溝の覆土と類似した覆土のため、確認に手間取った。隣接した第169号住居跡と、ほぼ同じ主軸方位であった。

住居跡の形状は、不整方形であった。規模は、長辺3.89m・短辺3.58m・深さ0.30mであった。

主軸方位は、N-66°-Eであった。

カマドは、東壁の南東隅に検出した。袖は検出できず、当初から造られなかったと判断した。燃焼部の底面には、小さな凹凸がみられたが、掘り込みはみられなかった。

遺構の切り合い関係は、第21号区画溝より新しかった。

遺物は、カマド前面から須恵器の高台付椀（1）、土師器の甕（6・7・9）が出土した。

1・2は、須恵器（HS）の高台付椀である。2は黒色の付着物が内面口縁部から底部にかけて確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

第242表 第164号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
3	坏	C	H	12.4	3.0		8.8	D, E, G, H	普通	黄 褐	80	
4	坏	A	V	H	11.7			B, C, E	普通	淡 橙	20	
5	坏	A	VI	H	12.0		9.4	B, E	良好	黒 褐	10	
6	高台付椀	K					8.1	D	良好	灰 白	10	
7	甕底部	H					5.2	B, E	良好	黄 橙	100	カマド

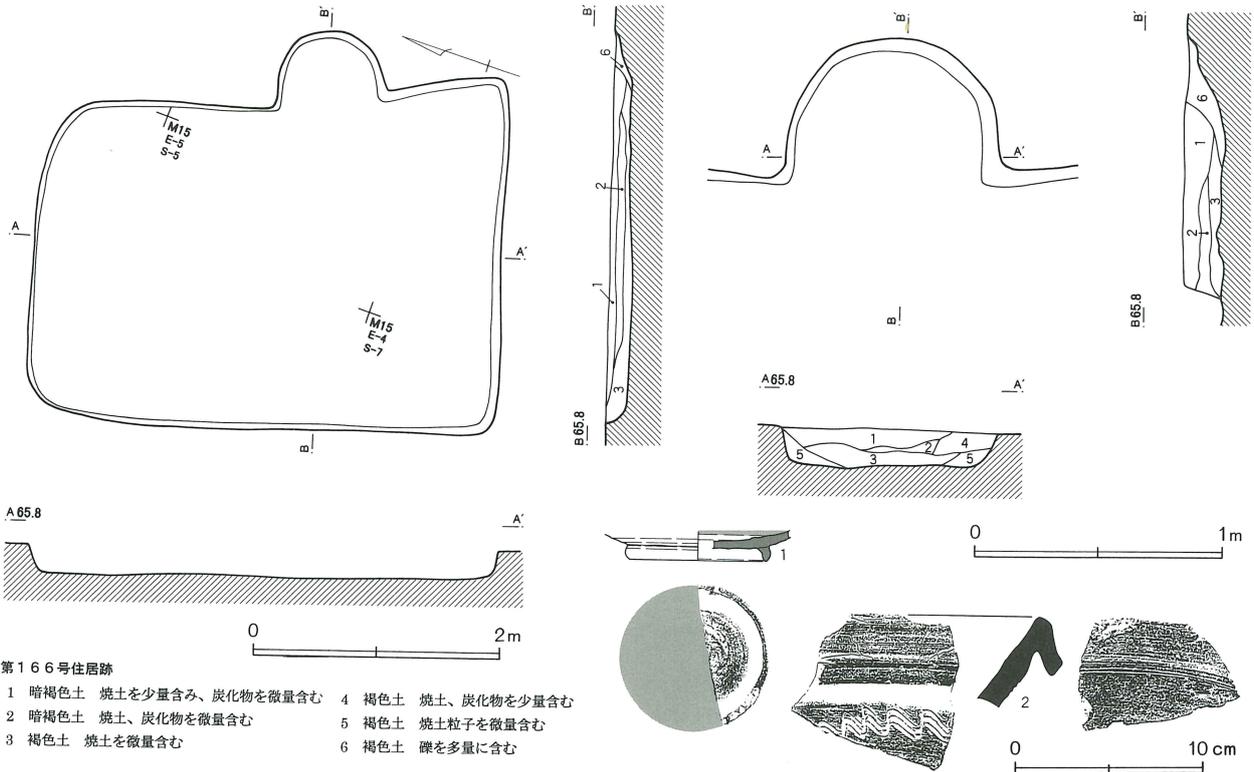
第243表 第165号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	HS	11.8	4.7		5.6	B, C, H	やや不良		橙	15	
2	高脚高台付鉢	HS				15.2	A, B, C, E	良好		外-浅黄橙。 内-橙	15	

第244表 第166号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付皿	K				7.2	D	良好		淡 灰 白	20	
2	大甕	S					B, K	良好		青 灰	5	

第283図 第166号住居跡・出土遺物



第166号住居跡

- 1 暗褐色土 焼土を少量含む、炭化物を微量含む
- 2 暗褐色土 焼土、炭化物を微量含む
- 3 褐色土 焼土を微量含む
- 4 褐色土 焼土、炭化物を少量含む
- 5 褐色土 焼土粒子を微量含む
- 6 褐色土 礫を多量に含む

3は、灰釉陶器の高台付皿である。
 4・5は、緑釉陶器の高台付椀である。体部破片である。
 6から8は、土師器の甕である。9は、須恵器(HS)の羽釜である。6は胴部下位以下、7は胴部中位

以下、8は胴部中位以上、9は胴部上位以下が欠損している。
 10は、土錘である。
 以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第167号竈穴式住居跡を中堀Ⅶ期に位置付けたい。

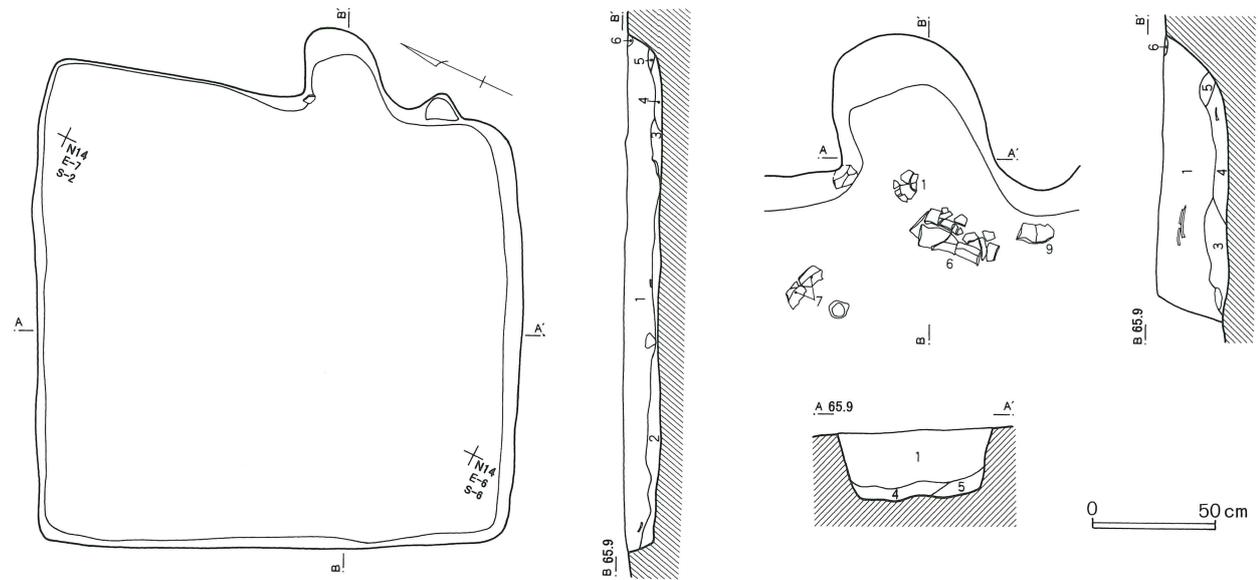
第245表 第167号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	罅	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	HS	12.1	5.6		5.1	A, B, G, H, K	やや不良		浅黄橙	30	
2	高台付椀	HS	12.7	5.2		5.2	B, E, I	普通		にぶい黄橙	60	
3	高台付皿	K	14.3	3.0		6.3	B	良好		淡灰	20	
4	高台付椀	M					B	普通		淡緑	5	
5	高台付椀	M					B	普通		淡緑	5	
6	甕 A III c	H	19.2				B, E	良好		にぶい黄橙		
7	甕 A III d	H	17.5				A, B, E, I	良好		にぶい橙	25	
8	甕底部	H				5.2	B, E, H	良好		外-灰黄。 内-浅黄橙	40	
9	羽 A II a イ	HS	20.0		3.5		A, B, C, G, H	良好		浅黄橙	20	

第246表 第167号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
10	にぶい灰黄	80		1.0	0.3	2.5	C2	Ic	414	

第284図 第167号住居跡・出土遺物

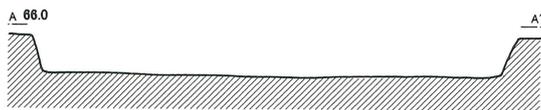


第167号住居跡

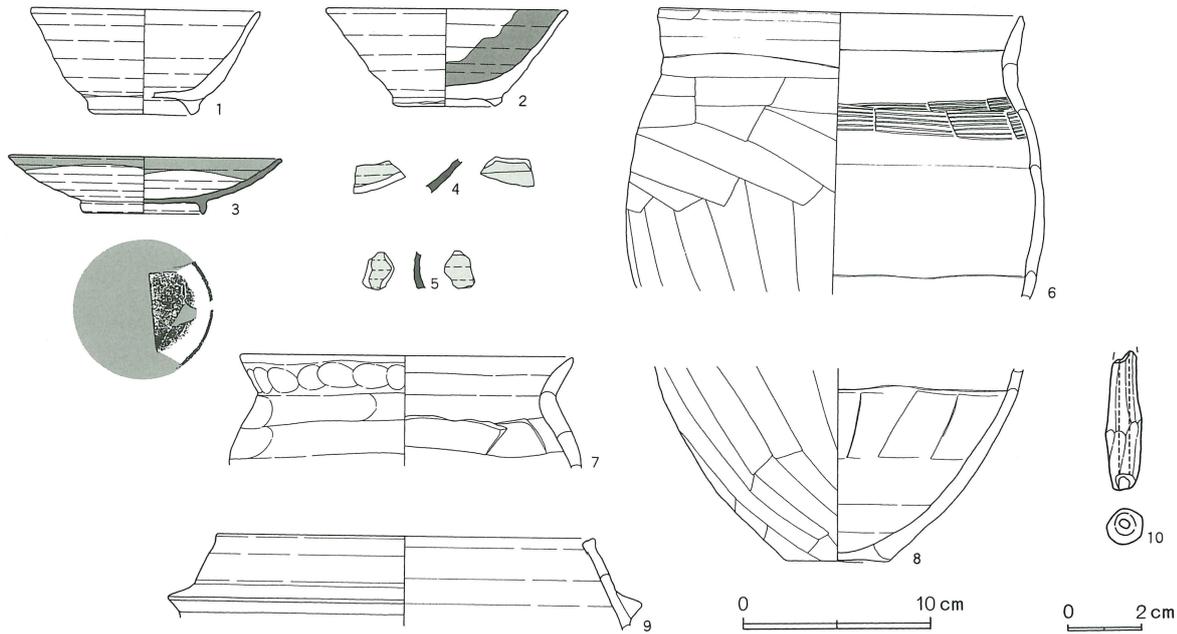
- 1 黒褐色土 焼土を多量に含み、炭化物、B軽石、礫を少量含む
- 2 黒褐色土 焼土、炭化物を多量に含み、黄褐色

土ブロックを含む 粘性あり

- 3 黒褐色土 焼土、炭化物を少量含む 粘性あり
- 4 黒褐色土 焼土、炭化物を少量含む、焼土ブロックを多量に含む 粘性あり
- 5 黒褐色土 焼土ブロックを多量に含む
- 6 赤褐色土 焼土ブロック主体



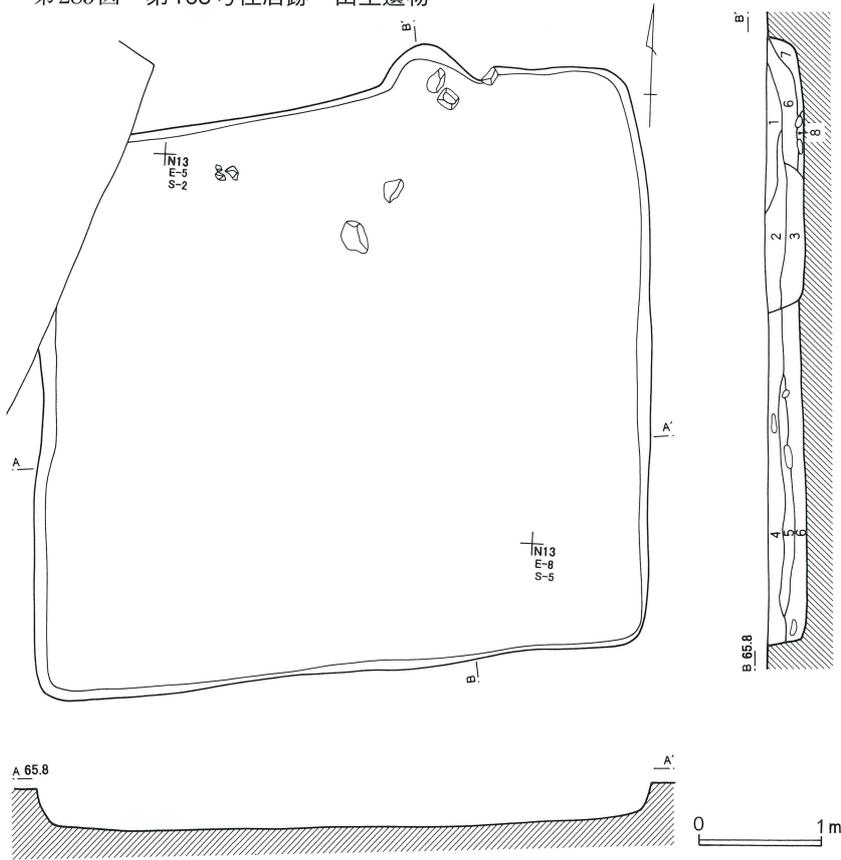
0 1m



第247表 第168号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鋳	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A	IV	H	13.0		8.6	B, E	普通		明橙	20	
2	段皿	M	M	17.6			B	普通		灰白	10	
3	高台付皿	M	M				B	普通		淡緑	5	

第285図 第168号住居跡・出土遺物



第168号住居跡（第285図）

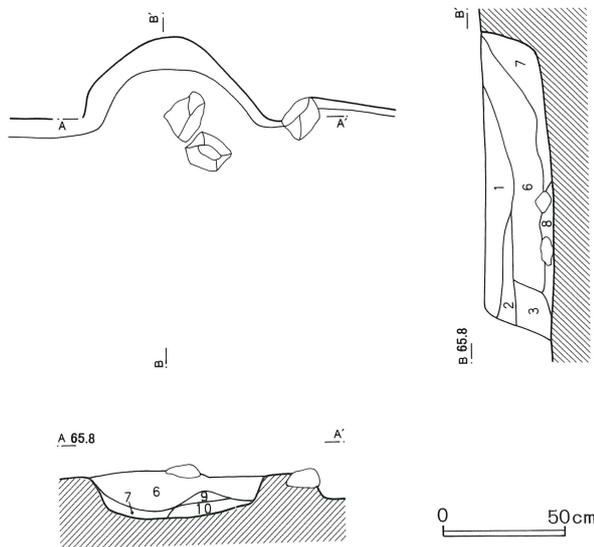
N-13グリッドで確認した。周辺は、住居跡・溝・土壇・などの遺構が激しく重複し、確認に手間取った。

住居跡北西隅は調査区外のため、全容は不明であった。

住居跡の形状は、不整形であった。規模は、長辺4.90m・短辺4.62m・深さ0.40mであった。

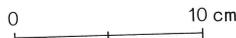
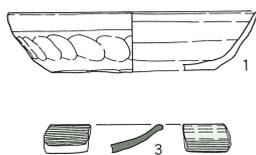
主軸方位は、N-4°-Wであった。

カマドは、北壁のやや東寄りに検出した。袖は検出できなかったが、燃焼部の残存状況から、造り付けカマドであったと判断した。燃焼部の底面には、掘り込みがみられなかった。



第168号住居跡

- 1 暗黒褐色土 礫、小石を多量に含む 粘性あり
- 2 淡暗灰褐色土 焼土、炭化物を少量含む 粘性あり
- 3 暗青黒色土 炭化物を少量含む 粘性あり
- 4 褐色土 焼土、炭化物を多量に含む
- 5 淡灰褐色土 焼土、炭化物を多量に含む
- 6 褐色土 粘性あり
- 7 暗黄褐色土 焼土、炭を少量含む 粘性あり
- 8 灰褐色土 焼土、炭化物を多量に含む 粘性あり
- 9 赤褐色土 焼土主体 炭を少量含む
- 10 暗黄褐色土 焼土を少量含む 砂質



遺構の切り合い関係は、第20号区画溝、第406・407号土壇より新しかった。

1は、土師器の坏AⅣである。底部が欠損している。

2・3は、緑釉陶器である。2は段皿、3は高台付皿である。2は底部が欠損している。3は口縁部破片である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第168号竪穴式住居跡を中堀Ⅳ期に位置付けたい。

第169号住居跡（第286図）

N-14グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壇・

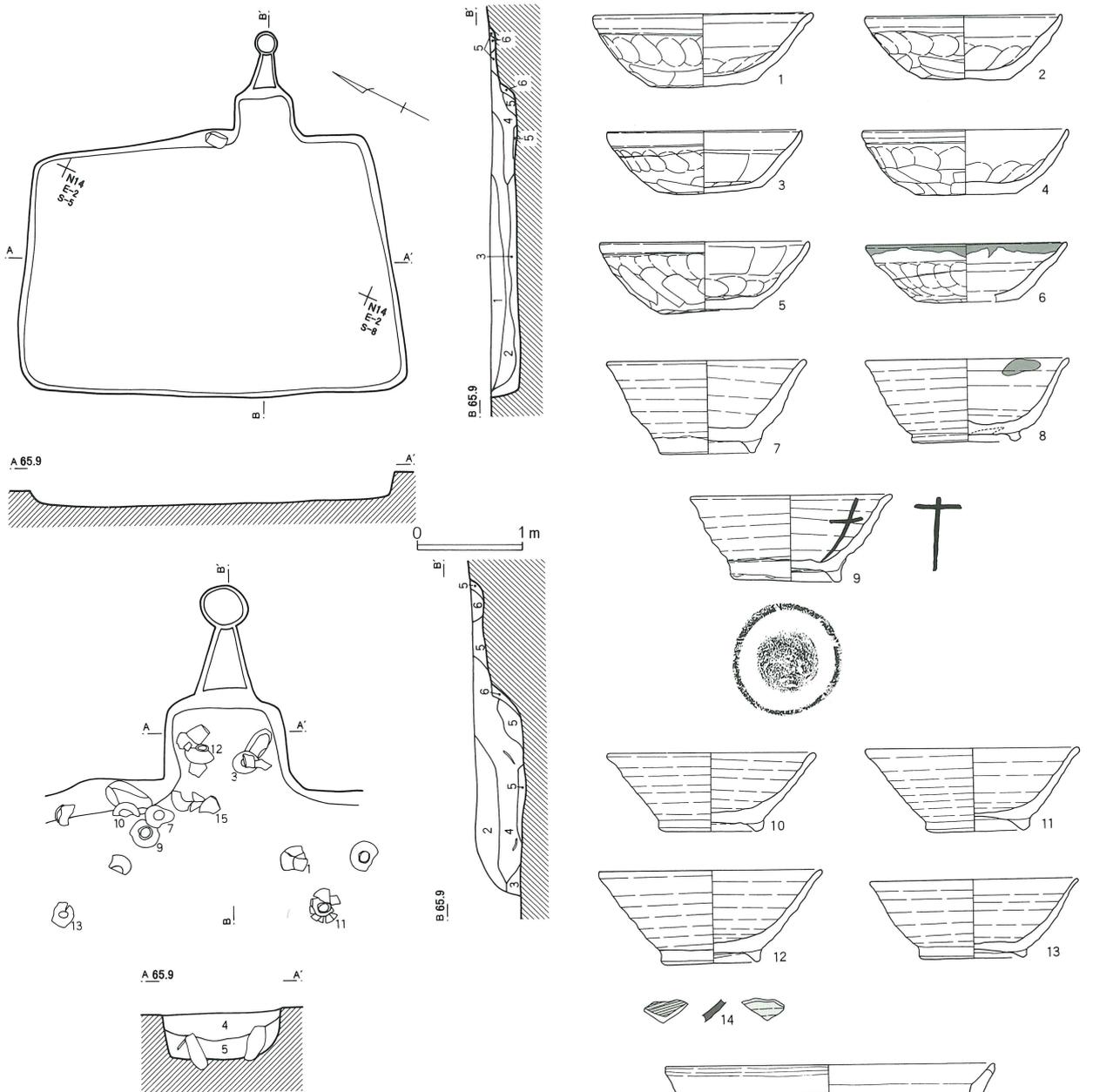
小穴などの遺構が密集し、さらに第21号区画溝の覆土と類似したため、確認に手間取った。隣接した第167号住居跡とは、ほぼ同じ主軸方位であった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.45m・短辺2.30m・深さ0.24mであった。

主軸方位は、N-65°-Eであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。袖は検出できず、当初から造られなかったと判断した。燃焼部は整った方形で、底面の掘り込みはみられなかった。燃焼部内に川原石を使用した支脚が、並んで出土した。

第286図 第169号住居跡・出土遺物



第169号住居跡

- 1 こげ茶色土 焼土、炭化物を少量含む 粘性あり
- 2 こげ茶色土 焼土、炭化物を多量に含む 粘性あり
- 3 こげ茶色土 焼土、炭化物少量含む (1層より明るい)
- 4 暗褐色土 焼土、炭化物を少量含む 粘性あり(天井部)
- 5 黒色土 焼土を少量含む(炭化物層)
- 6 赤褐色土 炭化物を微量含む(焼土層)

0 50 cm

0 10 cm